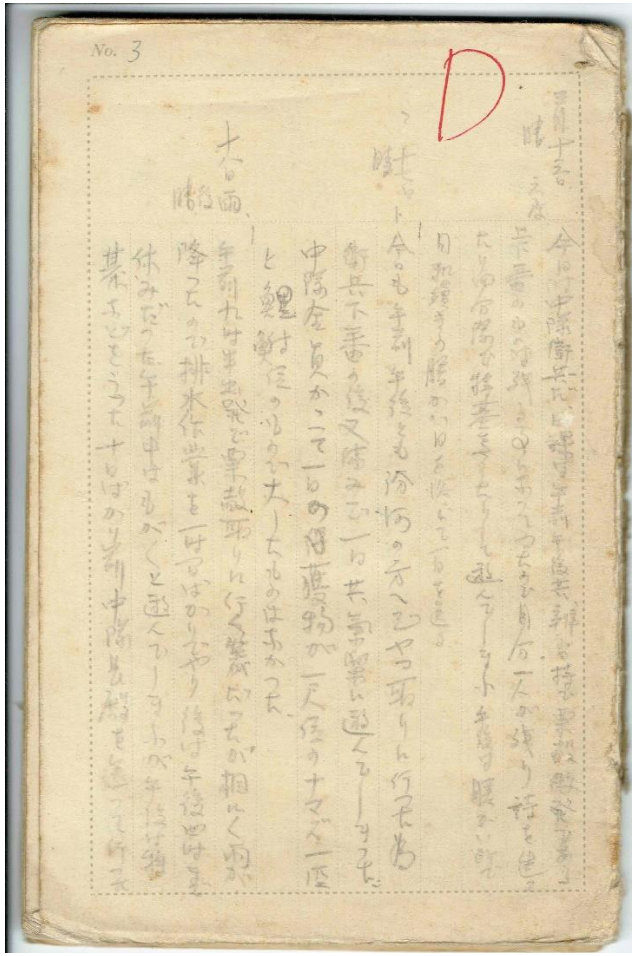
# 日中戦争日記Ｄ（北支戦線：1938 年 3 月 16 日～1938 年 5 月 16 日）

（以下、左半分は現本の写し）



（参考：兵歴簿の関係個所抜粋）

【履歴】　昭和 13 年 3 月 11 日ヨリ 6 月 25 日迄　占領地肅清戰ニ参加

（以下、右半分は判読文）

（注）○は判読不能文字、【 】内および□内は判読者の注記、※は引用資料に関する引用者の注釈等、[ ] 内は資料出所を示す。明らかな誤字・当て字等は訂正し、日記本文・引用文とも句読点および濁点を適宜加除した。

【Dの日記は 靈 石（れいせき） に駐在しているところから始まっている。】

【1938 年】3 月 16 日　晴　6 度

今日は中隊衛兵だ。日課は午前、午後共、辧（弁）当持で粟 穀（ぞっこく）徴発である。

上下番の中の時、残る事になって ゐ（い）たので、自分一人が残り、詩を造ったり【第】四分隊で将棋をさしたりして遊んでしまふ。

午後は暖かい所で日和續（続）きの暖かい日を浴びて一日を送る。

17 日　晴

今日も午前・午後とも汾河（ふんが）の方へジャコ取りに行った為、衛兵下番の後、又休みで 1 日共氣樂（気楽）に遊んでしまった。

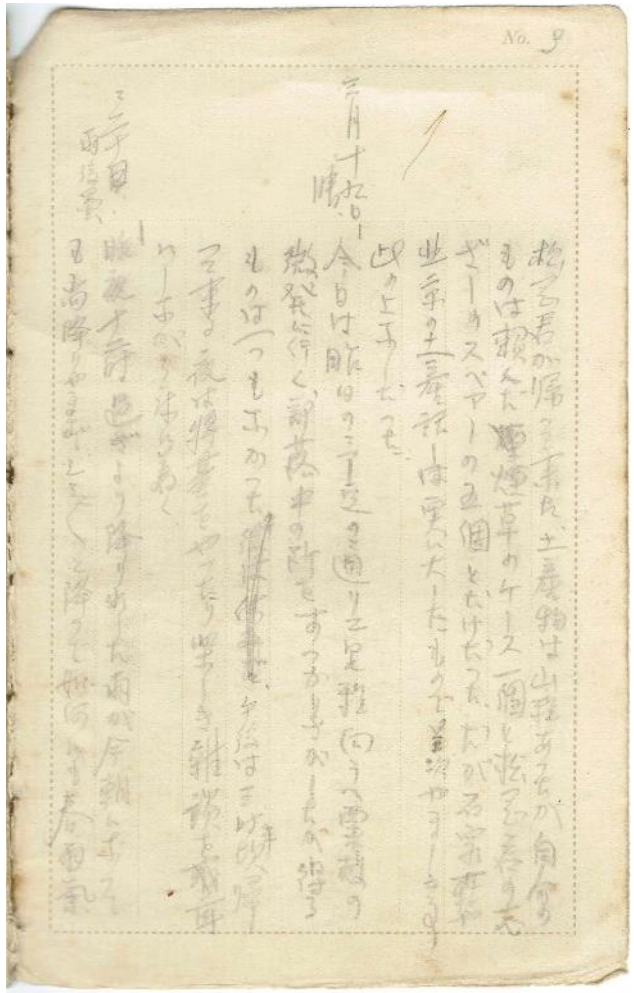
中隊全員かゝって 1 日の獲物が 1 尺位のナマズ 1 匹と鯉・鮒位のもので、大したものはなかった。

18 日　雨後晴

午前 9 時半出発で粟穀取りに行く筈だったが、相（生）にく（憎）雨が降ったので排水作業を 1 時間ばかりでやり、後は午後 4 時まで休みだった。

午前中はもがもがと遊んでしまふが、午後は將棋などをうった。

10 日ばかり前、中隊長殿を送って行った



松岡君が帰って来た。

土産物は山程あったが、自分のものは頼んだ煙草のケース 1 個と、松岡君の志ざしのスペアーの 5 個とだけだった。

だが、石家荘（せっかそう）や北京の土産話しは実に大したもので、羨やましき事、此の上なしだった。

【1938 年】3 月 19 日　晴

今日は昨日の予定の通り、2 里【≒8ｋｍ】程向うへ粟穀（ぞっこく）の徴発に行く。

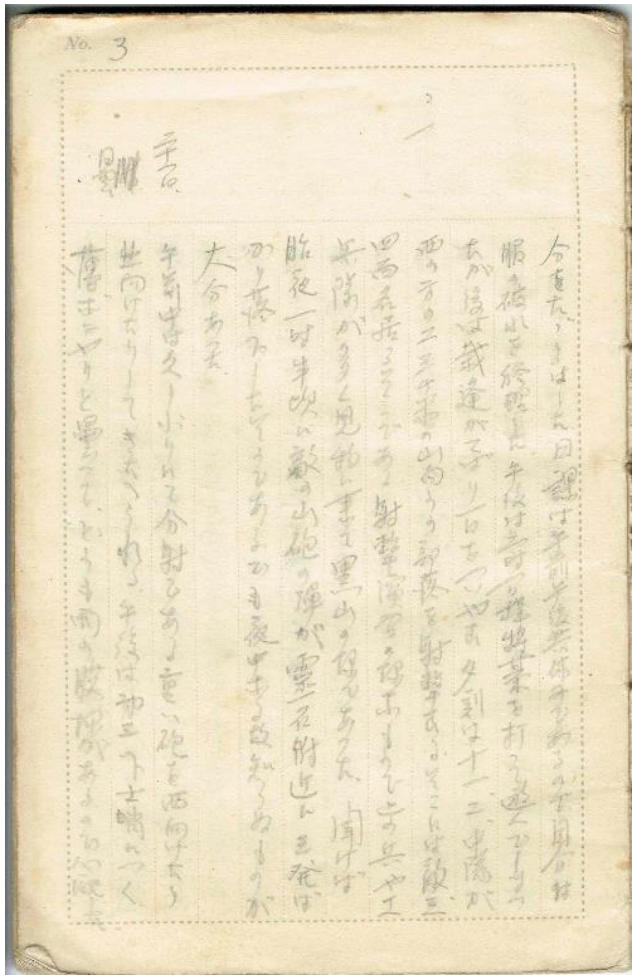
部落中の所をすっかりさがしたが得るものは一つもなかった。

午後は 3 時半頃帰って来る。

夜は将棋をやったり、樂（楽）しき雑談を耳にしながら床に着く。

〃　20 日　雨後曇

昨夜 12 時過ぎより降り出した雨が、今朝になっても尚降りやまず、シミシミと降って、如何にも春雨氣（気）



分をたゞよはした。

日課は午前・午後共休みであるので、自分は服の破れを修理した。

午後は 2 時間程將棋を打って遊んでしまったが、後は裁縫がてばり（手張）、1 日をついやす。

夕刻は【第】十一、二中隊が、西の方の 2・30 千米（m）の山向うの部落を射撃する。

そこには敵 3・4 百名居るそうである。

射撃演習の様なもので、歩兵や工兵隊が多く見物に来て、黒山の様であった。

聞けば昨夜 1 時半頃に敵の山砲の彈が靈石（れいせき）附近に 3 発ばかり落下したそうである。

でも夜中なる故、知らぬものが大分あった。

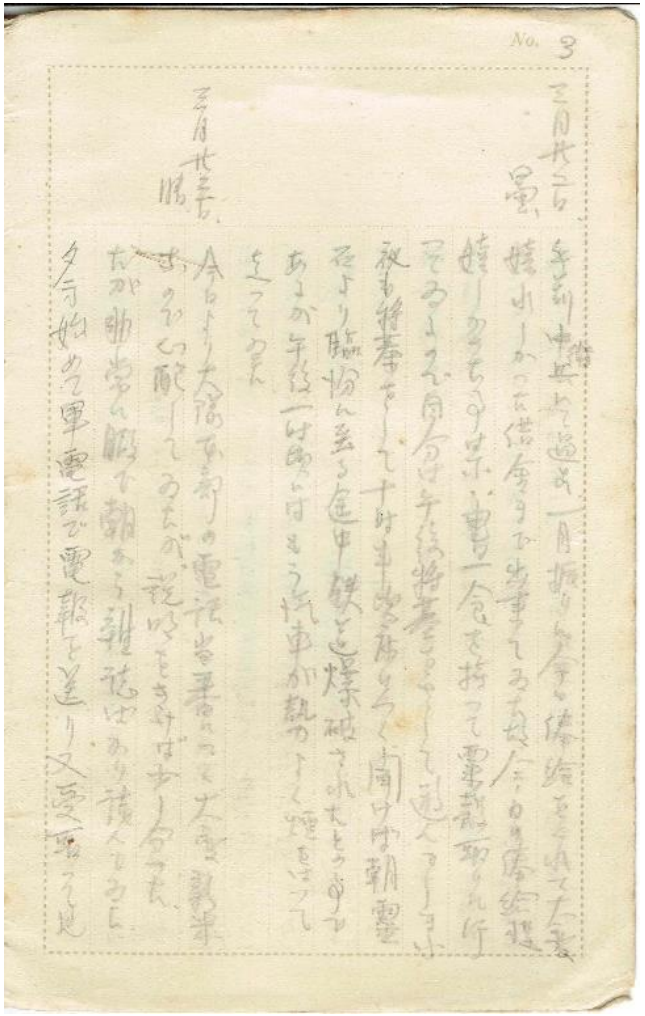
【1938 年 3 月】21 日　曇

午前中は久しぶりにて分射である。

重い砲を西向けたり、北向けたりして、きたへ（鍛え）られる。

午後は第 3 下士哨（かししょう）【下士哨は歩哨の一種で、歩哨線の中で特に重要な地点、または交代不便な地点において、下士官または上等兵を長とする 4～7 名で行う】につく。

薄ボンヤリと曇って、どうも雨の模様があるので心配した。



【1938 年】3 月 22 日　曇

午前中、衛兵にて過す。

1 月振りに今日、俸給をくれて大変嬉れしかった。

借金まで出来てゐた故、今日の俸給程嬉しかった事はない。

【他の人たちは】晝食を持って粟穀取りに行ってゐるので、自分は午後、將棋をさして遊んでしまふ。

夜も將棋をして、10 時半頃床につく。

聞けば朝、靈石より臨汾に到る途中、鉄道【が】爆破されたとの事であるが、午後 1 時頃にはもう汽車が勢よく煙をはいて走ってゐた。

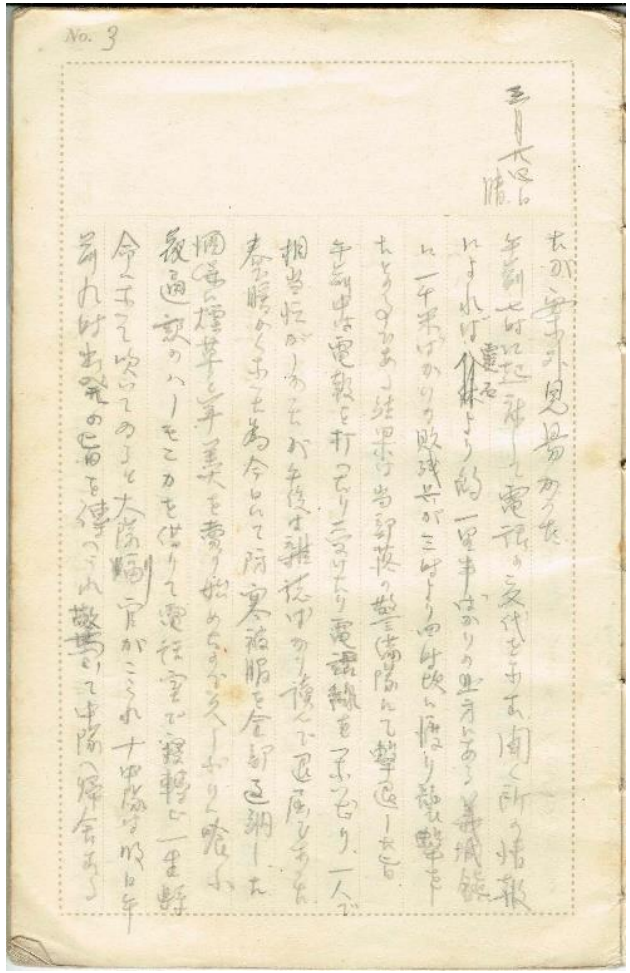
3 月 23 日　晴

今日より大隊本部の電話当番につく。

大変新米なので心配してゐたが、説明をきけば少し分った。

だが、非常に暇で、朝から雑誌ばかり讀んでゐた。

夕方、初めて軍電話で電報を送り、又受取って見



たが、案外見易かった。

【1938 年】3 月 24 日　晴

午前 7 時に起床して電話の交代をなす。

聞く所の情報によれば、靈石（れいせき）より約 1 里半【≒6ｋｍ】ばかりの北方にある義城鎮に、1 千名ばかりの敗残兵が 3 時より 4 時頃に渡り襲撃をしたとの事である。

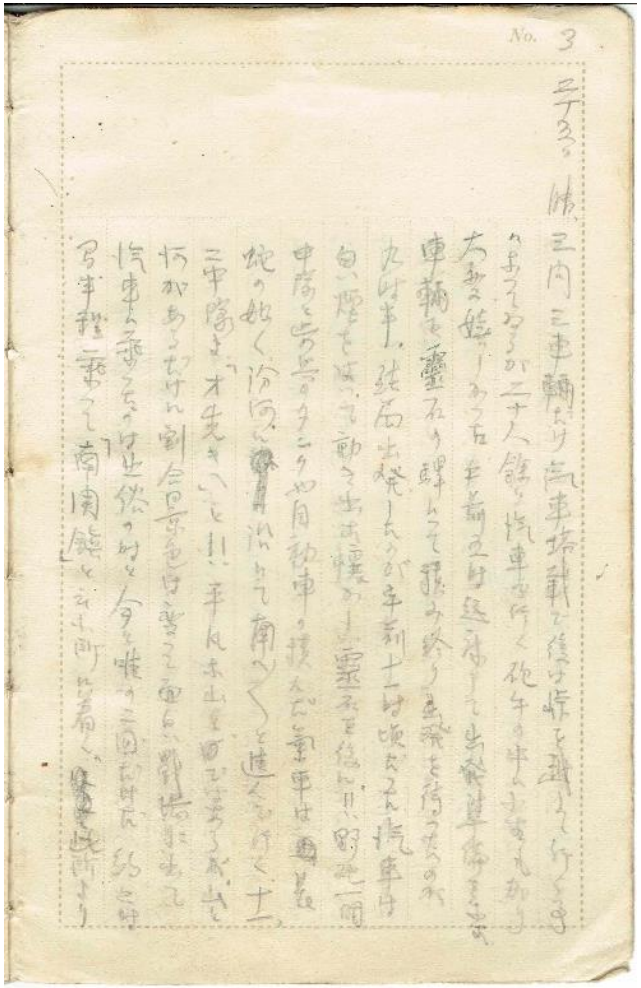
結果は、当部落の警備隊にて撃退した旨。

午前中は電報を打ったり、受けたり、電話線をつないだり、1 人で相当忙がしかったが、午後は雑誌ばかり讀（読）んで退屈であった。

春で暖かくなった為、今日にて防寒被服を全部返納した。

酒保に煙草と羊羹を賣（売）り始めたので、久しぶりに喰ふ。

夜、通訳のハーモニカを借りて電話室で寝轉（転）び、一生懸命になって吹いてゐ（い）ると、大隊副官がこられ、【第】十中隊は、明日午前 9 時出発の旨を傳（伝）へられ驚いて中隊へ帰舎する。



【1938 年 3 月】25 日　晴

【第十中隊の砲 4 門のうち】3 門 3 車輛だけ汽車搭載で、後は【徒歩・馬で】峠を越して行く事になってゐるが、20 人餘り汽車で行く砲手の中に小生も加り、大変嬉しかった。

午前 5 時起床して、出発準備をなす。

車両を靈石の驛にて積み終り、出発を待ったのが 9 時半。

結局、出発したのが午前 11 時頃だった。

汽車は白い煙をはいて動き出す。

懐かしい靈石を後に!!

野砲 1 個中隊と歩兵のタンクや自動車の積んだ氣車は、長蛇の如く汾河に沿いて南へ南へと進んで行く。

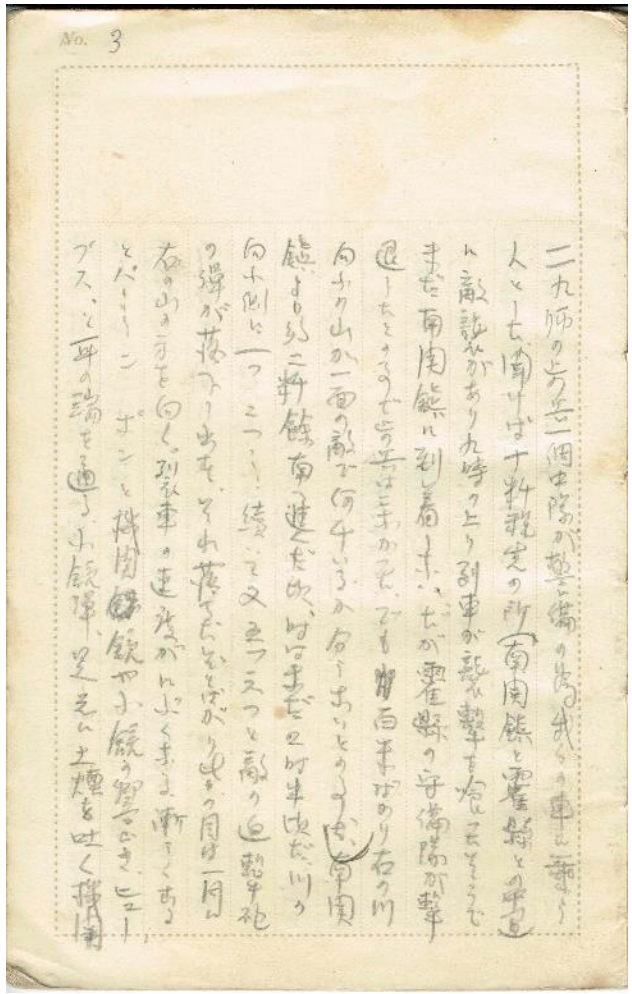
【徒歩・馬で行軍する第】11・2 中隊よ、「オ先キヘ」と!!

平凡な山と【河？】ではあるが、山と河があるだけに、割合景色は変って面白い。

戰場に出て汽車に乗ったのは北俗の時【「Ｂの日記」の中の出来事か？】と今と、唯の 2 回だけだ。

約 2 時間半程乗って「南関鎮」と云ふ所に着く。

此所より



119 師【おそらく第 109 師団の誤り】の歩兵 1 個中隊が警備の為、我々の車に乗らんとした。

聞けば 10㌔程先の所（南関鎮と霍縣（かくけん）との中間）に敵襲があり、9 時の上り列車が襲撃を喰ったそうで、まだ南関鎮に到着しない。

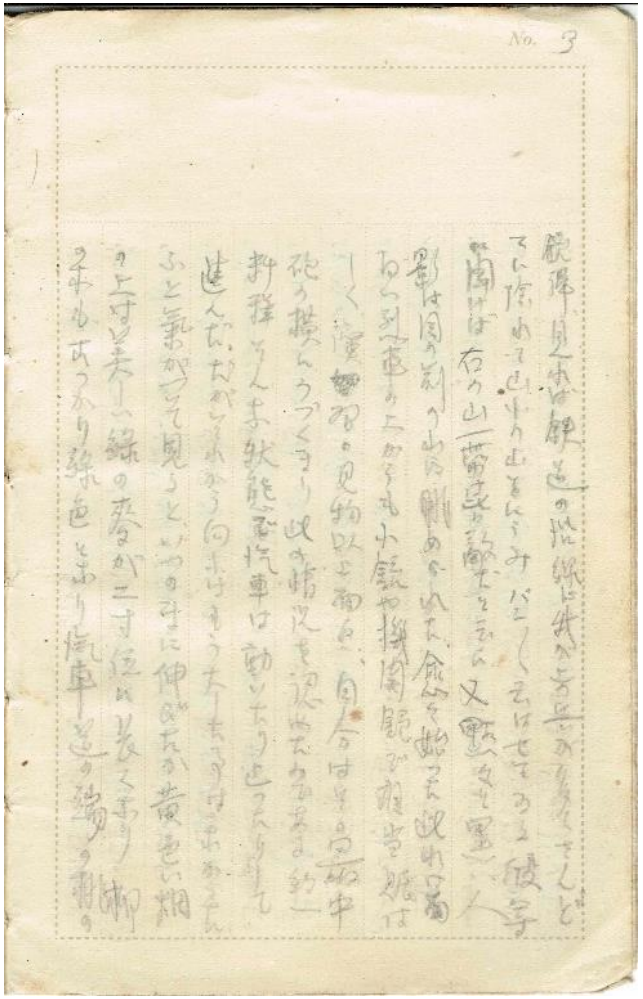
だが、霍縣の守備隊が撃退したとの事で、歩兵はこなかった。

でも、100㍍ばかり右の川向ふの山が一面の敵で、何千いるか分らないとの事だ)、南関鎮より約 2㌔餘南へ進んだ頃、時は未だ 2 時半頃だ、川の向ふ側に、1 つ、2 つ…續（続）いて又 5 つ、6 つと敵の迫撃砲の弾が落下し出す。

それ落ちたぞとばかり、皆の目は一同に右の山の方を向く。

列車の速度がにぶくなる。

暫らくするとパーーン、ポンと機関銃や小銃の響びき、ヒュー、プスと耳の端を通る小銃弾、足元に土煙を吐く機関



銃彈、見れば鉄道の沿線に我が歩兵がたくさんど(土手)てに隠れて山小の山をにらみ、パンパン云はせてゐ(い)る。

〇等を聞けば、右の山一帯は皆敵だと云ひ、又、黙々と黒い人影は目の前の山に眺められた。

愈々(いよいよ)始った。此れは面白い。

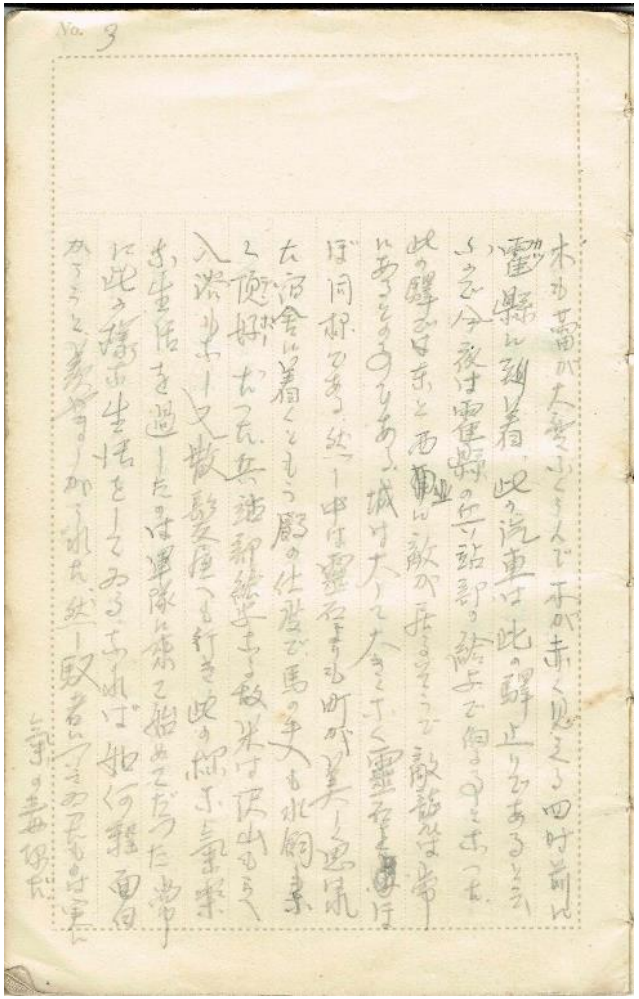
列車の上からも小銃や機関銃で相当賑はしく、演習の見物以上【に】面白い。

自分はその最中、砲の横にうづくまり、此の情況を認めたのである。

約１粁(ｋｍ)程そんな状態で、汽車は動いたり止ったりして進んだ。

だが、それから向ふはもう大した事はなかった。

ふと氣(気)がついて見ると、いつのまに伸びたか、黄色い畑の上は美しい緑の麥(麦)が２寸【≒6ｃｍ】位に長くなり、柳の木もすっかり緑色となり、汽車道の端の桃の



木も蕾が大変ふくらんで、木が赤く見える。

4 時前に霍縣(かくけん)に到着。

此の汽車は此の驛(駅)止りであると云ふので、今夜は霍縣の兵站部(へいたんぶ)【軍需品の補給、輸送などを行っている部隊】の給与で〇る事となった。

此の驛(駅)では東と西北に敵が居るそうで、敵襲(てきしゅう)は常にあるとの事である。

城は大して大きくなく、靈石(れいせき)とほぼ同様である。

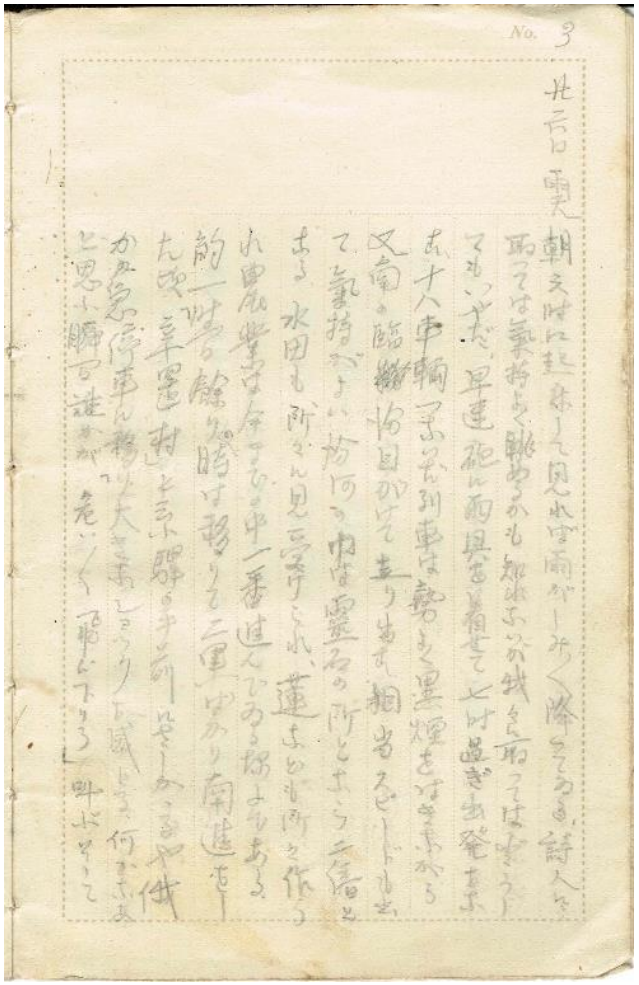
然し、中は靈石よりも町が美しく思はれた。

宿舎に着くと、もう厩(うまや)の支度で馬の手入も水飼(みずかい)もなく、頂好(テンホー)だった。

兵站部給与なる故、米は沢山もらへ、入浴もなし(為)、又、散髪屋へも行き、此の様な氣(気)楽な生活を過したのは、軍隊に來(来)て初めてだった。

常に此の様な生活をしてゐ(い)るなれば、如何程(いかほど)面白かろうと、羨やましがられた。

然し、【汽車移動ではなく】馭者についてゐ(い)ったものは実に氣(気)の毒様だ。



【1938 年 3 月】26 日　雨天

朝 6 時に起床して見れば、雨がしみしみ降ってゐる。詩人に取っては氣持よく眺めるかも知れないが、我々に取ってはどうしてもいやだ。

早速、砲に雨具を着せて、7 時過ぎ出発をなす。

18 車輌つないだ列車は勢よく黒煙をはきながら、又南の臨汾目がけて走り出す。相当スピードも出て気持ちがよい。

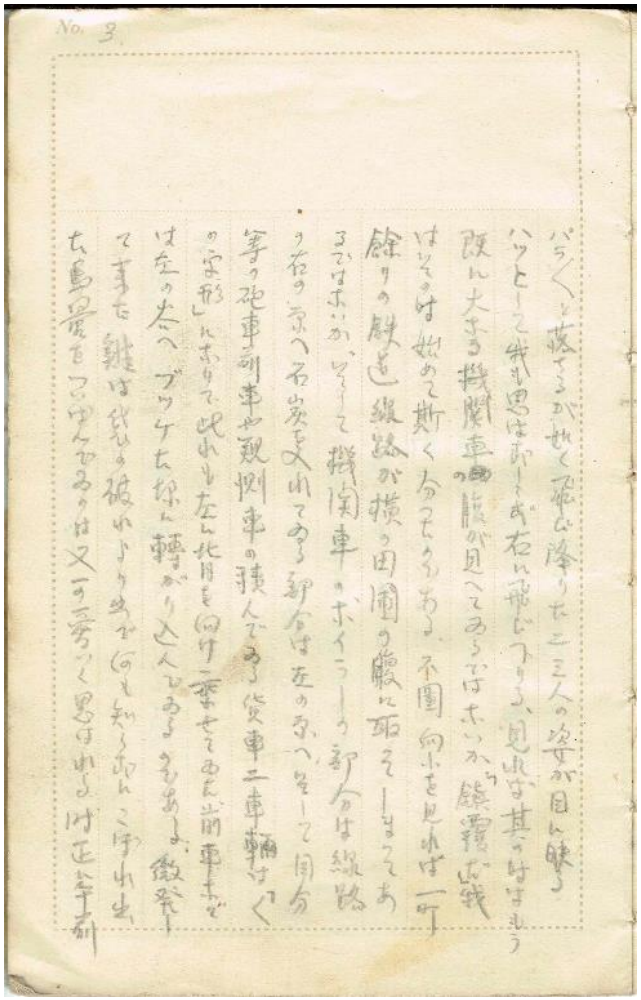
汾河の巾は靈石の所となら、2 倍となる。

水田も所々に見受けられ、蓮なども所々に作られ、農業は今までの中、一番進んでゐる様である。

約 1 時間餘りの時は移りて、2 里【≒8ｋｍ】ばかり南進をした頃、「辛置村」と云う驛の手前にさしかゝるや、俄かの急停車に移り、大きなショックを感じる。

何かなあと思ふ瞬間、誰かが「危い危い、飛び下りろ」【と】叫ぶ。

そして



パラパラと落ちるが如く飛び降りた２・３人の姿が目に映る。

ハッとして我も思はずしてず右に飛び下りる。

見れば其の時はもう既に大なる機関車の腹が見へてゐるではないか。

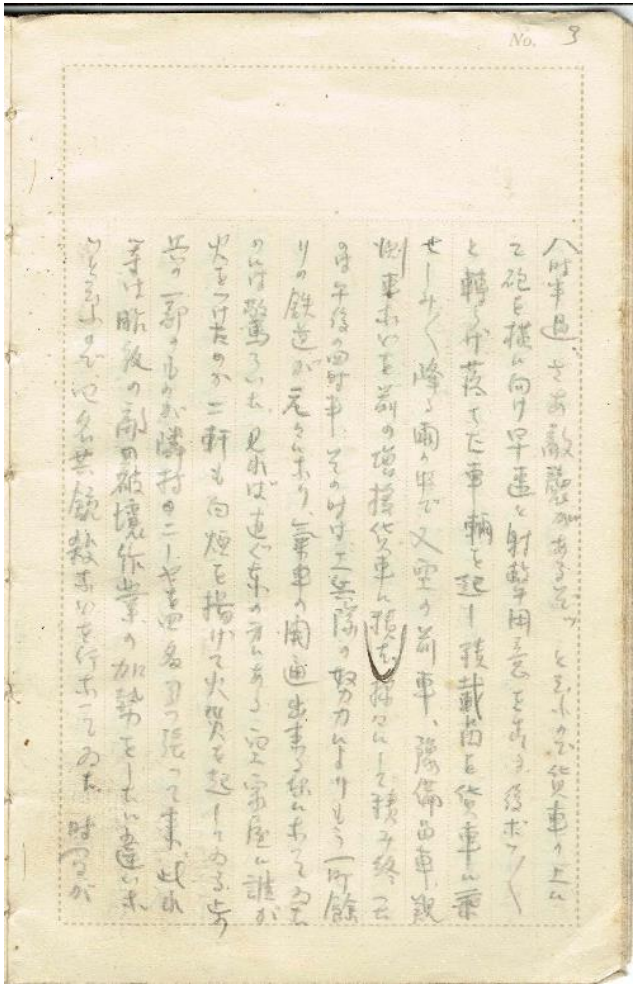
「轉覆だ」我はその時初めて斯く分ったのである。

不圖、向ふを見れば１町【≒220m】餘りの鉄道線路が横の田圃の腹に取ってしまってあるではないか。

そして機関車のボイラーの部分は線路の右の原へ、石炭を入れてゐる部分は左の原へ、そして自分等の砲車、前車や観測車の積んでゐる貨車２車輌は「くの字形」になりて、此れも左に背を向け、乗せてゐた【大砲の】前車などは左の谷へ、ブツケた様に轉がり込んでゐるのである。

徴発して来た鶏は袋の破れより出で、何も知らずにこぼれ出た馬量【馬の餌】をついばんでゐるのは、又可愛いく思はれる。

時、正に午前



8 時半過、さあ敵襲があるぞッと云ふので、貨車の上にて砲を横に向け、早速と射撃用意をする。

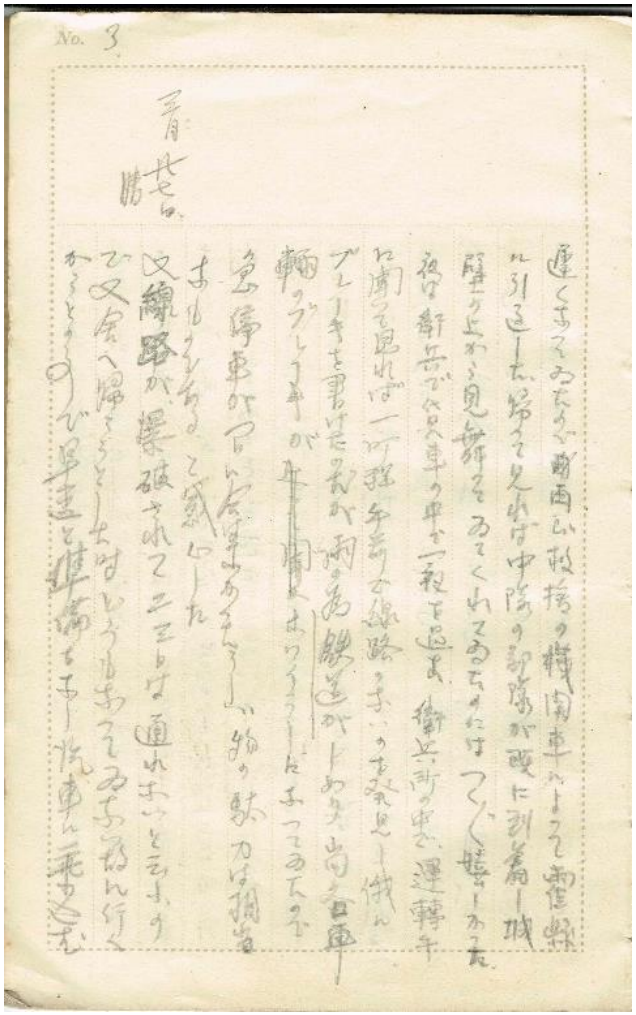
後、ボツボツと轉(転)げ落ちた車輛を起し、積載品を貨車に乗せ、しみしみ降る雨の中で、又空の前車、豫(予)備品車、観測車などを前の増援貨車に積む。

様々にして積み終ったのは午後の 4 時半、その時は工兵隊の努力により、もう 1 町【≒110m】餘(余)の鉄道が元々になり、氣(気)車の開通出来る様になってゐ(い)たのには驚ろいた。

見れば直ぐ東の方にある空家屋に誰が火をつけたのか、2 軒も白煙を上げて火災を起してゐ(い)る。

歩兵の一部のものが、隣村のニーヤを 4 名引っ張って来、此れ等は昨夜の敵の破壊作業の加勢をしたに違いないと云ふので、4 名共銃殺などを行ってゐ(い)た。

時間が



遅くなってゐたので、再び救援の機関車によって霍(かくけん)縣に引返した。

帰って見れば、【徒歩の】中隊の部隊が既に到着し、城壁の上から見舞ってゐてくれてゐたのには、つくづく嬉しかった。

夜は衛兵で貨車の中で一夜を過す。

衛兵所の中で運轉(転)手に聞いて見れば、1 町【≒110m】程手前で線路のないのを発見し、俄にブレーキを掛けたのだが、雨の為、鉄道がしめり、尚、各車輌のブレーキがホワイラー【壊了(ファイラ)＝「壊れている」？】になってゐたので、急停車が間に合はなかったらしい。

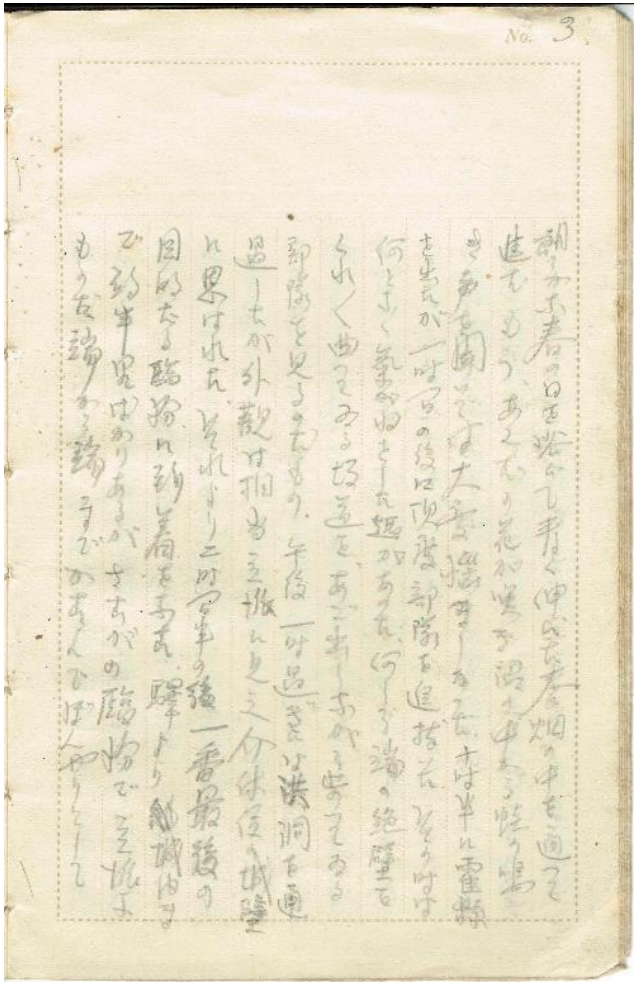
物の惰力は相当なものであると感心した。

この辺りでは敵の鉄道破壊工作が頻繁で復旧作業が追い付かない状態だったようで、第 1 軍機密作戦日誌の 1938 年 4 月 21 日に「介休縣(かいきゅう県)ヨリ作業隊ハ…南方ニ向ヒ修理中ナレド、敵ノ為妨害サレ、作業意ノ如クナラズ、シカノミナラズ修理ヲ終了、前進セバ後方ハ直ニ破壊セラル如キ状態」との報告がある。

［アジア歴史資料センターC11110969600 第 1 軍機密作戦日誌(防衛省) 画像 53 枚目］

【1938 年】3 月 27 日　晴

又、線路が爆破されて 2・3 日は通れないと云ふので、又舎へ帰ろうとした時、どうもなってゐない故に行くからとの事で、早速と準備をなし、汽車に乗込む。



朗らかな春の日を浴びて、青く伸びた麥畑の中を通って進む。もう、あんずの花が咲き、沼の中から蛙の鳴き声を聞いては、大変悩ましかった。

10 時半に霍縣を出たが、1 時間の後に丁度【徒歩で行った】部隊を追抜いた。

その時は何となく氣がねをした趣があった。何しろ端の絶壁をくれくれ曲ってゐる坂道を、あご出しながら歩いてゐる部隊を見るのだもの。

【1938 年 2 月の「山西省給水調査」報告書中、「同蒲鐵路沿線南部地域概況」の項によれば、「太原平地ノ南部、介休ノ南方ニ於テ相迫リテ、之ヨリ南方約 40 ｋｍ粁ノ間、峻嶮ナル山地トナリ、靈石、霍縣ハ此ノ間ニアリ。… 同蒲鐵路ハ、介休ヨリ靈石、臨汾、聞喜等、諸都邑ヲ經テ蒲洲ニ至リ、自動車専用路概ネ之ニ沿ヒ、交通便ナルモ、靈石、霍縣間、韓信嶺ノ嶮ハ車行甚ダ困難ニシテ、登降共ニ、1 台臺ニ付、數十名ノ兵力ヲ以テ牽引スルニ非ザレバ通過シ難シ」とある。［アジア歴史資料センターC04120729000 陸支受大日記(防衛省) の画像 24 枚目］】

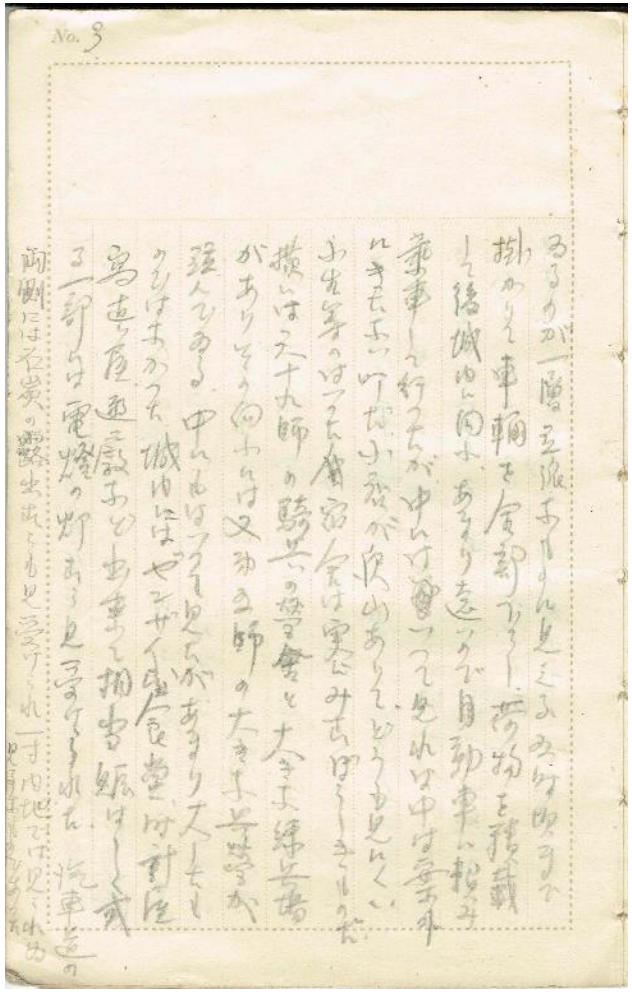
午後 1 時過ぎには洪洞を通過したが、外観は相当立派に見え、介休位の城壁に思はれた。

それより 2 時間半の後、一番最後の目的たる臨汾に到着をなす。

驛より城内まで約半里【≒2ｋｍ】ばかりあるが、さすがの臨汾で、立派なものだ。

端から端まで、かすんでぼんやりとして

【1938 年 3 月 2 日の「山西省給水調査」報告書によると、「臨汾…山西省南部ノ要地ニシテ同蒲線上、所謂臨汾平野ノ中央部ニアリ、古代帝王建都ノ地ニシテ、其ノ建設古ク、本城ト外城トニ區分セラレ、戸數5, 200、人口 25, 000、多クハ商業ニ從事シ官衙（※役所）、學校等多ク此ノ地ニ在リ。汾河ノ東岸約 1 里（※4ｋｍ）ノ平地ニアリ、土地概ネ平坦」［アジア歴史資料センターC04120729100 陸支受大日記(防衛省)画像 24 枚目］】



ゐるのが一層立派なものに見える。

5 時頃まで掛かりて車輌を全部下ろし、荷物を積載して後、城内に向ふ。

あまり遠いので自動車に頼み乗車して行ったが、中にはいって見れば、中は案外にきたない町だ。

小店が沢山ありて、どうも見にくい。

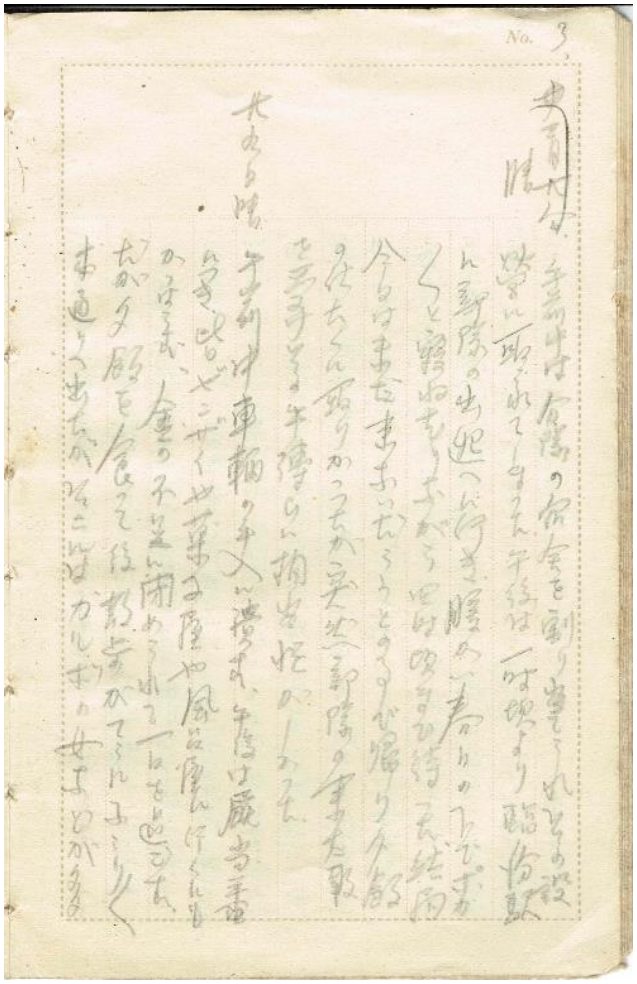
小生等のはいった宿舎は実にみすぼらしきものだ。

横には【中国軍】69 師の騎兵の營舎と、大きな練兵場があり、その向ふには又、第 5 師の大きな兵營が並んでゐる。

中にもはいって見たが、あまり大したものではなかった。

城内にはゼンザイ屋、食堂、時計屋、寫真屋、遊郭など出来て、相当賑はしく、或る一部には電燈の灯すら見受けられた。

汽車道の両側には石炭の露出すらも見受けられ、一寸内地では見られぬ、見事なものであった。



【1938 年】3 月 28 日　晴

午前中は分隊の宿舎を割り当てられ、その設営に取られてしまった。

午後は 1 時頃より臨汾駅に【徒歩移動組の】部隊の出迎へに行き、暖かい春日の下でポカポカと眠りながら、4 時頃まで待った。

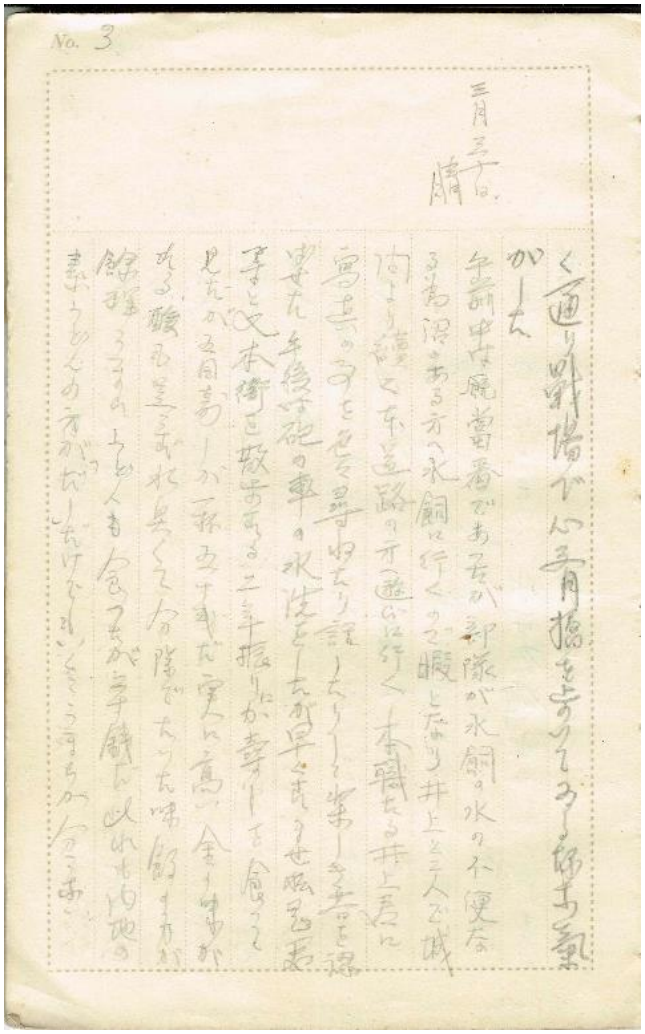
結局、今日は未だ来ないだろうとの事で帰り、夕飯の仕たくに取りかかったが、突然、部隊の来た報を受け、その手傳ひに相当忙しかった。

29 日　晴

午前中、車輌の手入れに潰す。

午後は厩当番につき、皆ゼンザイや、菓子屋や風呂屋に行くにもかゝはらず、金の不足に閉められて 1 日を過ごす。

だが夕飯を食って後、散歩がてらにふらりふらり本通りへ出たが、そこにはカルボ【(朝鮮の) 遊女】の女などが多



く通り、戦場で【大阪の】心斎橋を歩いてゐ(い)る様な氣(気)がした。

【1938 年】3 月 30 日　晴

午前中は厩當(当)番であったが、部隊が水飼(みずかい)の水の不便なる為、沼のある方へ水飼に行くので暇となり、井上と 2 人で城門より續(続)く東道路の方へ遊びに行く。

本職たる井上君に寫(写)真の事を色々尋ねたり話したりして楽しき昔を偲ばせた。

午後は砲の車の水洗をしたが、早くすませ、松岡君等と又本街を散歩する。

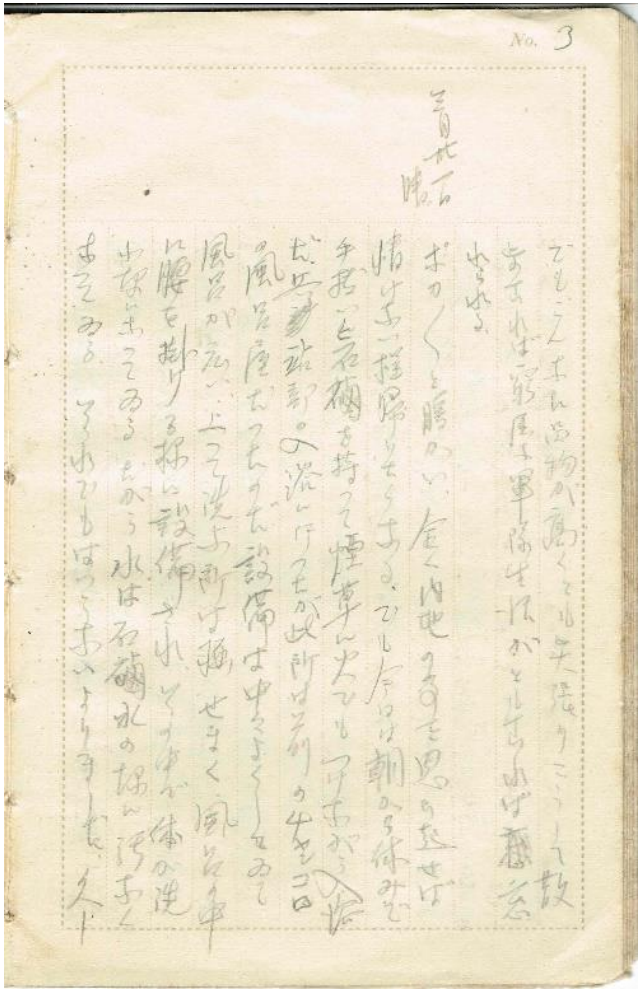
2 年振りにか、壽(寿)司(寿)しを食って見たが、五目壽(寿)司(寿)しが 1 杯 50 銭だ。

実に高い。金の味がする。

酢も足らず水臭くて、分隊でたいた味飯の方が餘(余)程うまひ。

うどんも食ったが 20 銭だ。

此れも内地の素うどんの方が「だし」だけでも、いくらうまひか分らない。



でも、こんなに品物が高くとも、矢張りこうして散歩すれば、窮屈な軍隊生活が、ともすれば忘れられる。

【1938 年】3 月 31 日　晴

ポカポカと暖かい。

全く内地の事を思ひ起せば、情けない程帰りたくなる。

でも今日は朝から休みで、手拭いと石鹸を持って、煙草に火でもつけながら入浴だ。

兵站部の入浴に行ったが、此所は前のチャンコロの風呂屋だったのだ。

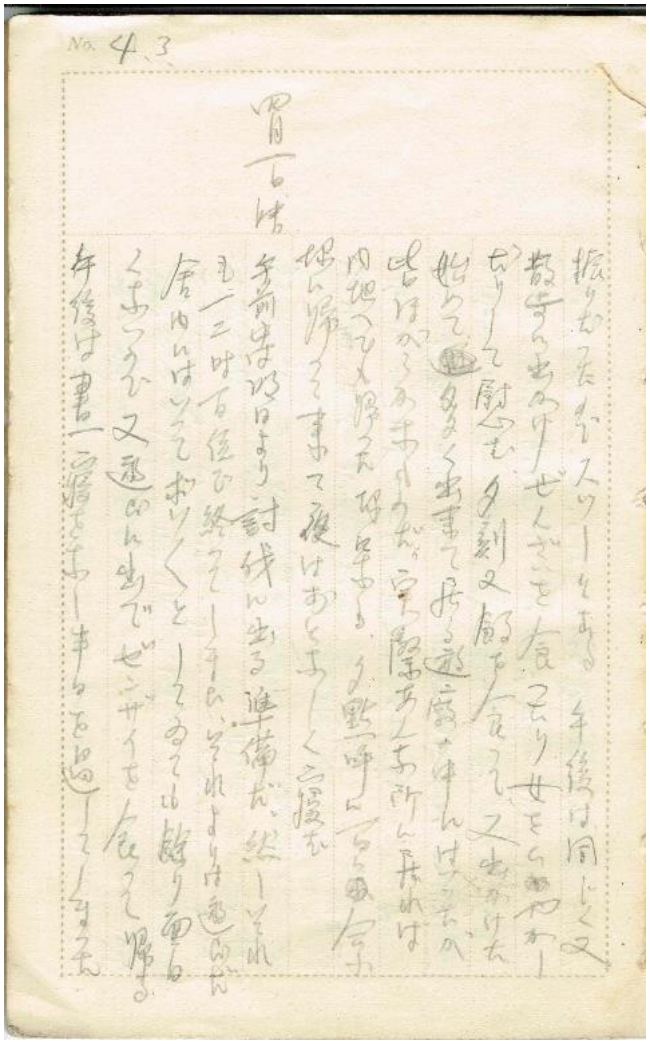
設備は中々よくしてゐて、風呂が広い。

上って洗ふ所は極せまく、風呂の中に腰を掛ける様に設備され、その中で体が洗ふ様になってゐる。

だから水は石鹸水の様に汚なくなってゐる。

それでもはいらないよりましだ。

久し



振りだったので、スーッとする。

午後は同じく又、散歩に出かけ、ぜんざいを食ったり、女をひやかしたりして慰む。

夕刻又飯を食って、又出かけた。

初めて、多く出来て居る遊郭の中にはいったが、皆ほがらかなものだ。

実際、あんな所に居れば内地へでも帰った様になる。

夕點呼に間に合ふ様に帰って来て、夜はおとなしく眠む【る】。

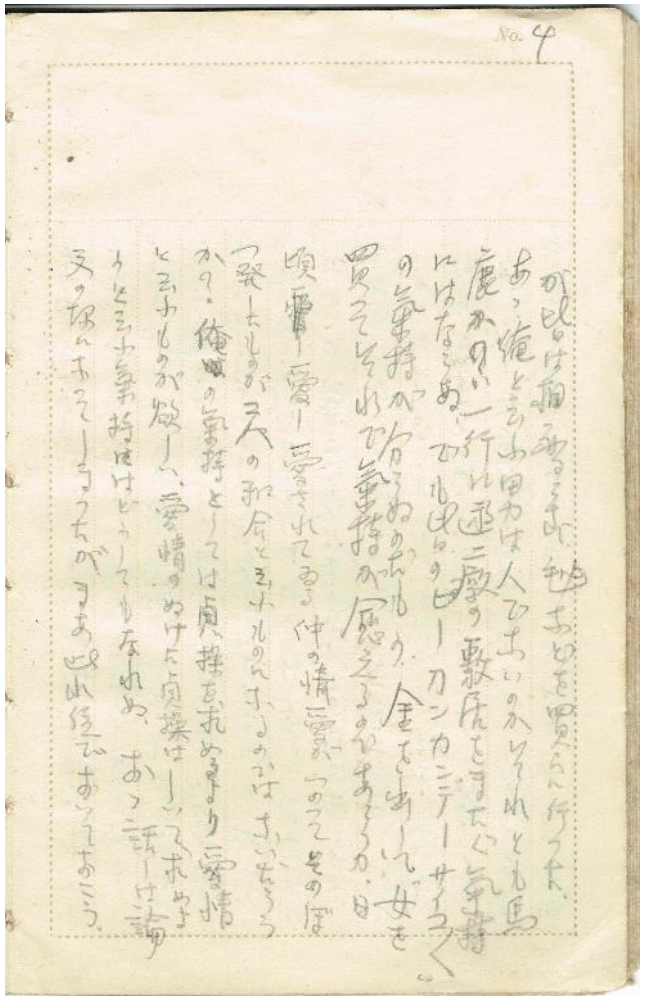
【1938 年】４月１日　晴

午前中は明日より討伐に出る準備だ。

然し、それも１・２時間位で終ってしまひ、それよりは遊びだ。

舎内にはいってボソボソとしてゐても餘り面白くないので、又遊びに出で、ゼンザイを食って帰る。

午後は晝寝をなし、半日を過ごしてしまった。



が、皆は相変らず毟（ピー）などを買ひに行った。

あゝ俺と云ふ男は人でないのか、それとも馬鹿か？

一向に遊郭の敷居をまたぐ氣（気）持にはならぬ。

でも皆の「ピーカンカンデー、サイコサイコ【ピー（女陰）カンカン（看看＝見せる）が娼婦のことで、サイコはセックスの意】の氣（気）持が分らぬのだもの。

金を出して女を買って、それで氣（気）持が癒（い）える仲の情愛がつのって、そのぼっ発したものが二人の和合と云ふものになるのではないだらうか？

俺の氣（気）持としては貞操を求めるより愛情と云ふものが欲しい。

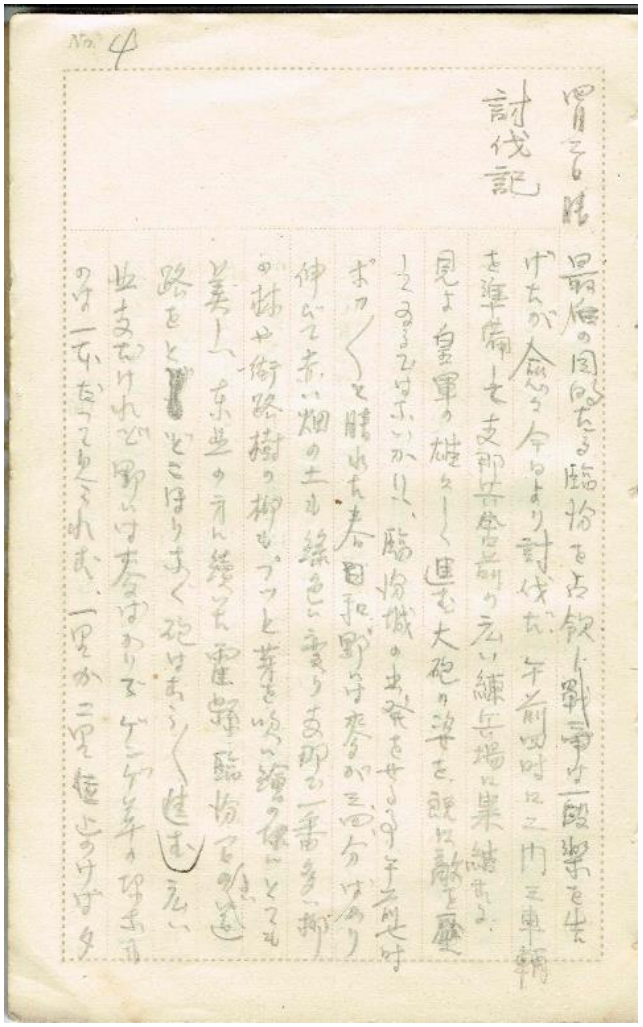
愛情のぬけた貞操は、しいて求めようと云ふ氣（気）持にはどうしてもなれぬ。

おゝ、話しは論文の様になってしまったが、まあ此れ位でおいておこう。

（参考）第１軍機密作戦日誌の 1938 年４月１日の記述によると、「中央方軍ヨリ『第二十師団（団）ハ関（関）東軍方面ノ総予（総予）豫備トシテ、早晩、朝鮮ニ歸（帰）還セシメラルゝコトアルベシ』トノ聲（声）、聞エ來（来）リタルヲ以テ、此場合ニ應（応）ジ得ル為」に、「第二十師團（団）交代計畫（画）(案)」として、「新ニ交代師團（団）到着後、第二十師團（団）ト交代シ、第二十師團（団）ヲ歸（帰）還セシムル場合」、および「新ニ師團（団）ヲ軍ニ配屬（属）セラルゝコトナク、第二十師團（団）ヲ歸（帰）還セシメラレ、軍現有兵力ニテ已占領地域ノ守備ヲ要スル場合」の２通りの部隊配置案が作成された。［アジア歴史資料センターC11110969000 第１軍機密作戦日誌（防衛省）の画像 6、21～25 枚目］

しかし、日本軍として、これ以上占領地を拡大しないという従前方針が転換されて、４月に徐州作戦が開始され、８月には武漢攻略戦と大きな戦闘が続き、占領地がどんどん拡大する中で棚上げになったようで、第 20 師団は 1939 年 11 月７日の復員命令まで山西省にとどまった。

［防衛省戦史叢書第 89 巻「支那事変陸軍作戦〈2〉」43 頁（画像 34 枚目）～］



【1938 年】４月２日　晴　討伐記

最後の目的たる臨汾（りんふん）を占領し【中尾敏郎の第 26 連隊などは臨汾どまりであったが、第 20 師団全体ではさらに南の黄河左岸までの主要拠点を占領していた（Ｃの日記のＣ52 頁を参照）】、戦争は一段落を告げたが、愈々（いよいよ）今日より【残敵の】討伐だ。

午前４時に２門、３車輌を準備して、支那兵舎前の広い練兵場に集結する。

見よ、皇軍の雄々しく進む大砲の姿を。

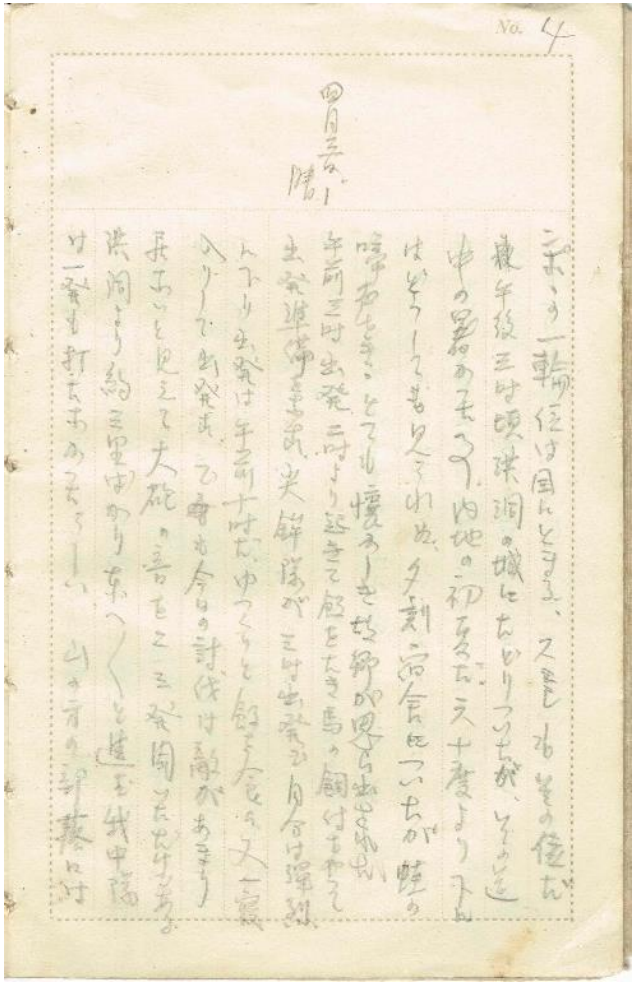
既に敵を壓（圧）してゐ（い）るではないか!!

臨汾城の出発をせる事、午前７時、ポカポカと晴れた春日和、野には麥（麦）が３・４分【≒1ｃｍ】ばかり伸びて、赤い畑の土も緑色に変り、支那で一番多い柳の林や街路樹の柳も、プッと芽を吹い【て】繪（絵）の様にとても美しい。

東北の方に續（続）いた霍縣（かくけん）、臨汾間のよい道路をとどこほりなく砲はすらすら進む。

広い北支だけれど、野には麥（麦）ばかりで、ゲンゲ草の様なものは１本だって見られず。

１里【≒4ｋｍ】か２里【≒8ｋｍ】位、歩けばタ



ンポゝの一輪位は目にとまる。スミレもその位だ。

午後３時頃、洪洞（こうどう）の城にたどりついたが、その道中の暑かった事。

内地の初夏だ。

60 度【摂氏 16 度】より下にはどうしても見られぬ。

夕刻、宿舎についたが、蛙の啼声をきゝ、とても懐かしき故郷が思ひ出された。

【1938 年】４月３日　晴

午前３時出発。２時より起きて飯をたき、馬の飼付をやって出発準備をなす。

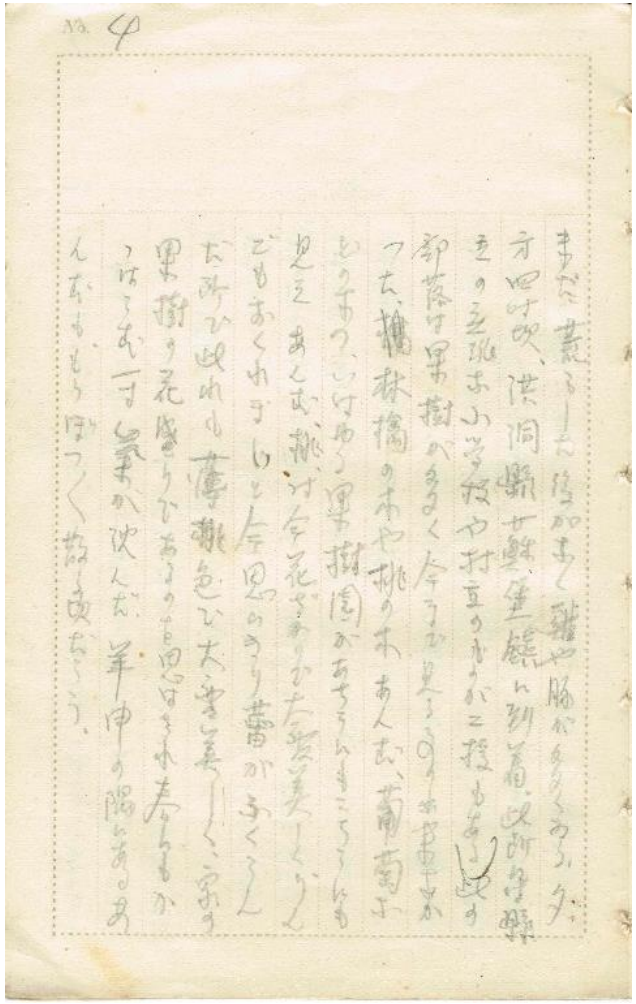
先鋒隊が３時出発で、自分は段列（だんれつ）【弾薬の輸送部隊。４月 12 日の日記では第３分隊は砲を持たずに討伐に出て行ったように書いているので、段列隊の護衛兵の役割だったのか？】に下り、出発は午前 10 時だ。

ゆっくりと飯を食ひ、又一寝入りして出発す。

でも今日の討伐は敵があまり居ないと見えて、大砲の音を２・３発聞いただけである。

洪洞より約３里【≒12ｋｍ】ばかり東へ東へと進む、我中隊は１発も打たなかったらしい。

山の方の部落には



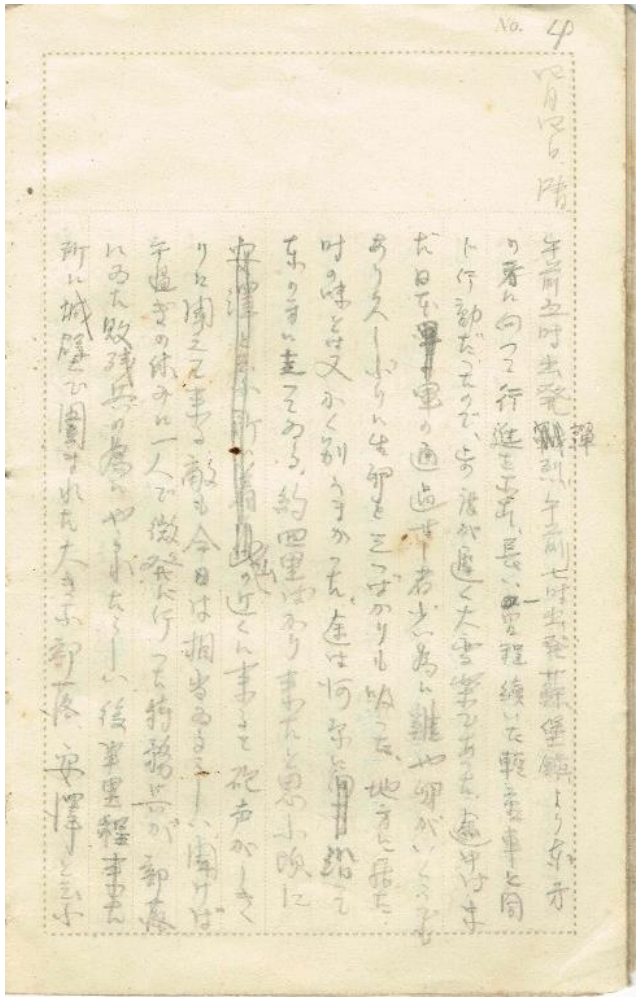
未だ【微発で】荒らした跡がなく、鶏や豚が多くゐ(い)る。

夕方４時頃、洪洞縣(こうどう県)蘇堡鎮に到着。

此所には縣(県)立の立派な小学校や、村立のものが２校もある。

此の部落は果樹が多く、今まで見る事の出来なかった林檎の木や桃の木、あんず、葡萄などの木の、いはゆる果樹園があちらにもこちらにも見え、あんず、桃は今花ざかりで、大変美しく、りんごもおくれまいと、今思ひきり蕾がふくらんだ所で、此れも薄桃色で、大変美しく、家の果樹の花盛りであるのを思はされ、春にもかゝはらず、一寸氣(気)が沈んだ。

【実家の庭の】羊申(ひつじさる)【南西の方角】の隅にあるあんずも、もうぼつぼつ散る頃だろう。



【1938年】４月４日　晴

午前５時出発、【自分達】段列（だんれつ）【は】午前７時出発、蘇堡鎮より東方の方に向って行進をなす。

長い１里【≒4ｋｍ】程續（続）いた輜重（しちょう）車【の行列】と同じ行動だったので、歩度が遅く、大変楽であった。

途中は未だ日本軍の通過せし者【が】少い為に、【徴発をあまり受けておらず】鶏や卵がいくらでもあり、久しぶりに生卵を３つばかりも吸った。

地方に居た時の味とは又かく別うまかった。

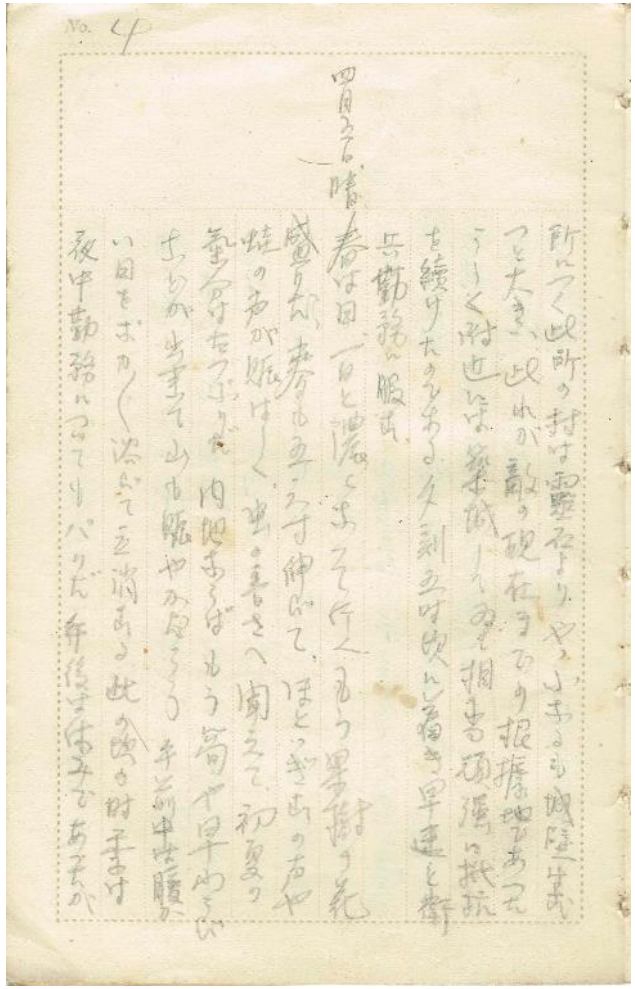
途は河原に沿って東の方に走って居（い）る。

約４里【≒16ｋｍ】ばかり来たと思ふ頃に、山の近くに来ると、砲声がしきりに聞えて来る。

敵も今日は相当居（い）るらしい。

聞けば午過ぎの休みに一人で徴発に行った特務兵【＝輜重兵】が、部落に居（い）た敗残兵の為にやられたらしい。

後、半里【≒2ｋｍ】程来た所に城壁で圍（囲）まれた大きな部落、安澤（あんたく）と云ふ



所につく。

此所の村は靈石(れいせき)よりやゝ小なるも、城壁はずっと大きい。

此れが敵の現在までの根據(拠)地であったらしく、附近には築城してゐ(い)て相当頑強に抵抗を續(続)けたのである。

夕刻５時頃に着き、早速と衛兵勤務に服す。

【1938 年】４月５日　晴

春は日、一日と濃くなって行く。

もう果樹の花盛りだ。

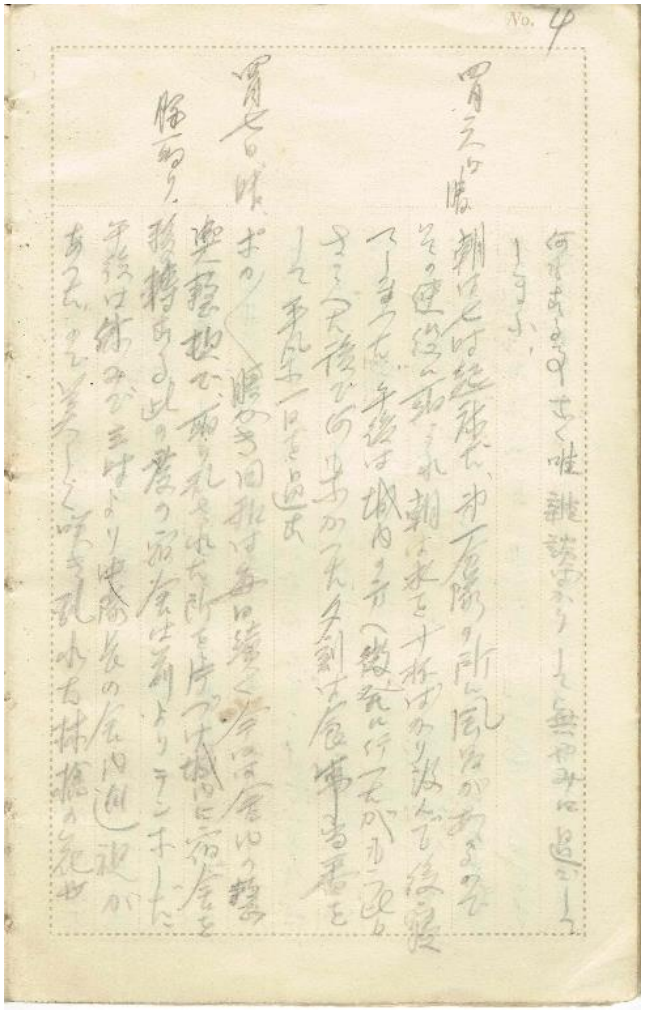
麥(麦)も５・６寸伸びて、ほとゝぎすの声や蛙の声が賑はしく、虫の音さへ聞えて、初夏の氣(気)分はたっぷりだ。

内地ならばもう筍や早(さ)わらびなどが出来て、山も賑やかだろう。

午前中は暖かい日をポカポカ浴びて立哨する。

此の頃の時季は夜中勤務についてもパリだ。

午後は休みであったが、



何もする事なく、唯雑談ばかりして無やみに過ごしてしまふ。

【1938 年】4 月 6 日　晴

朝は 7 時起床だ。

第一分隊の所に風呂があるので、その使役に取られ、朝は水を 10 杯ばかり汲んで後、寝てしまった。

午後は城内の方へ徴発に行ったが、もう皆さらへた後で、何もなかった。

夕刻は食事当番をして平凡な 1 日を過す。

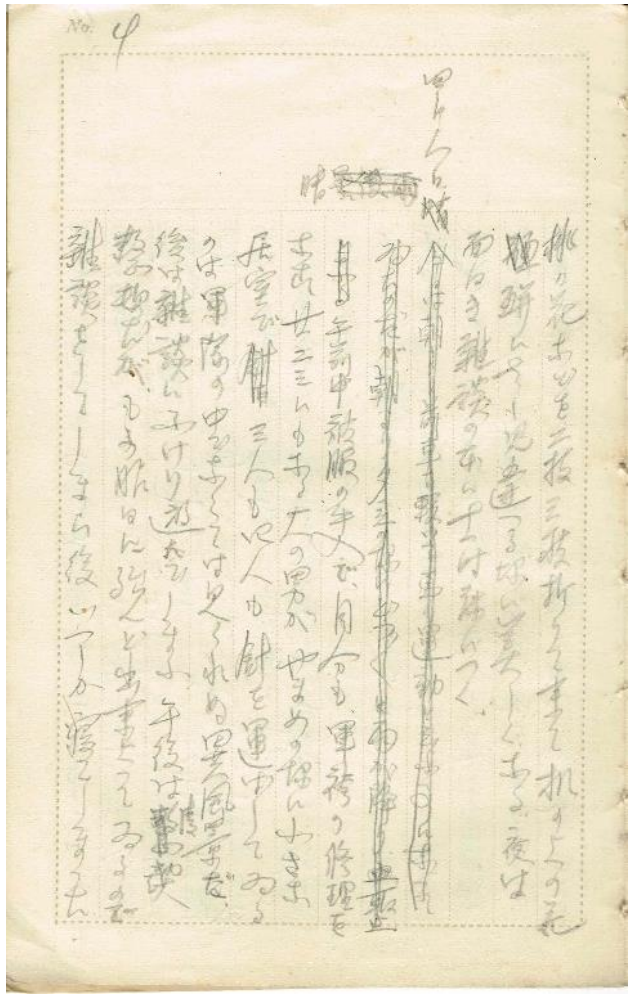
4 月 7 日　晴　　豚取り

ポカポカ暖かき日和は毎日續(続)く。

今日は舎内の清潔整頓で、取り乱された所を片づけ、城内に宿舎を移轉(転)する。

此の度(たび)の宿舎は前よりテンホー(天頂)だ。

午後は休みで 3 時より中隊長の舎内巡視があったので、美しく咲き乱れた林檎の花や



桃の花などを２枝・３枝折りて来て、机の上の花瓶にさし、見違へる様に美しくなる。

夜は面白き雑談の末に 11 時床につく。

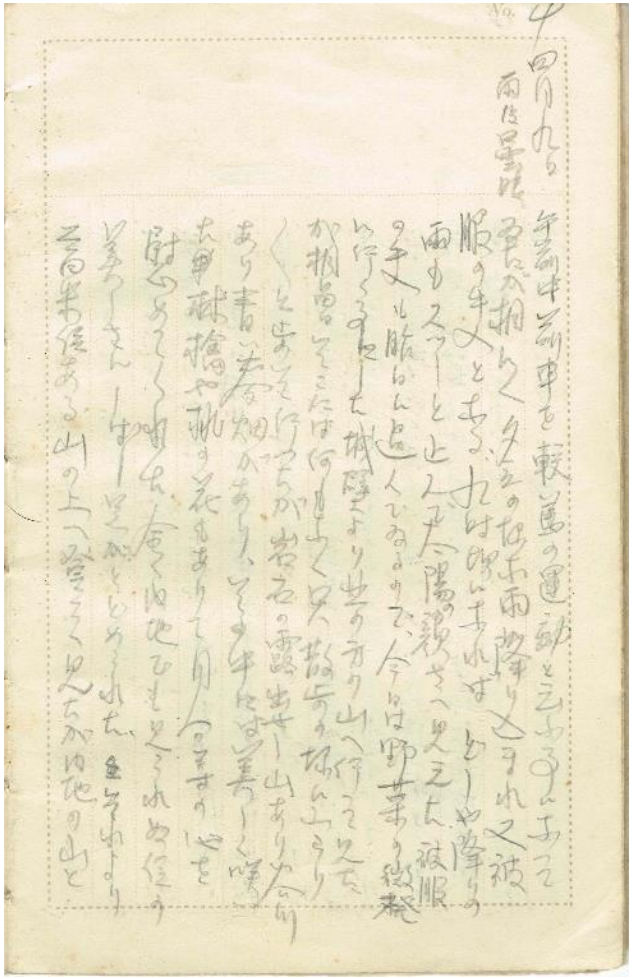
【1938 年】４月８日　晴

午前中、被服の手入で、自分も軍袴（ぐんこ）の修理をなす。

22・3【歳】にもなる大の男が、やまめの様に小さな居室で３人も４人も針を運ばして居（い）るのは、軍隊の中でなくては見られぬ異風景だ。

後は雑談にふけり遊んでしまふ。

午後は清潔整頓だが、もう昨日に殆んど出来上って居（い）るので、雑談をしてしまひ、後いつしか寝てしまった。



【1938 年】4 月 9 日　雨後曇晴

午前中、前車【Aの日記 17 頁の「九一式十糎榴弾砲と弾薬車の図」を参照】を較い【牽いて？】馬の運動と云ふ事になってゐたが、あいにく夕立の様な雨【に】降り込まれ、又被服の手入れとなる。

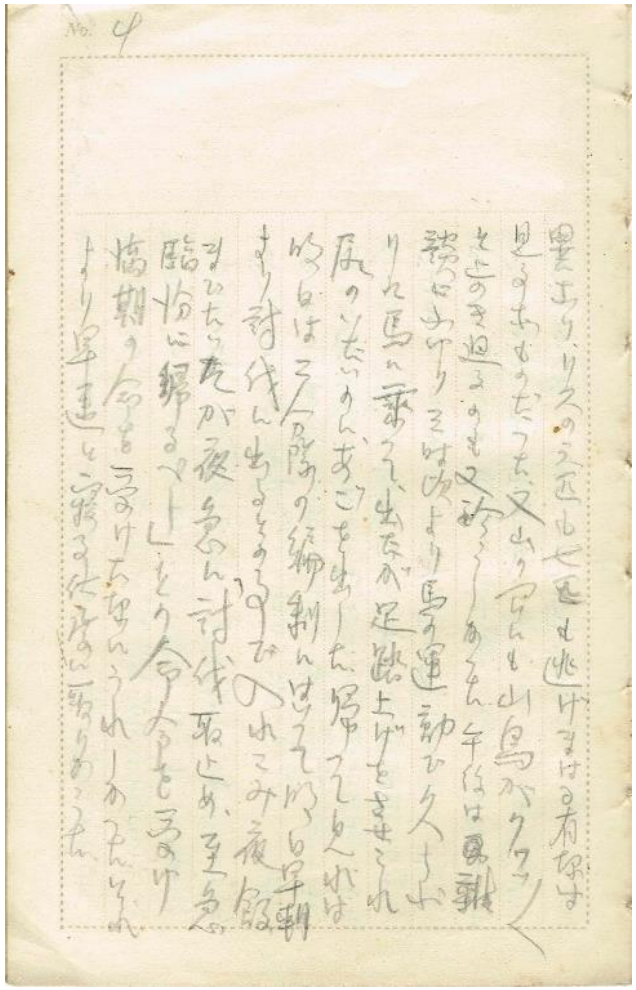
9 時頃になればどしゃ降りの雨もスッーと止んで、太陽の顔さへ見えた。

被服の手入れも昨日に済んでゐるので、今日は野菜の徴発に行く事にした。

城壁より北の方の山へ行って見たが、あいにく、そこには何もなく、只、散歩の様にふらりふらりと歩いて行ったが、岩石の露出せし山あり、谷川あり、青い麥畑があり、その中には美しく咲た林檎や桃の花もありて、自分等の心を慰めてくれた。

全く、内地でも見られぬ位の美しさに、しばし足がとどめられた。

それより 200米位ある山の上へ登って見たが、内地の山と



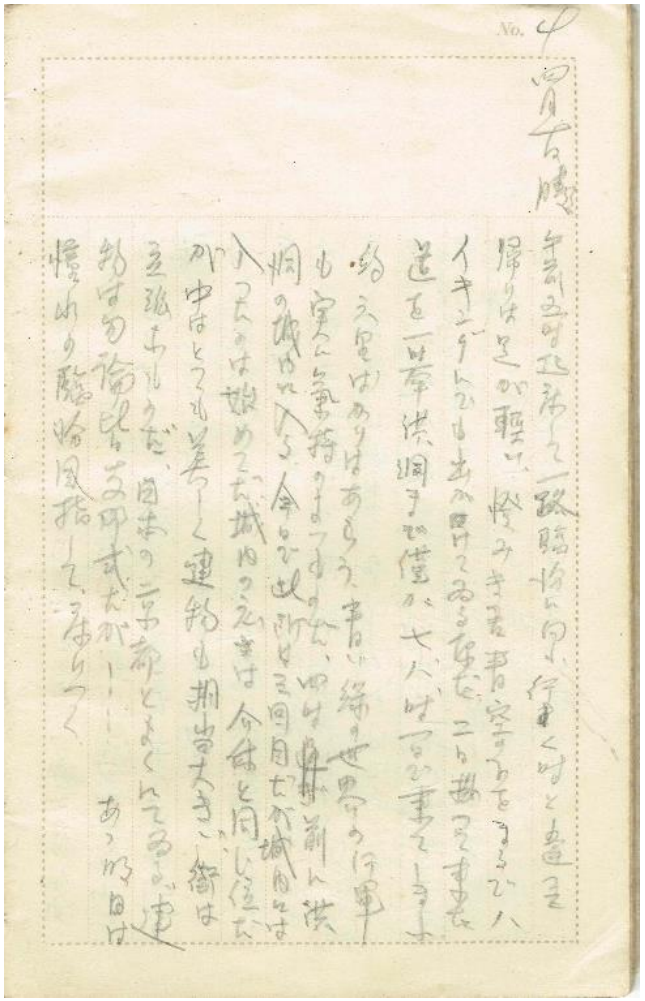
異なり、リスの６匹も７匹も逃げまはる有様は見事なものだった。

又、山の間にも山鳥がクワックワッと歩き廻るのも又珍しかった。

午後は雑談にふけり、3時頃より馬の運動で、久しぶりに馬に乗って出たが、足踏上げをさせられ、尻のいたいのにあごを出した。

帰って見れば、明日は【第】二分隊の編成にはいって、明日早朝より討伐に出るとの事で入れこみ、夜飯までたいたが、夜、急に「討伐取止め、至急臨汾（りんふん）に帰（帰）るべし」との命令を受け、満期の命を受けた様にうれしかった。

それより早速と寝る支度に取りかかった。



【1938 年】4 月 10 日　晴

午前 5 時起床して一路臨汾（りんふん）に向ふ。

行く時と違って帰りは足が軽い。

澄みきった青空の下を、まるでハイキングにでも出かけてゐ（い）る様だ。

2 日掛って来た道を、一挙、洪洞（こうどう）まで僅か 7・8 時間で来てしまふ。

約 6 里【≒24ｋｍ】ばかりはあらう。

青い緑の世界の行軍も実に氣（気）持のよいものだ。

4 時前に洪洞の城内に入る。

今日で此所は 3 回目だが、城内には入ったのは初めてだ。

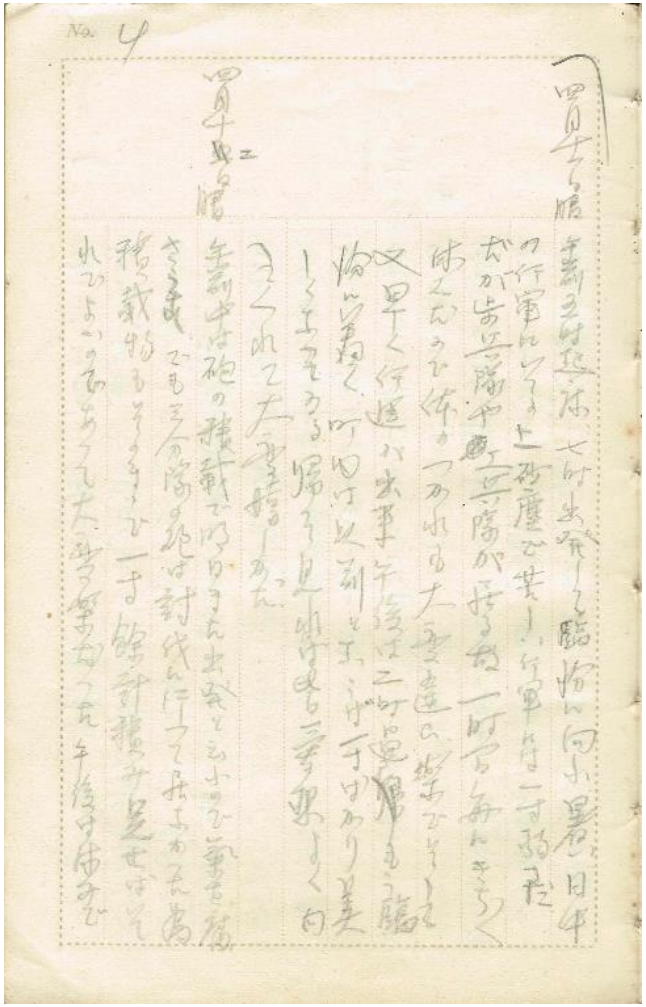
城内の広さは介休（かいきゅう）と同じ位だが、中はとても美しく、建物も相当大きい。

街は立派なものだ。

日本の京都とよくにてゐ（い）る。

建物は勿論、皆支那式だが…。

あゝ明日は憧れの臨汾目指して、床につく。



【1938 年】4 月 11 日　晴

午前 5 時起床、7 時出発して臨汾（りんふん）に向ふ。

暑い日中の行軍に、その上砂塵で苦しい行軍には、一寸（ちょっと）弱った。

だが、歩兵隊や工兵隊が居る故、1 時間ごとにきちっきちっ休んだので、体のつかれも大変違ひ、楽（楽）でそして又早く行進が出来、午後は 2 時過、もう臨汾に着く。

町内は以前とならば一寸ばかり美しくなってゐ（い）る。

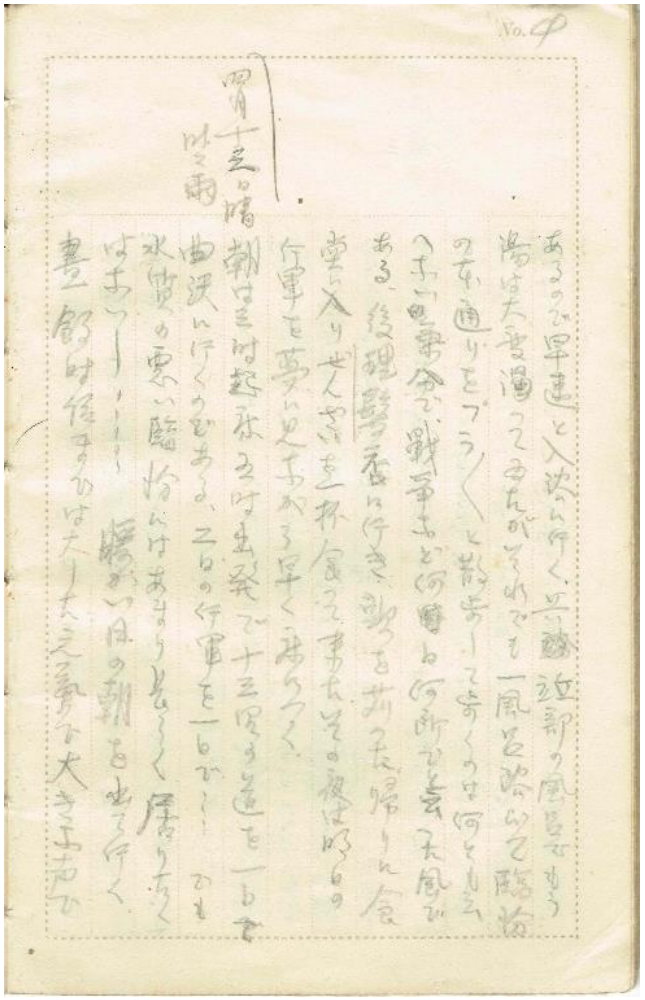
帰って見れば、皆愛想よく迎へてくれて、大変嬉しかった。

4 月 12 日　晴

午前中は砲の積載で、明日はまた出発と云ふので、氣（気）を腐さらす。

でも、【自分たち第】三分隊の砲は討伐に行って居なかった為、積載物もそのまゝで、一寸餘（ちょっと余）計積み足せばそれでよいのであって、大変楽だった。

午後は休みで



あるので早速と入浴に行く。

兵站部の風呂で、もう湯は大変濁ってゐたが、それでも一風呂浴びて臨汾の東通りをプラプラと散歩して歩くのは、何とも云へない氣分で、戦争など、何日何所でと云った風である。

後、理髪店に行き、頭を刈った。

帰りに食堂に入りぜんざいを１杯食って来た。

その夜は昨日の行軍を夢に見ながら早く床につく。

【1938 年】4 月 13 日　晴時々雨

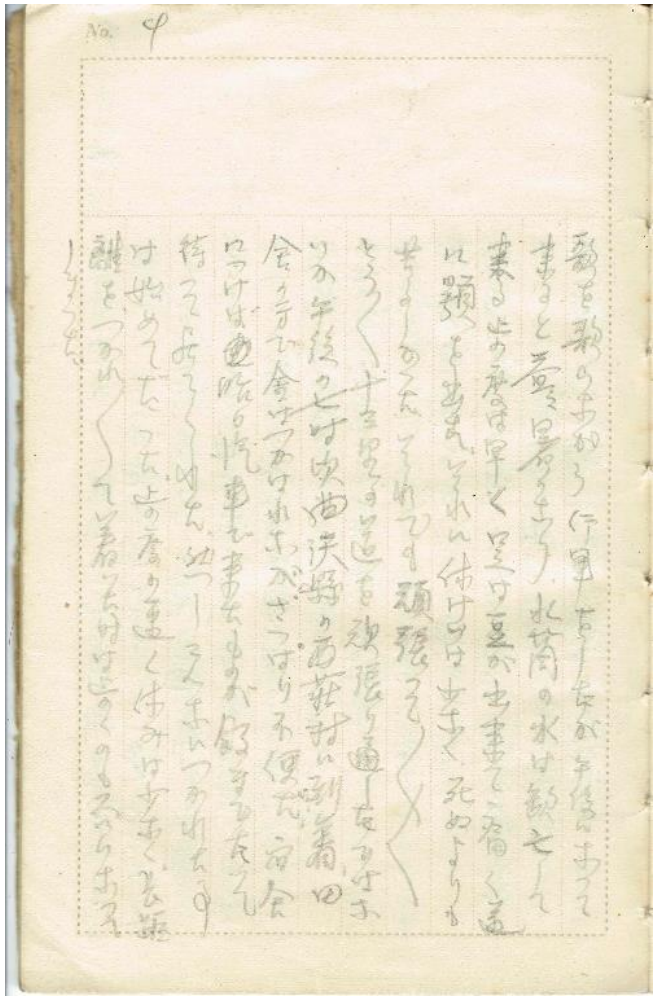
朝は 3 時起床、5 時出発で、13 里【=51ｋｍ】の道を 1 日で曲沃に行くのである。

2 日の行軍を 1 日で…。

でも、水質の悪い臨汾にはあまり長らく居りたくはないし…。

暖かい日の朝を出て行く。

晝飯時位までは大した元氣で、大きな声で



歌を歌ひながら行軍をしたが、午後になって来ると益々暑くなり、水筒の水は欠(ケツ)乏して来る。歩度は早く、足は豆が出来て痛く、遂に顎を出す。

それに休けいは少なく、死ぬよりも苦るしかった。

それでも頑張って、頑張って、頑張って、とうとう 13 里の道を頑張り通したではないか。

午後の 7 時頃、曲沃県(きょくよく)の西荘村【西趙村の誤りか？（これ以降の記述を見ると、第 10 中隊の宿舎が西趙村、第 4 大隊本部が西城村、第 26 連隊本部が元の支那兵営にあったと推測される）。位置は右図を参照】に到着。

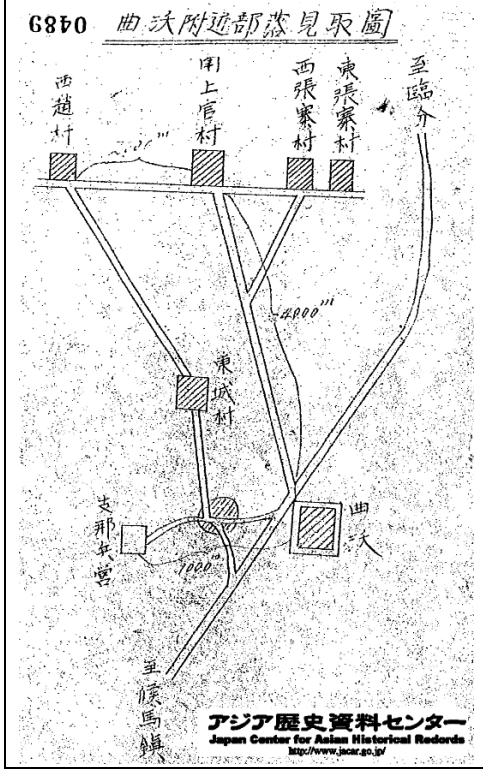
田舎の方で、金はつかはれな【い】が、さっぱり不便だ。

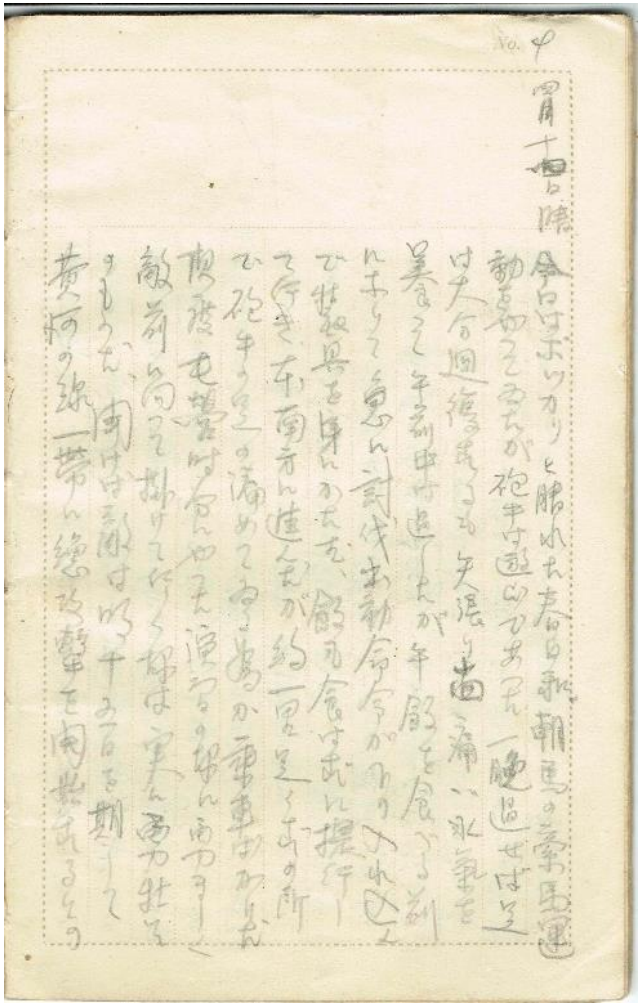
宿舎につけば、昨日汽車で来たものが飯までたいて待って居てくれた。

然し、こんなにつかれた事は初めてだった。

歩度の速く、休みは少なく、長距離をつかれ、つかれて着いた時は、歩くのも否(イヤ)になってしまった。

（参考）1938 年 3 月 14 日の「山西省給水調査」報告書によると、「西趙村 … 戸数 200、人口 1,000 人」となっている。[アジア歴史資料センターC04120729200 陸支受大日記(防衛省) 画像 17・19 枚目]





【1938 年】4 月 14 日　晴

今日はポッカリと晴れた春日和。

朝、【馭者班は】馬の索馬運動をやってゐたが、砲手は遊びであった。

一晩過せば足は大分回復するも、矢張り尚痛い。

英氣を養って午前中は過したが、午飯を食べる前になりて急に討伐出動命令が下り、入れ込んで装具を身にかたむ。

飯も食はずに提行して行き、東南方に進んだが、約 1 里【≒4ｋｍ】足らずの所で砲手の足の痛めてゐる為か、【砲車・弾薬車・前車への】乗車ばかりだ。

丁度、【朝鮮での】屯營時分にやった演習の様に、勇ましく敵前に向って掛けて行く様は実に勇壮そのものだ。

聞けば、敵は明 15 日を期して黄河の線一帯に総攻撃を開始するとの

【以下は、原文の次頁冒頭部分の判読文】

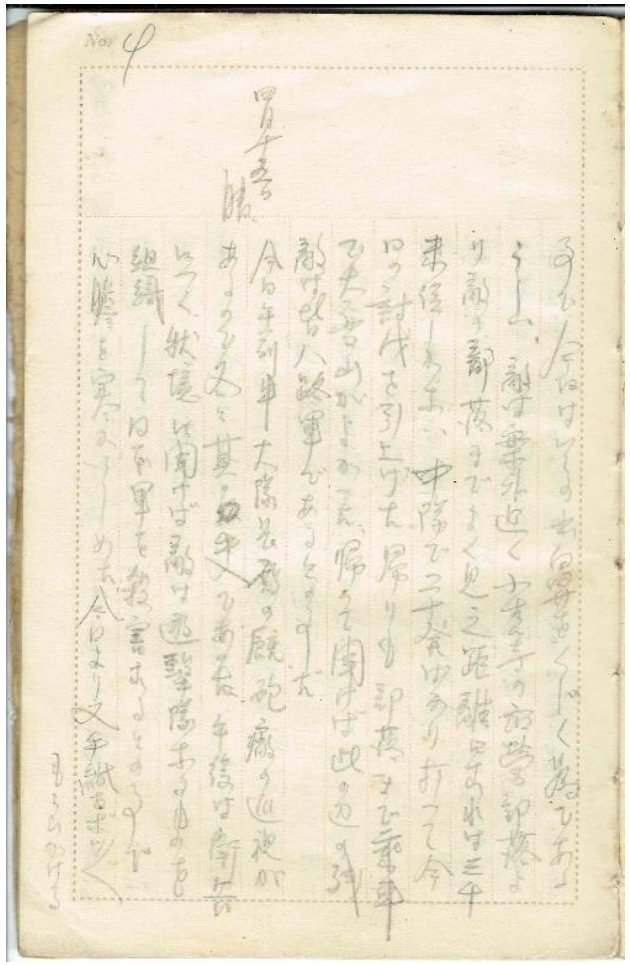
事で、今日はその出鼻をくじく為であるらしい。

敵は案外近く、小生等の宿營部落より敵の部落までよく見え、距離にすれば 3 千米位しかない。

中隊で 20 発ばかり打って、今日の討伐を引揚げた。

帰りも部落まで乗車で、大変山がよかった。

帰って聞けば、此の辺の残敵は皆、八路軍【中国共産党の軍隊。1937 年 8 月の第二次国共合作により、それまでの共産党軍（紅軍）が、中国国民党の軍組織の国民革命軍に「第八路軍」として組み入れられた】であるとの事だ。



【原文の冒頭７行の判読文は前頁に記載】

【1938 年】４月 15 日　晴

今日午前中、大隊長殿の厩、砲廠の巡視があるので、各々其の手入であった。

午後は衛兵につく。状況に聞けば、敵は遊撃隊【ゲリラ部隊】なるものを組織して、日本軍を殺害するとの事で、心膽（胆）を寒からしめた。

今日より又、手紙をボツボツもらひかける。

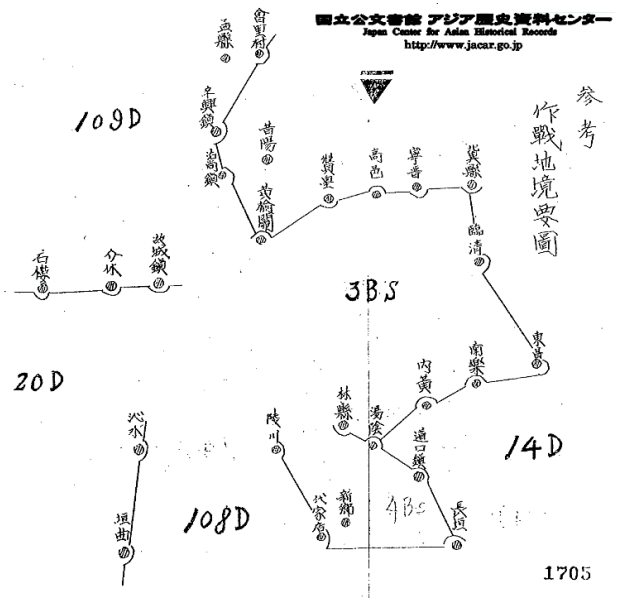
（参考）この頃、日本軍は江蘇省（こうそ）徐州（じょしゅう）附近の中国軍に対する大規模な包囲殲滅作戦を開始、第一軍からも第 14 師団が黄河を越えてこの作戦に参加した。第 20 師団は山西省南西部の占領地粛清戦を継続した。

第一軍命令　　４月 15 日午前　於石家莊（せきかそう）軍司令部

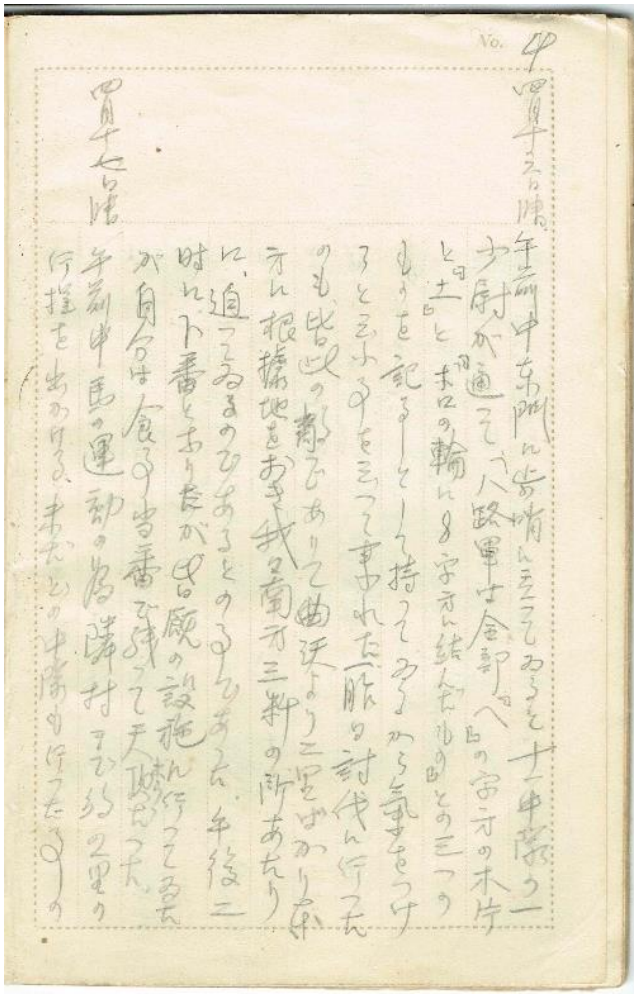
一、北支那方面軍ハ近ク中支那派遣軍ノ一部ト協力シ、徐州附近ノ敵ヲ撃滅スルノ企圖（図）ヲ有ス。準備完成ノ時機ハ X 日と豫定（予）ス（X 日ハ後日命令セラル）。（以下略）

二、軍ハ已占領地域ヲ確保スルト共ニ、一部ヲ以テ蘭封（らんふう）附近より下流ニ於テ、黄河を渡河シ、第二軍ノ作戦ヲ容易ナラシムルノ準備ヲ為サントス。

三、第二十師團（団）ハ前任務ヲ續（続）行スベシ。（※以下略。第 20 師団の担当地域は右図の「20D」の山西省南西部。）




［アジア歴史資料センターC11110969400 第１軍機密作戦日誌（防衛省）画像 48～57 枚目］



【1938 年】4 月 16 日　晴

午前中東門に歩哨に立ってゐると、【第】十一中隊の 1 少尉が通って「八路軍は全部『へ』の字形の木片と『土』と『ボロの輪に 8 字形に結んだもの』との 3 つのものをしるしとして持ってゐるから氣をつけろと云ふ事を云って呉れた。

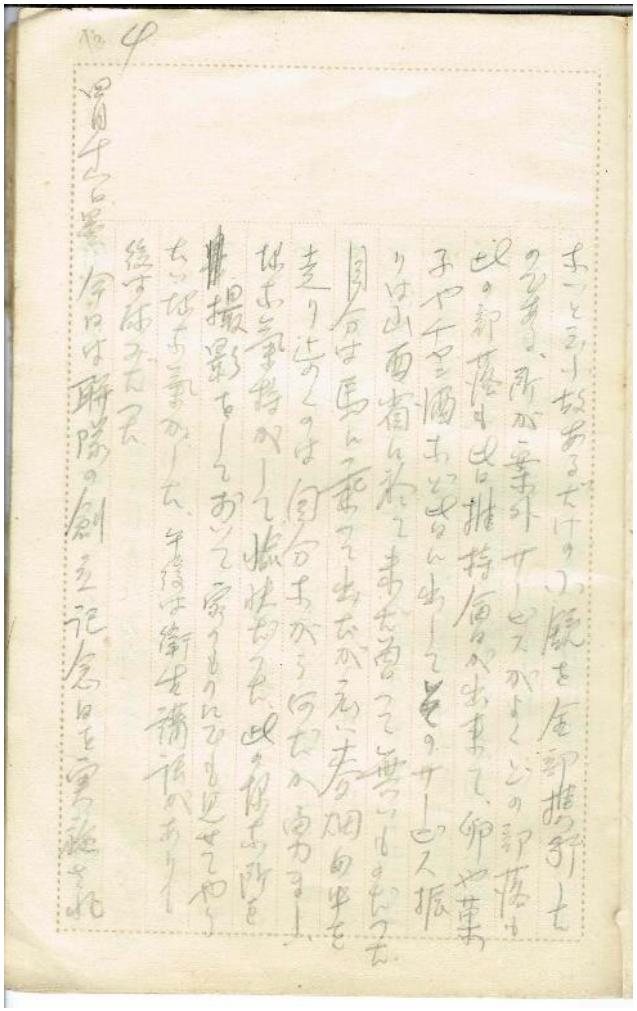
一昨日討伐に行ったのも、皆此の敵でありて、曲沃より 2 里【≒8ｋｍ】ばかり東方に根據地をおき、我々南方 3 粁の所あたりに、迫ってゐるのであるとの事であった。【八路軍は山西省内の農民や労働者を遊撃隊に組織して、抗日ゲリラ作戦に協力させていた。その様子は、アグネス スメドレー著「中国は抵抗する」に詳しく記録されている】

午後 2 時に下番となりたが、皆厩の設施に行ってゐたが、自分は食事当番で、残って天頂だった。

4 月 17 日　晴

午前中、馬の運動の為、隣村まで約 2 里【≒8ｋｍ】の行程を出かける。

未だ、どの中隊も行った事の



ないと云ふ故、あるだけの小銃を全部携行したのである。

ところが、案外サービスがよく、どの部落も此の部落も皆、維持會が出来て、卵や菓子やチャン酒など【を】皆に出して、そのサービス振りは山西省に於て未だ曾って無いものだった。

自分は馬に乗って出たが、広い麥畑の中を走り歩くのは、自分ながら何だか勇ましい様な氣持ちがして、愉快だった。

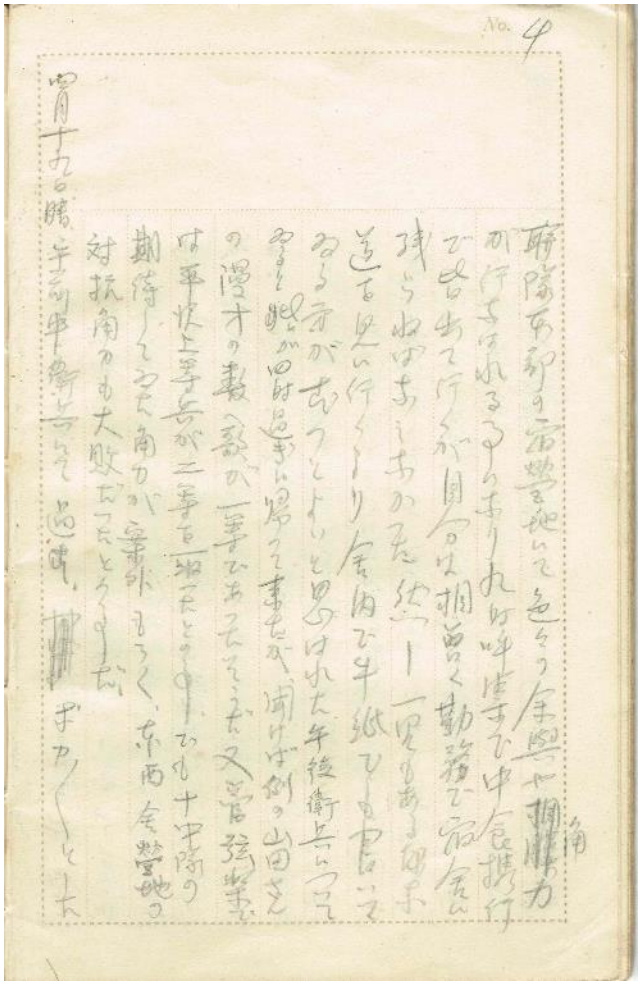
此の様な所を撮影をしておいて、家のものにでも見せてやりたい様な氣がした。

午後は衛生講話がありて、後は休みだった。

【1938 年】4 月 18 日　曇

今日は聯隊の創立記念日を実施され

【「つわもの碑建立記念誌」の連隊歴史年表では、大正 8 年 4 月 1 日に第 1 大隊本部と 2 個中隊の編成が下令され、内地で編成ののちに 4 月 24 日に宇品港を出港、26 日に釜山上陸して大 20 師団の管轄に入ったとのこと。創立記念日の 4 月 18 日は、内地での編成が完結した日か？】



聯隊本部の宿營地にて色々の余興や角力が行なはれる事になり、9 時呼集で中食携行で皆出て行くが、自分は生憎く勤務で、宿舎に残らねばならなかった。

然し、1 里【≒4ｋｍ】もある様な道を見に行くより、舎内で手紙でも書いてゐる方がずっとよいと思はれた。

午後、衛兵についてゐると、皆が 4 時過ぎに帰って来たが、聞けば例の山田さんの漫才の数へ歌が 1 等であったそうだ。

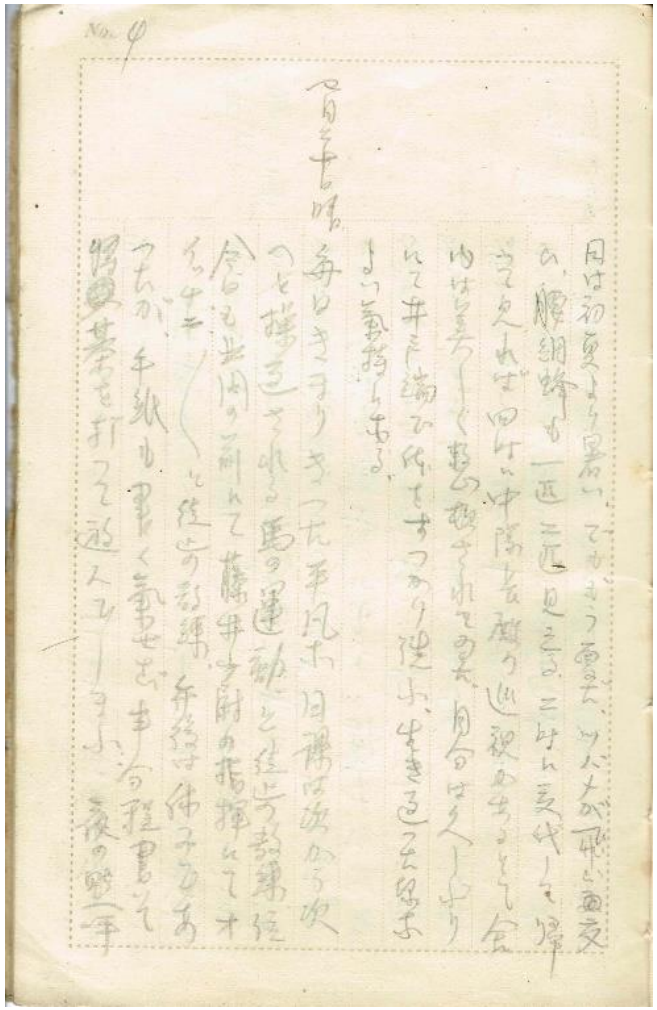
又、管弦樂では平沢上等兵が 2 等を取ったとの事。

でも、【第】十中隊の期待してゐた角力が案外もろく、東西舎營地の対抗角力も大敗だったとの事だ。

【1938 年】4 月 19 日　晴

午前中、衛兵にて過す。

ポカポカとした



日は初夏より暑い。

でも、もう夏だ。

ツバメが飛び交ひ、腰細蜂(ジガバチ)も１匹・２匹見える。

2 時に交代して帰って見れば、4 時に中隊長殿の巡視があるとて、舎内は美しく整頓されてゐ(い)た。

自分は久しぶりにて井戸端で体をすっかり洗ふ。

生き返った様なよい氣(気)持になる。

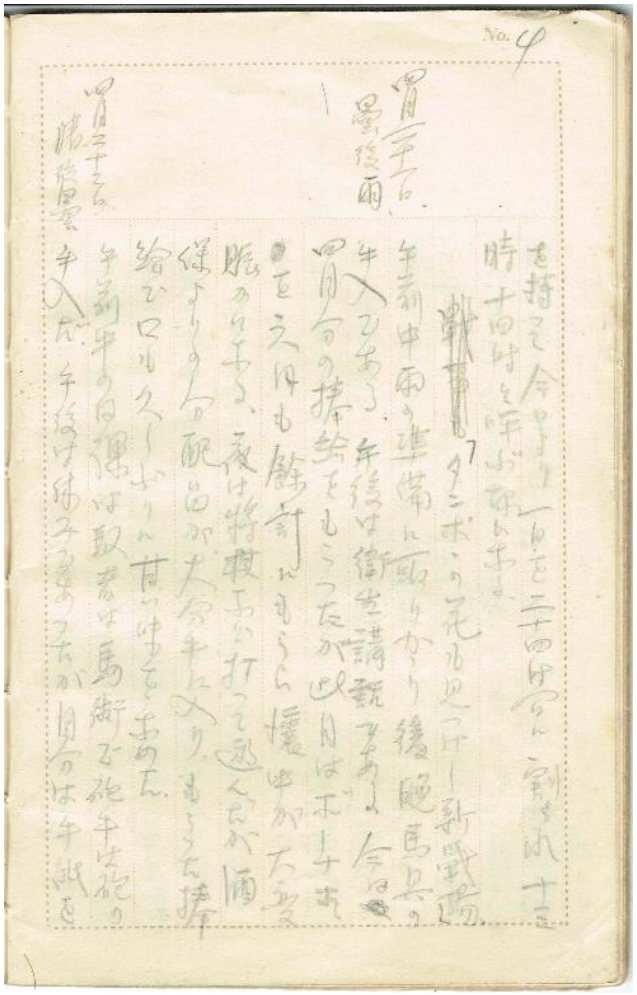
【1938 年】4 月 20 日　晴

毎日きまりきった平凡な日課は次から次へと繰返される。

馬の運動と徒歩の教練位、今日も北門の前にて藤井少尉の指揮にてオイッチニ、オイッチニと徒歩の教練。

午後は休みであったが、手紙も書く氣(気)【が】せず、半分程書いて、將棋を打って遊んでしまふ。

夜の點(点)呼



を以って、今日より１日を24時間に割られ、13時・14時と呼ぶ様になる。

「タンポゝの花も見つけし新戰場」

北支那方面軍命令（方軍参密第422號（号））に基づき、「4月20日ヨリ方面軍司令官隷下、指揮下、及區處（区所）部隊（機關（関））ハ、中央標準時（24時間制）ヲ使用スルコトニ定メラレ…昭和13年4月20日午前零時ヲ以テ昭和13年4月20日1時トス」

［アジア歴史資料センターC11110969600 第１軍機密作戦日誌（防衛省）画像45枚目］

Ａの日記で1937年7月18日に万里の長城を通過した際、時計を1時間早めたのを、元の日本時間に戻したことになる。

【1938年】4月21日　曇後雨

午前中、雨の準備に取りかかり、後、輓馬具（ばんばぐ）の手入である。

午後は衛生講話である。

今日4月分の俸給をもらったが、此月はボーナスを6円も餘（余）計にもらった。

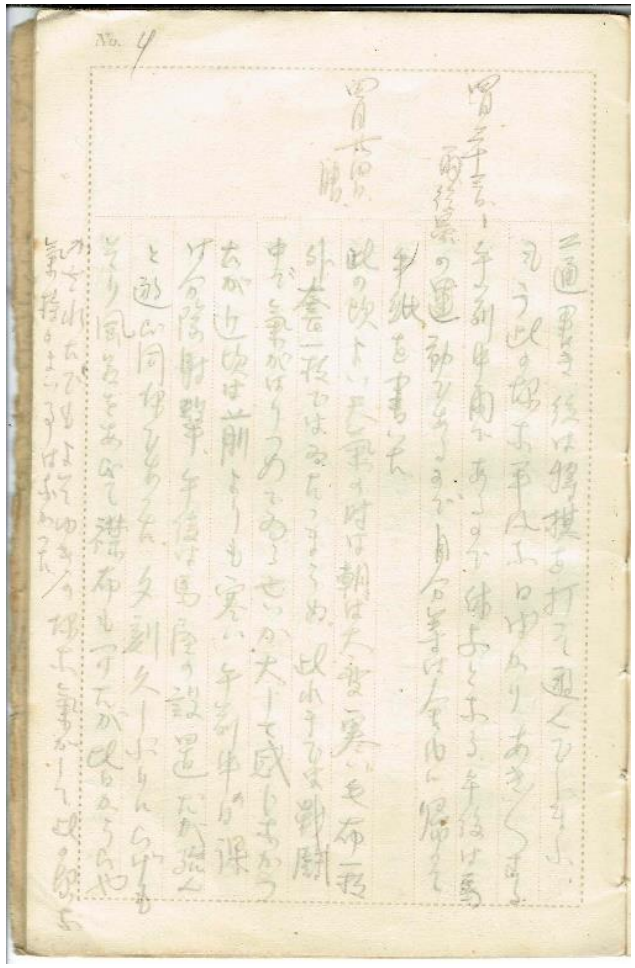
懐中が大変賑かになる。

夜は将棋など打って遊んだが、酒保よりの分配品が大分手に入り、もらった俸給で口も久しぶりに甘い味を求めた。

4月22日　晴後曇

午前中の日課は馭者は馬術で、砲手は砲の手入だ。

午後は休みであったが、自分は手紙を



2 通書き、後は將棋を打って遊んでしまふ。

もう此の様な平凡な日ばかり、あきあきする。

【1938 年】4 月 23 日　雨後曇

午前中、雨であるので休与となる。

午後は馬の運動であるので、自分等は舎内に帰って手紙を書いた。

4 月 24 日　晴

此の頃、よい天氣の時は朝は大変寒い。

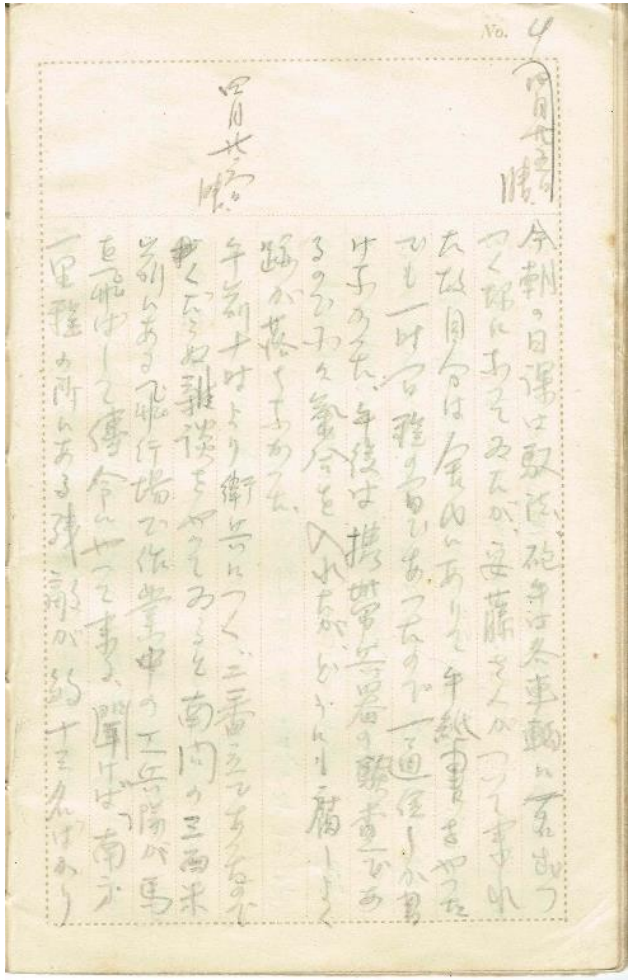
毛布 1 枚、外套 1 枚ではゐたゝまらぬ。

此れまでは戦闘中で氣がはりつめてゐるせいか、大して感じなかったが、近頃は前よりも寒い。

午前中の日課は分隊射撃、午後は馬屋の設置だが、殆んど遊び同様であった。

夕刻、久しぶりにひげもそり、風呂をあびて襟布もつけたが（※白い三角巾を巾 1 寸 3･4 分（≒4cm）に三ツ折にして襟の内側に着用する。約 1 分（≒3mm）襟の上に出るようにする。［軍事攻究會編「野砲兵須知」昭和 14 年版第 3 篇 129 頁］）、皆からひやかされた。

でも、よそゆきの様な氣がして、此の様な氣持のよい事はなかった。



【1938 年】4 月 25 日　晴

今朝の日課は馭法。

砲手は各車輌(両)に 1 名ずつつく様になってゐ(い)たが、安藤さんがついて来れた故、自分は舎内にありて手紙書をやった。

でも 1 時間程の間であったので、1 通位しか書けなかった。

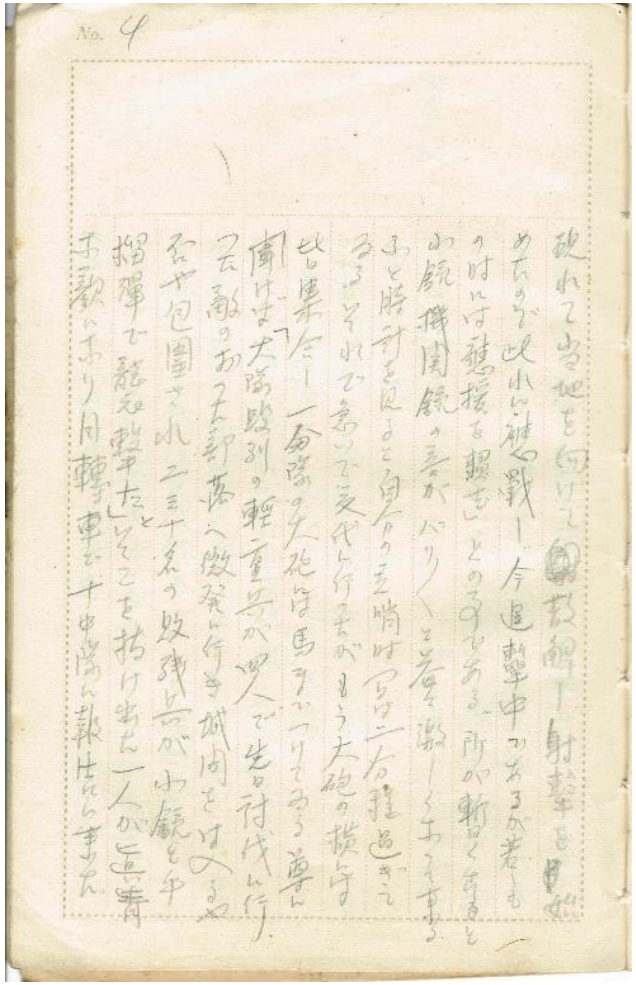
午後は携帯兵器の検査であるので、少々氣(気)合を入れたが、どうにも腐しょく跡が落ちなかった。

4 月 26 日　晴

午前 10 時より衛兵につく。

2 番立であったので、くだらぬ雑談をやってゐ(い)ると、南門の 3 百米(m)前にある飛行場で作業中の工兵隊が、馬を飛ばして傳(伝)令にやって来る。

聞けば、「南方 1 里【≒4ｋｍ】程の所にある残敵が、約 13 名ばかり



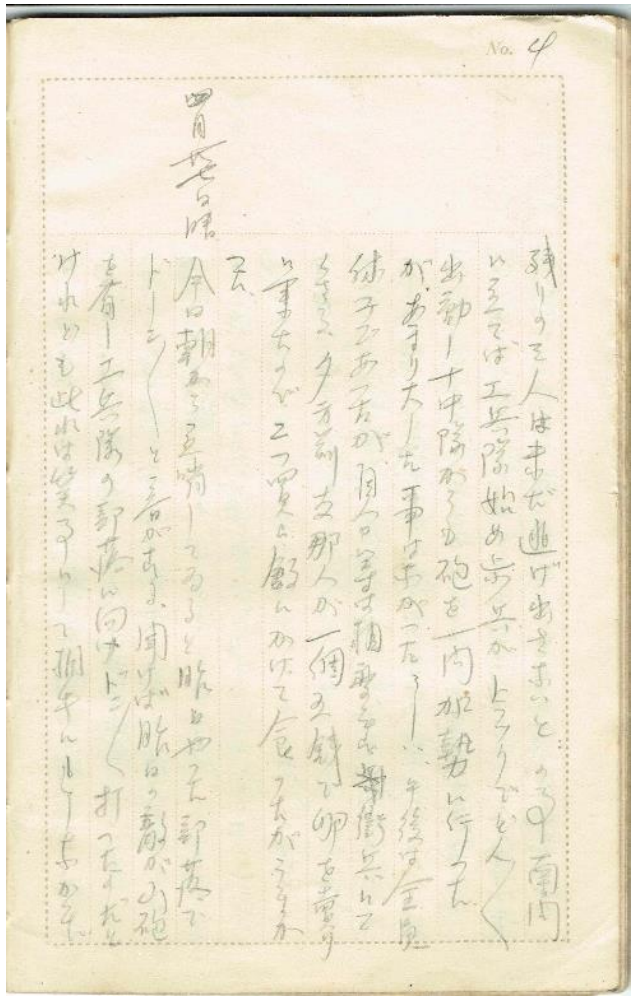
現れて、当地を向けて散開し、射撃を始めたので此れに應戦し、今、追撃中であるが、若しもの時には應援を頼む」との事である。

所が、暫くすると小銃、機関銃の音がバリバリと益々激しくなって来る。

ふと時計を見ると自分の立哨時間は２分程過ぎてゐる。

それで急いで交代に行ったが、もう大砲の横には皆集合し、【第】一分隊の大砲には馬までつけてゐる。

噂に聞けば「大隊段列の輜重兵が４人で先日討伐に行った敵のおった部落へ徴発に行き、城門をは入るや否や包圍され、2・30名の敗残兵が小銃と手榴弾で襲撃【してき】た」と、そこを抜け出た一人が眞青な顔になり自轉車で【第】十中隊に報告に来た、



残りの３人は未だ逃げ出さないとの事。

南門に立てば工兵隊【を】始め、歩兵がトラックでどんどん出動し、【第】十中隊からも砲を一門加勢に行ったが、あまり大した事はなかったらしい。

午後は全員休みであったが、自分等は相変らず衛兵にてくさる。

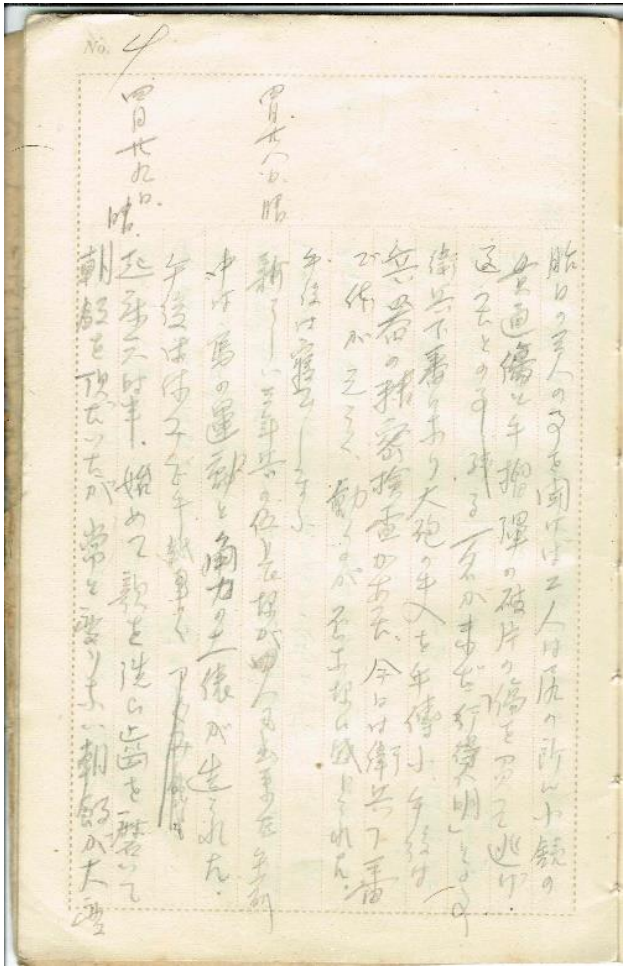
夕方前、支那人が１個５銭で卵を賣(売)りに来たので、２つ買ひ、飯にかけて食ったがうまかった。

【1938 年】４月 27 日　晴

今日朝から立哨してゐ(い)ると、昨日やった部落でドーンドーンと音がする。

聞けば昨日の敵が山砲を有し、工兵隊の部落に向けドンドン打ったのだと。

けれども此れは笑事にして相手にもしなかった。



昨日の 3 人の事を聞けば、2 人は尻の所に小銃の貫通傷と手榴弾の破片の傷を負って逃げ帰ったとの事。

残る 1 名が未だ「行方不明」との事。

衛兵下番になり、大砲の手入を手傳(伝)ふ。

午後は兵器の精密検査があった。

今日は衛兵下番で体がえらく、動くのが否(イヤ)な様に感じられた。

午後は寝てしまふ。

【1938 年】4 月 28 日　晴

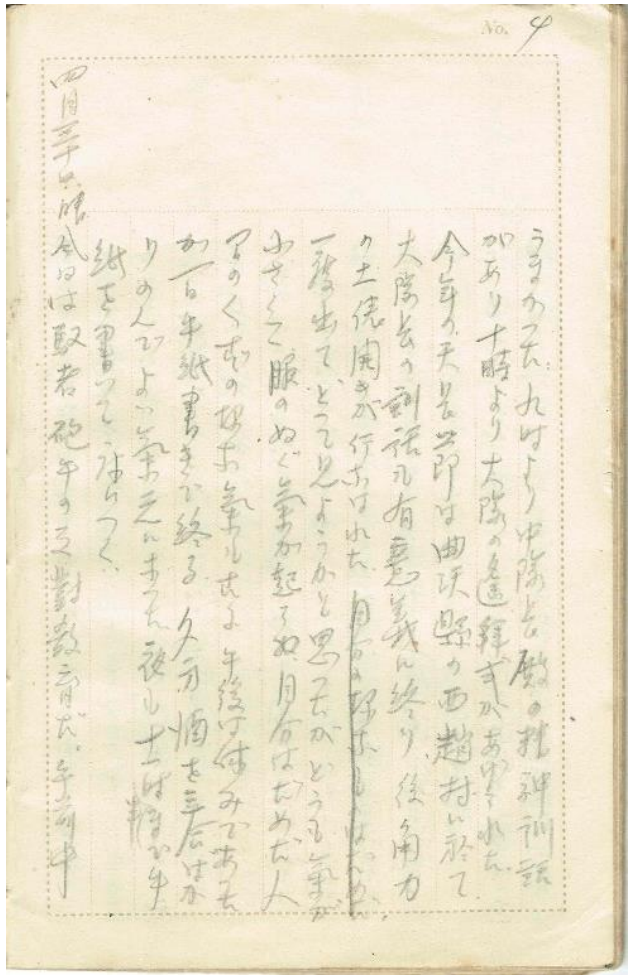
新らしい 3 年兵の伍長様が 4 人も出来た。

午前中は馬の運動と、角力(すもう)の土俵が造られた。

午後は休みで手紙【を】書く。

4 月 29 日　晴

起床 6 時半、初めて顔を洗ひ、歯を磨いて朝飯を頂だいたが、常と変りない朝飯が大変



うまかった。

9 時より中隊長殿の精神訓話があり、10 時より大隊の【皇居】遥拝式があげられた。

今年の天長節【昭和天皇の誕生日】は曲沃（きょくよく）縣の西趙村に於て大隊長の訓話も有意義に終り、後、角力（すもう）の土俵開きが行なはれた。

一度出て、とって見ようかと思ったが、どうも氣が小さくて服のぬぐ氣が起らぬ。

自分はだめだ、人間のくずの様な氣もする。

午後は休みであったが、1 日手紙書きで終る。

夕方、酒を 3 合ばかりのんで、よい機嫌になった。

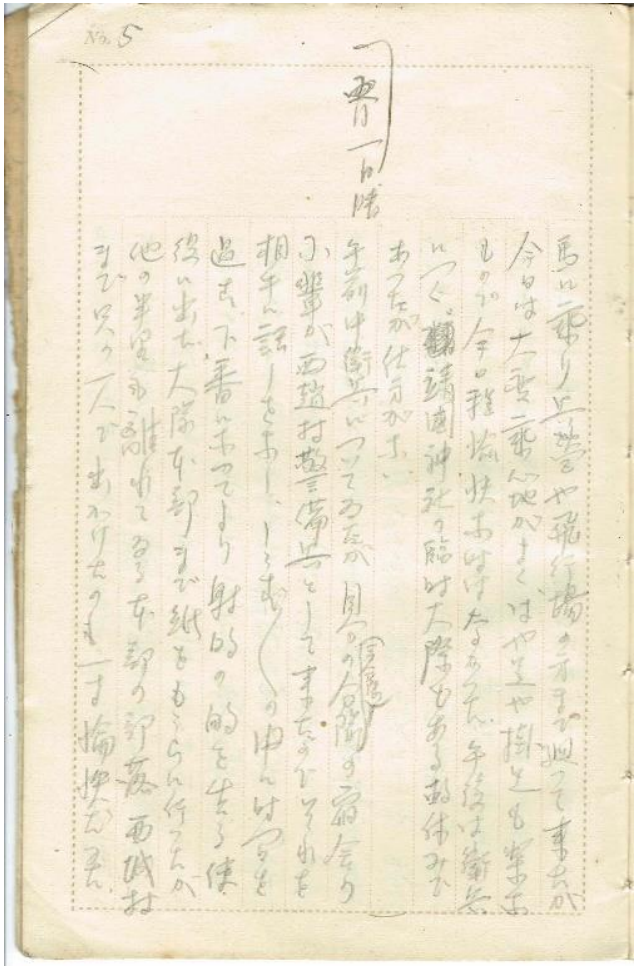
夜も 11 時半まで手紙を書いて床につく。

【1938 年】4 月 30 日　晴

今日は馭者、砲手の交對（対）【交替？】教育だ。

【「Ａの日記」A-15 頁の砲兵教育カリキュラムでは、「退營（営）期マデニ 砲手ニ對（対）スル馭者ノ教育ハ（※前馬・中馬・後馬の各 2 頭ずつのうち）中馬馭者タルノ程度ニ、馭者ニ對（対）スル砲手ノ教育ハ 照準手以外ノ砲手タルノ程度達セシム」とされていた】

午前中



馬に乗り、兵營(営)や飛行場の方まで廻って来たが、今日は大変乗心地がよく、はや足や駈足も楽なもので、今日程愉快な時はなかった。

午後は衛兵につく。

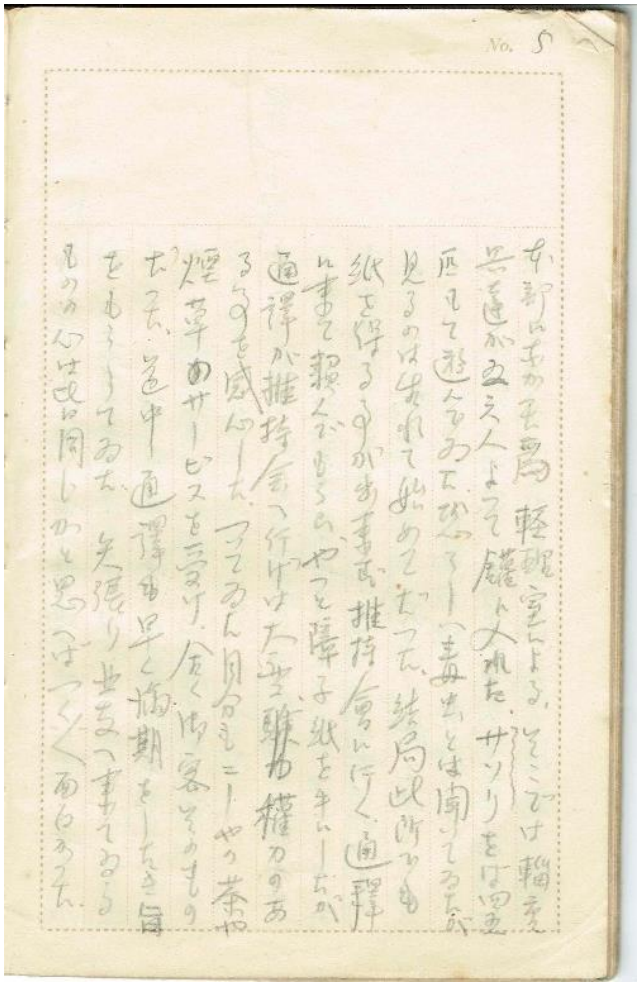
【本来なら今日は】靖國神社の臨時大祭である故、休みであったが仕方がない。

【1938年】5月1日　晴

午前中、衛兵についてゐ(い)たが、自分の分隊（【第】三分隊の）の宿舎の小輩が西趙村警備兵として来たので、それを相手に話しをなし、しらずしらずの中に時間を過す。

下番になってより、射的の的を造る使役に出た。

大隊本部まで紙をもらひに行ったが、他の半里【≒2ｋｍ】も離れてゐ(い)る本部の部落西城村まで、只の一人で出かけたのも一寸愉快だった、



本部になかった為、経理室による。

そこでは輜重兵達が５・６人よって、鑵に入れたサソリをば４・５匹、もて遊んでゐた。

恐ろしい毒虫とは聞いてゐたが、見るのは生れて初めてだった。

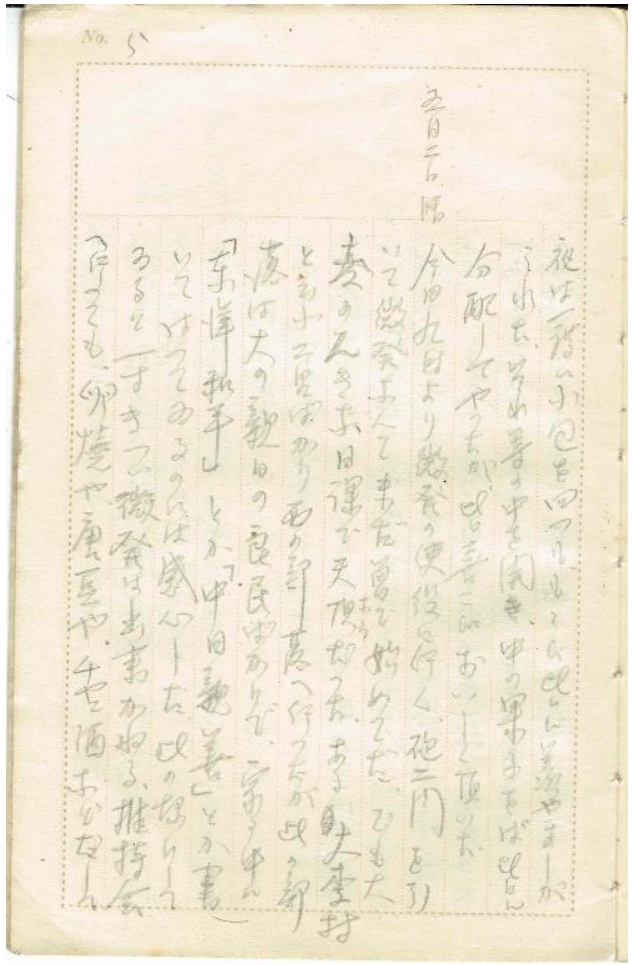
結局、此所でも紙を得る事が出来ず、維持會に行く。

通譯に来て頼んでもらひ、やっと障子紙を手にしたが、通譯が維持会へ行けば大変權力のある事を感心した。

ついてゐた自分もニーヤの茶や煙草のサービスを受け、全く御客そのものだった。

道中、通譯も早く満期【復員】をしたき旨をもらしてゐた。

矢張り北支へ来てゐるものの心は皆同じかと思へば、つくづく面白かった。



夜は一度に小包を４つももらひ、皆に羨やましがられた。

それ等の中を開き、中の菓子をば皆に分配してやったが、皆喜こび、おいしく頂いた。

【1938 年】５月２日　晴

今日９時より徴発の使役に行く。

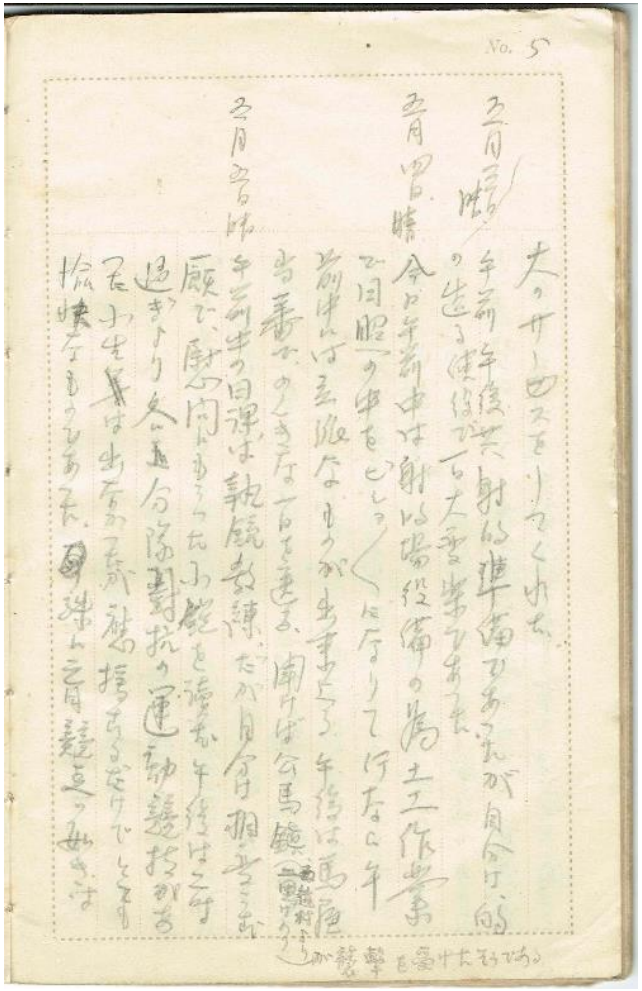
砲２門を引いて徴発なんて、未だ曾(かつ)て初めてだ。

でも大変のんきな日課で、天頂(テンホウ)だった。

ある大李村と云ふ２里ばかり西の部落へ行ったが、此の部落は大の親日の良民ばかりで、家の中に「東洋和平」とか「中日親善」とか書いてはって居(い)るのには感心した。

此の様にして居(い)ると、一寸きつい徴発は出来かねる。

維持会へ行っても、卵焼や唐豆やチャン酒などだして



大のサービスをしてくれた。

【1938年】5月3日　晴

午前、午後共、射的準備であったが、自分は的の造る使役で、1日大変楽であった。

5月4日　晴

今日午前中は射的場設備の為、土工作業で日照の中をビショビショになりて行なひ、午前中には立派なものが出来上る。

午後は厩当番で、のんきな1日を送る。

聞けば公馬鎮【候馬鎮（こうばちん）の誤りと思われるので、今後は候馬鎮に直して記載】（西趙村より2里【≒8km】ばかり）が襲撃を受けたそうである。

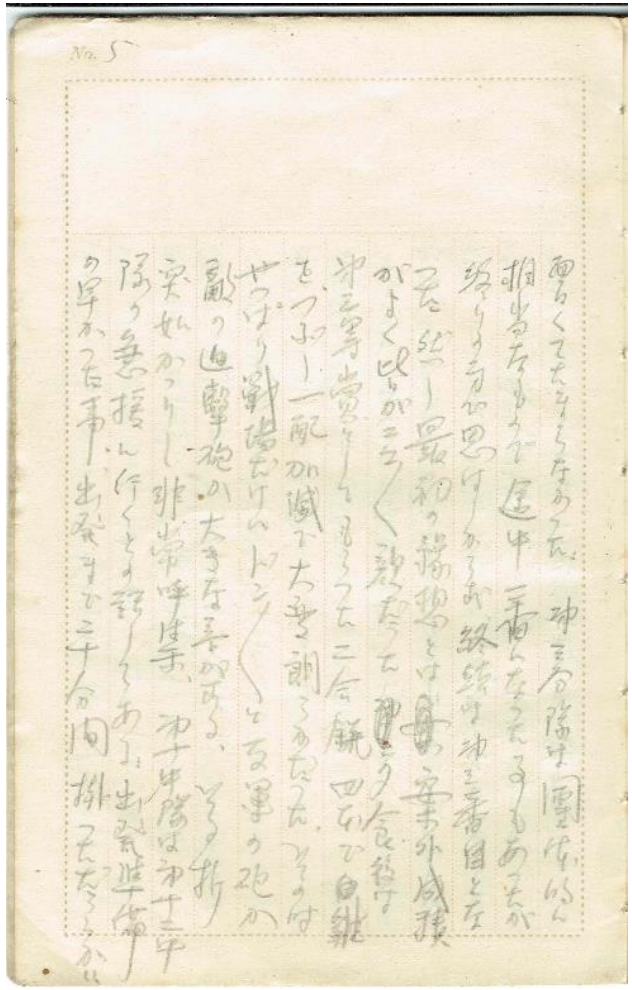
5月5日　晴

午前中の日課は執銃教練だが、自分は相変らず厩【番】で、慰問にもらった小説を讀（読）だ。

午後は2時過ぎより各分隊對（対）抗の運動競技があった。

小生は出なかったが、應（応）援するだけでとても愉快なものであった。

殊に盲競走の如きは



面白くてたまらなかった。

第三分隊は團体的に相当なもので、途中 1 番になった事もあったが、終りの方で思はしからず、終結は第 3 番目となった。

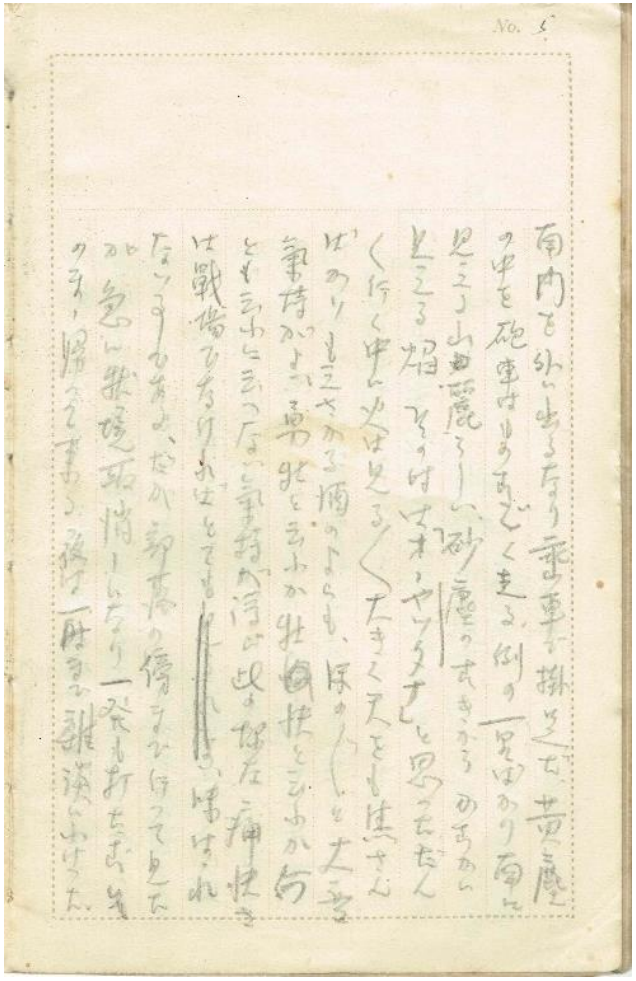
然し最初の豫想とは、案外成績がよく、皆がニコニコ顔だった。

夕食後は第 3 等賞としてもらった 2 合瓶 4 本で鶏をつぶし、一杯加減で大変朗らかだった。

その時、やっぱり戦場だけに、ドンドンと友軍の砲か、敵の迫撃砲か、大きな音がする。

その折、突如かゝりし非常呼集、第十中隊は第十二中隊の救援に行くとの話しである。

出発準備の早かった事、出発まで 20 分間掛っただろうか!!



南門を外に出るなり乗車で駆足だ。

黄塵の中を砲車はものすごく走る。

例の１里【≒4ｋｍ】ばかり南に見える山麓らしい。

砂塵のすきから、かすかに見える焔、その時は「オー、ヤッタナ」と思った。

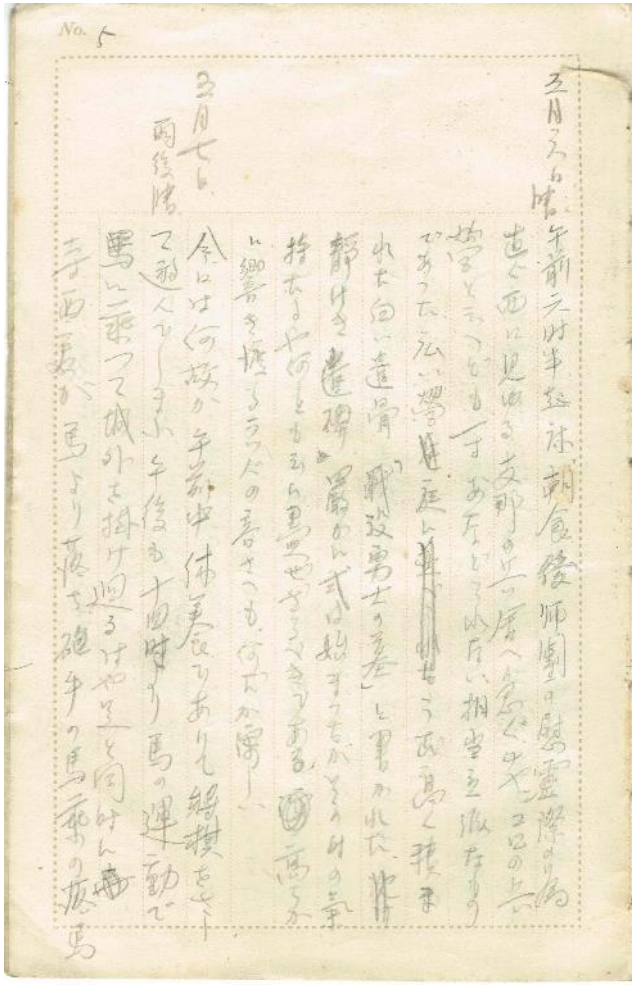
だんだん行く中に火は見る見る大きく、天をも焦さんばかり、もえさかる。

酒のよひも、ほのぼのと大変氣持がよい。

勇壮と云ふか、壮快と云ふか、何とも云ふに云へない氣持が浮び、此の様な痛快さは戦場でなければとても味はゝれない事である。

だが、部落の傍まで行って見たが、急に状境取消しになり、１発も打たず、そのまゝ帰って来る。

夜は１時まで雑談にふけった。



【1938 年】5 月 6 日　晴

午前 6 時半起床。

朝食後、師團(団)の慰霊祭の為、直ぐ西に見ゆる支那の兵舎へ急ぐ。

チャンコロの兵營(営)と云へども一寸あなどられない、相当立派なものであった。

広い營(営)庭にうず高く積まれた白い遺骨、「戰歿(没)勇士の墓」と書かれた静けき位牌。

厳かに式は始まったが、その時の氣(気)持たるや、何とも云ひ畫(画)ぜ【表せ？】ざるべきである。

高らかに響き渡るラッパの音さへも、何だか寂しい。

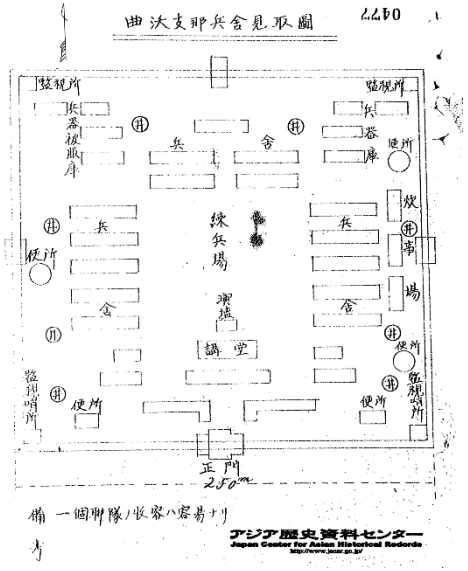
5 月 7 日　雨後晴

今日は何故か午前中休養であり て、将棋をさして遊んでしまふ。

午後も 14 時より馬の運動で、馬に乗って城外を掛け廻る。

はや足と同時に、寺西君が馬より落ち、砲手の馬乗の落馬

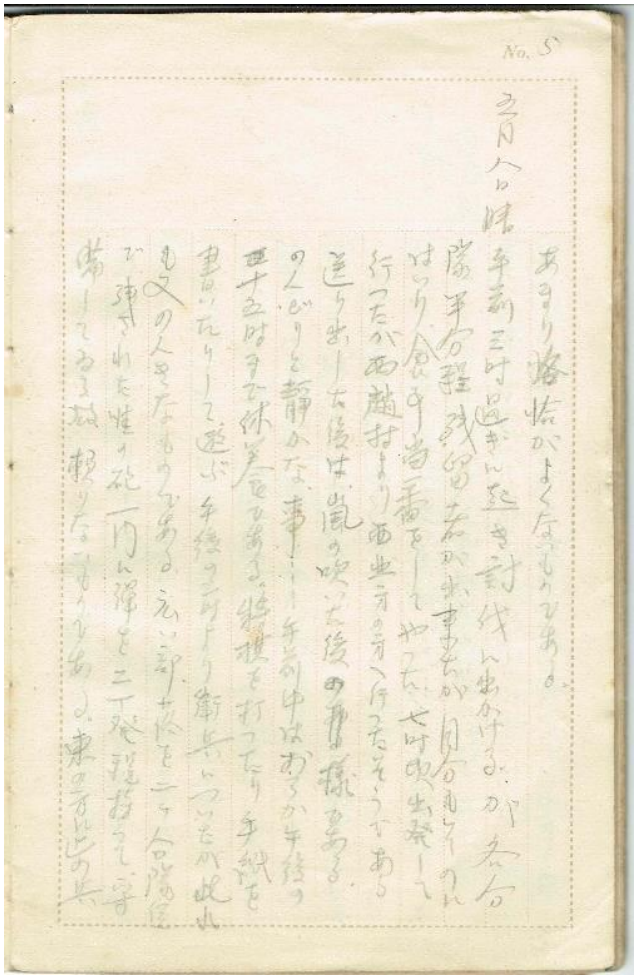
(参考)曲沃の第 20 師団司令部(元中国軍兵営)




［防衛省戦史叢書第 89 巻「支那事変陸軍作戦<2>」80 頁］（地図はD-33 頁を参照）

第 1 軍機密作戦日誌によると、第 20 師団では「5 月 6 日、南部山西曲沃ニ於テ、支那事變(変)勃發(発)以來ノ當(当)師團(団)戰歿(没)2 千 2 百柱及同軍馬 5 千 2 百餘(余)ノ慰靈祭ヲ實(実)施ス」とある。

［アジア歴史資料センターC11110970000 第 1 軍機密作戦日誌(防衛省) 画像 2、C04120729200 陸支受大日記(防衛省) 画像 7 枚目］



あまり格好がよくないものである。

【1938 年】5 月 8 日　晴

午前 3 時過ぎに起き、討伐に出かけるが、各分隊半分程、残留者が出来たが、自分もその【残留者】にはいり、食事当番をしてやった。

【討伐隊は】7 時頃出発して行ったが、西趙村より西北方の方へ行ったそうである。

送り出した後は、嵐の吹いた後の様である。

のんびりと静かな事…。

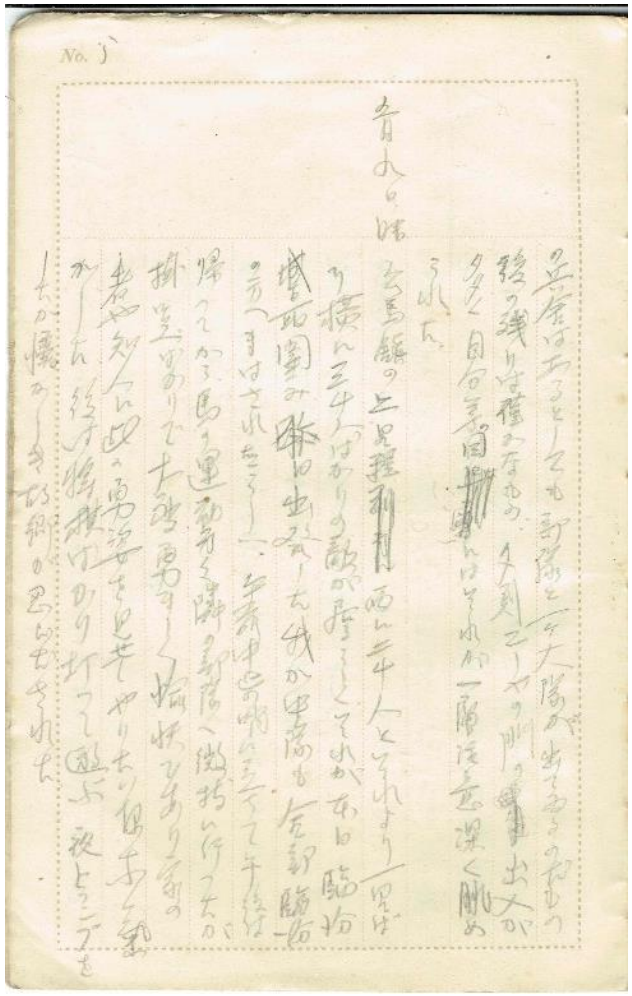
午前中はおろか、午後の 15 時まで休養である。

將棋を打ったり手紙を書いたりして遊ぶ。

午後の 2 時より衛兵についたが、此れも又のんきなものである。

広い部落を 2 ヶ分隊位で、残された唯の砲 1 門に弾を 20 発程持って、守備してゐる故、頼りないものである。

東の方に歩兵



の兵舎はあるとしても、部落と１ヶ大隊が出てゐ(い)るのだもの、後の残りは僅かなもの。

夕刻、ニーヤの門の出入りが多く、自分等の目にはそれが一層注意深く眺められた。

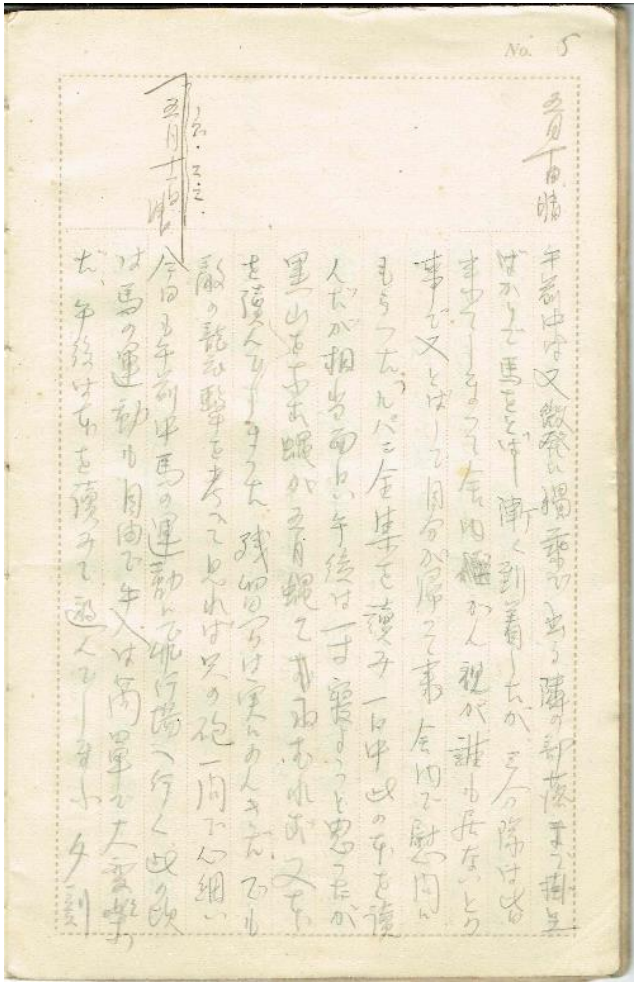
【1938年】５月９日　晴

候馬鎮(こうばちん)の２里【≒8ｋｍ】程西に、２千人と、それより１里【≒4ｋｍ】ば【か】り横に３千人ばかりの敵が居るらしく、それが本日、臨汾(りんふん)城を取圍(囲)み、昨日出発した我が中隊も、全部臨汾の方へまはされたらしい。

午前中、歩哨に立ちて午後は帰ってから馬の運動方々隣の部落へ徴発に行ったが、駆足ばかりで大変勇ましく、愉快であり、家の者や知人に此の勇姿を見せてやりたい様な氣(気)がした。

後は將棋ばかり打って遊ぶ。

夜、トランプをしたが、懐かしき故郷が思ひだされた。



【1938 年】5 月 10 日　晴

午前中は又徴発に獨(独)乗で出る。

隣の部落まで掛足ばかりで馬をとばし、漸(ようや)く到着したが、【第】3 分隊は皆来てしまって、舎内かん視が誰も居ないとの事で、又とばして自分が帰って来、舎内で慰問にもらった「ルパン全集」を讀(読)み、1 日中、此の本を讀(読)んだが、相当面白い。

午後は一寸寝ようと思ったが、黒山をなす蝿が五月蝿(うるさく)て、ねむれず、又本を讀(読)んでしまった。

残留間は実にのんきだ。

でも敵の襲撃を考へて見れば、只の砲 1 門で心細い。

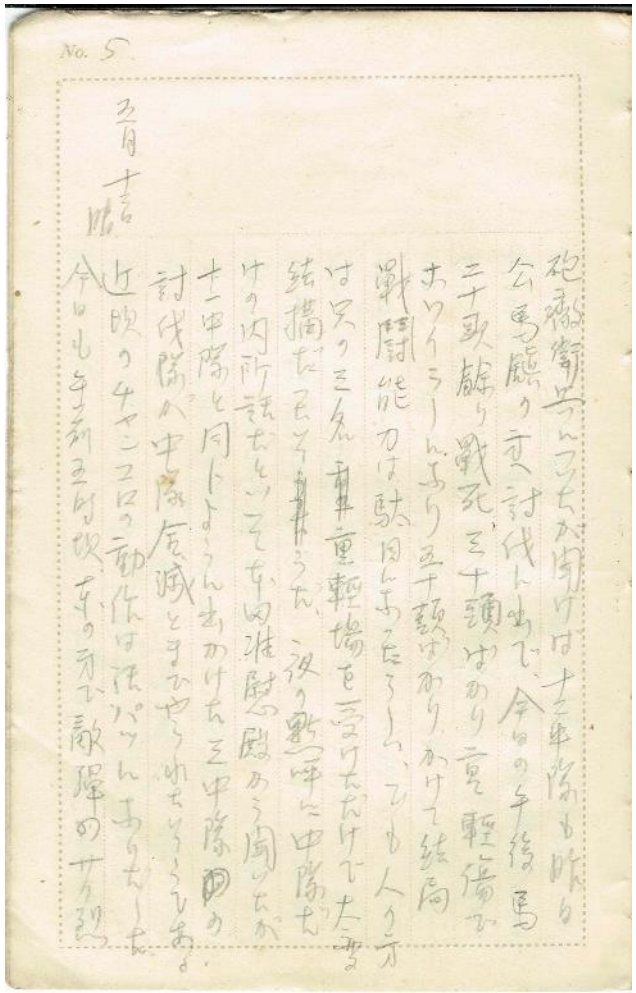
5 月 11 日　晴

今日も午前中、馬の運動に飛行場へ行く。

此の頃は馬の運動も自由で、手入は簡單で大変樂だ。

午後は本を讀(読)みて遊んでしまふ。

夕刻、



砲廠衛兵についたが、聞けば【第】十二中隊も昨日候馬鎮（こうばちん）の方へ討伐に出で、今日の午後、馬 20 頭餘（余）り戰死、30 頭ばかり重輕（軽）傷でホワイラー（壊了）【中国語で「壊れた」】になり、50 頭ばかりかけて、結局戰闘能力は駄目になったらしい。

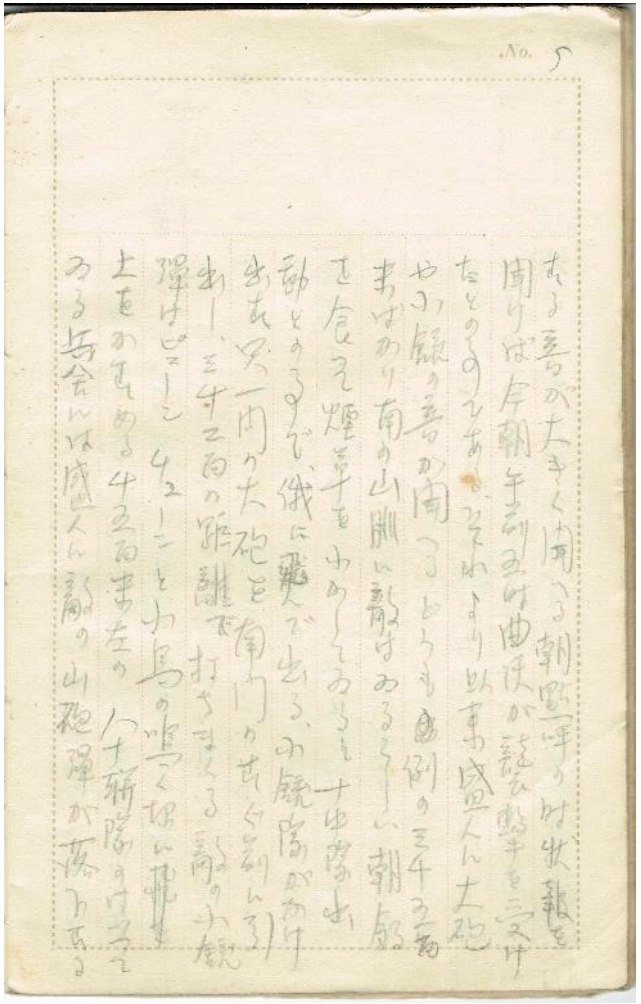
でも人の方は、只の 3 名重輕（軽）傷を受けただけで、大変結構だったそうだ。

夜の點（点）呼に中隊だけの内緒話だといって、本田准尉殿から聞いたが、【第】十一中隊と同じように出かけた【第】三中隊の討伐隊が、中隊全滅とまでやられたそうである。

【1938 年】5 月 12 日　晴

近頃のチャンコロの動作は活パツになりだした。

今日も午前 5 時頃、東の方で敵彈のサク裂



する音が大きく聞へる。

朝點呼の時、情報を聞けば、今朝午前５時、曲沃が襲撃を受けたとの事である。

それより以来、盛んに大砲や小銃の音が聞へる。

どうも例の３千５百米ばかり南の山脈に敵はゐるらしい。

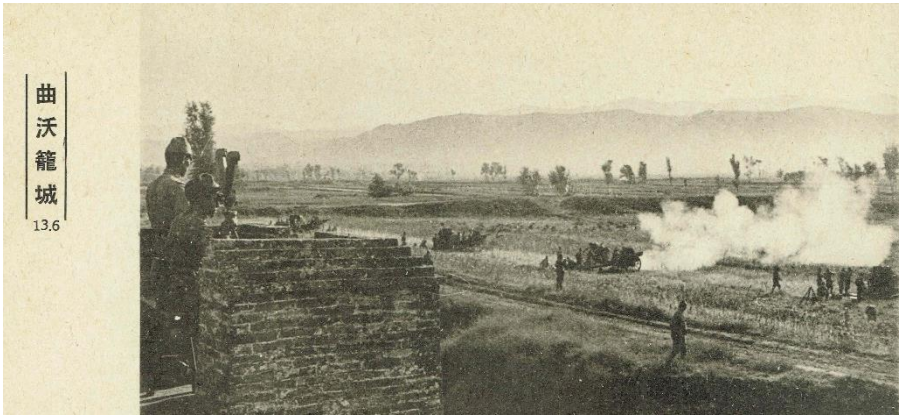
朝飯を食って、煙草をふかしてゐると、「【第】十中隊出動」との事で、俄に飛んで出る。

小銃隊がかけ出た。只１門の大砲を南門のすぐ前に引出し、３千２百の距離で打ちまくる。

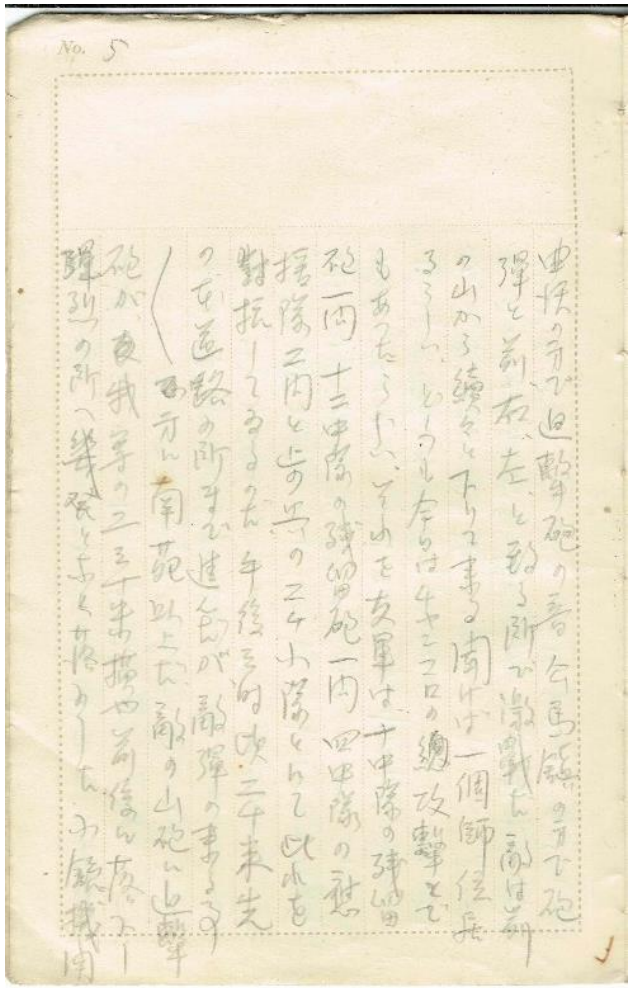
敵の小銃弾はピューン、チューンと小鳥の鳴く様に上をかすめる。

千５百米左の【歩兵第】80聯隊のはいってゐる兵舎には、盛んに敵の山砲弾が落下する。

（参考）曲沃城の第20師団司令部では６月まで籠城戦が続いた




［1940年10月発行の野砲兵第26連隊 写真集「征旅幾春秋」より引用］



曲沃（きょくよく）の方で迫撃砲の音、候馬鎮（こうばちん）の方で砲弾と、前、右、左と到る所で激戦だ。

敵は前の山から續（続）々と下りて来る。

聞けば１個師位居るらしい。

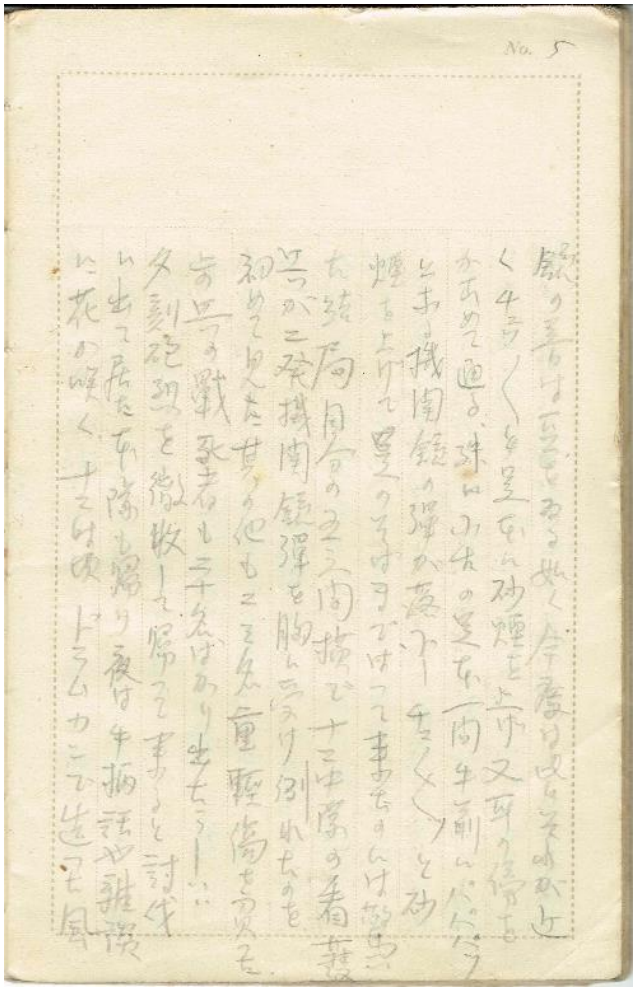
どうも今日はチャンコロの總（総）攻撃とでもあったらしい。

それを友軍は【第】十中隊の残留砲１門、【第】十二中隊の残留砲１門、【第】四中隊の應（応）援隊２門と歩兵の２ヶ小隊にて、此れを對（対）抗してゐ（い）るのだ。

午後３時頃、２千米（m）先の本道路の所まで進んだが、敵弾の来る事、来る事、まさに南苑【1937 年 7 月 28 日】以上だ。

敵の山砲に迫撃砲が、我等の２・３十米（m）横や、前後に落下し、段列の所へ幾発となく落下した。

小銃、機関



銃の音は豆をゐる如く、今度は皆それが近く、チュッチュッと足元に砂煙を上げ、又耳の傍をかすめて通る。

殊に小生の足元１間【≒1.8m】手前にパパパッとなる機関銃の弾が落下し、チュチュチュと砂煙を上げて、足のそばまではって来たのには驚いた。

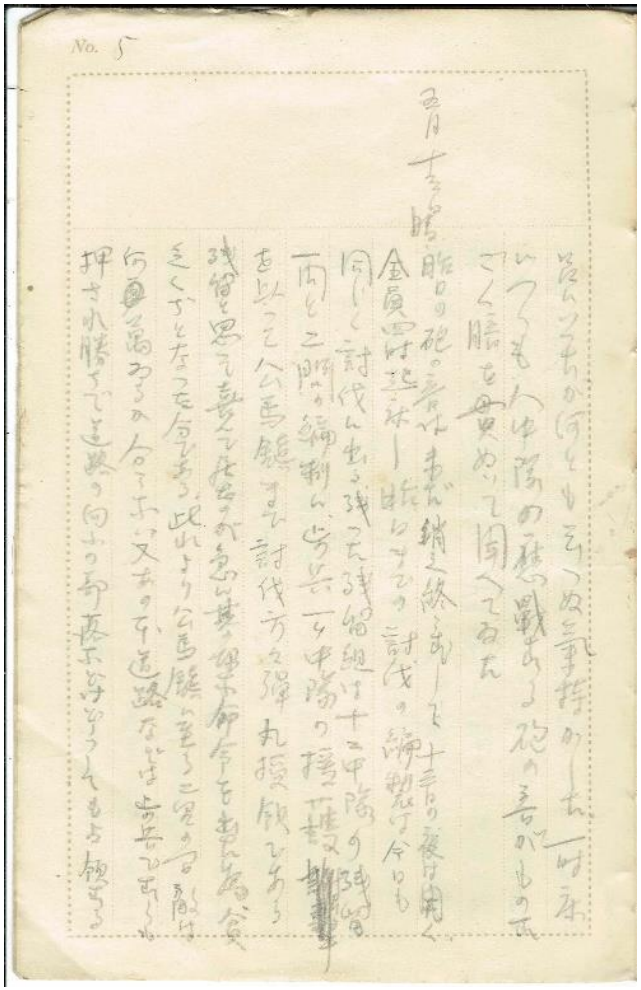
結局、自分の５・６間【≒10m】横で、【第】十二中隊の看護兵が２発、機関銃弾を胸に受け倒れたのを初めて見た。

其の外にも２・３名、重軽傷を負った。

歩兵の戰死者も 20 名ばかり出たらしい。

夕刻、砲列を撤収して帰って来ると、討伐に出て居た本隊も帰り、夜は手柄話や雑談に花が咲く。

12 時頃、ドラムカンで造った風



呂にいったが、何とも云へぬ氣(気)持がした。

1 時、床につくも、【第】八中隊の應(応)戰する砲の音がものすごく、闇を貫ぬいて聞へて居(い)た。

【1938 年】5 月 13 日　晴

昨日の砲の音はまだ消え終らずして 13 日の夜は明く。

全員 4 時起床し、昨日までの討伐の編成は今日も同じく討伐に出る。

残った残留組は、【我々第十中隊の 1 門以外に第】十二中隊の残留 1 門と、2 門の編成に、歩兵 1 ヶ中隊の援護を以って候馬鎮(こうばちん)まで討伐方々、弾丸受領である。

【討伐隊でなく曲沃に】残留【できる】と思って喜んで居たのが、急に其の様な命令を出た為、貧乏くじとなった分である。

此れより候馬鎮に到る 2 里の間、敵は何萬(万)居(い)るか分らない。

又、あの東道路などは歩兵ですらも押され勝ちで、道路の向ふの部落などは、どうしても占領する

【以下は、原文の次々頁冒頭部分の判読文】

【ダブリ】
す　る 事が出来ない。

【目指す】候馬鎮(こうばちん)其のものが、毎日襲撃を食って、至極危険である。

でも、命令【が】出た以上は仕方なく、午前 9 時頃、西趙村を出発する。

約千米(m)程進んで飛行場の所まで来れば、そろそろ敵の山砲が落下し始める。

前線では小機銃が豆をいる如くぱりぱりと鳴り通しだ。

【第】十二中隊の 1 門が 2・3 発射撃し、それより續(続)いて裏道をドンドン前進して無事候馬鎮に来る。

第１軍機密作戦日誌によると、5 月 13 日～14 日にかけて、第 20 師団から「曲沃（きょくよく）、候馬鎮（こうばちん）附近ニ有力ナル敵兵現出シ、攻撃執拗ナル。… 曲沃周圍（囲）ノ敵ハ、第 66 師・第 83 師・四川軍雑軍等ノ約 5 千ニシテ、山砲、迫撃砲ノ外ニ十二榴（※12 センチ榴弾砲）若干門ヲ有スルガ如シ」との報告がなされている。

当時は敵の鉄道破壊工作が激しく、第 20 師団は補給が困難に陥っていたようで、4 月 12 日に「師團（団）ハ目下極度ノ彈藥欠乏（欠）ニ陥リツヽアリ、彈藥（薬）列車ヲ編成シ、至急、既ニ請求セシ各種彈藥（薬）ヲ一挙ニ前送セラレ度（たく）、糧秣（りょうまつ）ハ副食物及馬糧欠乏（ばりょう欠）シアリ」と報告し、5 月 14 日には、「4 日以来、南行列車ナク、師團（団）ハ已ニ糧秣盡（尽）キントシアルモ、彈藥（薬）ハ更ニ欠乏（欠）甚シ」と報告している。また同日、第 1 軍の鈴木参謀は「介休縣（かいきゅう県）～洪同（こうどう）間ノ鐵（鉄）道破壊ハ毎日行ハレ、ソノ方法巧妙ニシテ、シカモ大ナル規模（キボ）ナリ。鐵（鉄）道部隊ノ異常ナル努力ニヨリ 3 日ニ 1、2 列車ヲ通シアルニスギズ…（※列車を集団運行する作戦もうまくいかず）目下介休縣駅ニハ 150 車停滞シアリ」と報告している。

しかし第一軍としては徐州（じょしゅう）での大作戦の一翼を担って手一杯になっており、第 1 軍機密作戦日誌には、次のように記されている。「(※第 1)軍(※の占領地守備任務)ハ徐州會（会）戦ノ支作戦ニシテ、第 20 師團（団）ハ更ニ其支作戦ナルヲ以テ、當（当）分ノ内、軍ハ第 20 師團（団）方面ニ大ナル手當（当）ヲ行フ能ハヌ。單ニ左ノ 2 件ノミ。

1．（※列車の）集団運行ヲ以テ介休、臨汾間ノ補給輸送ヲ行フ事。

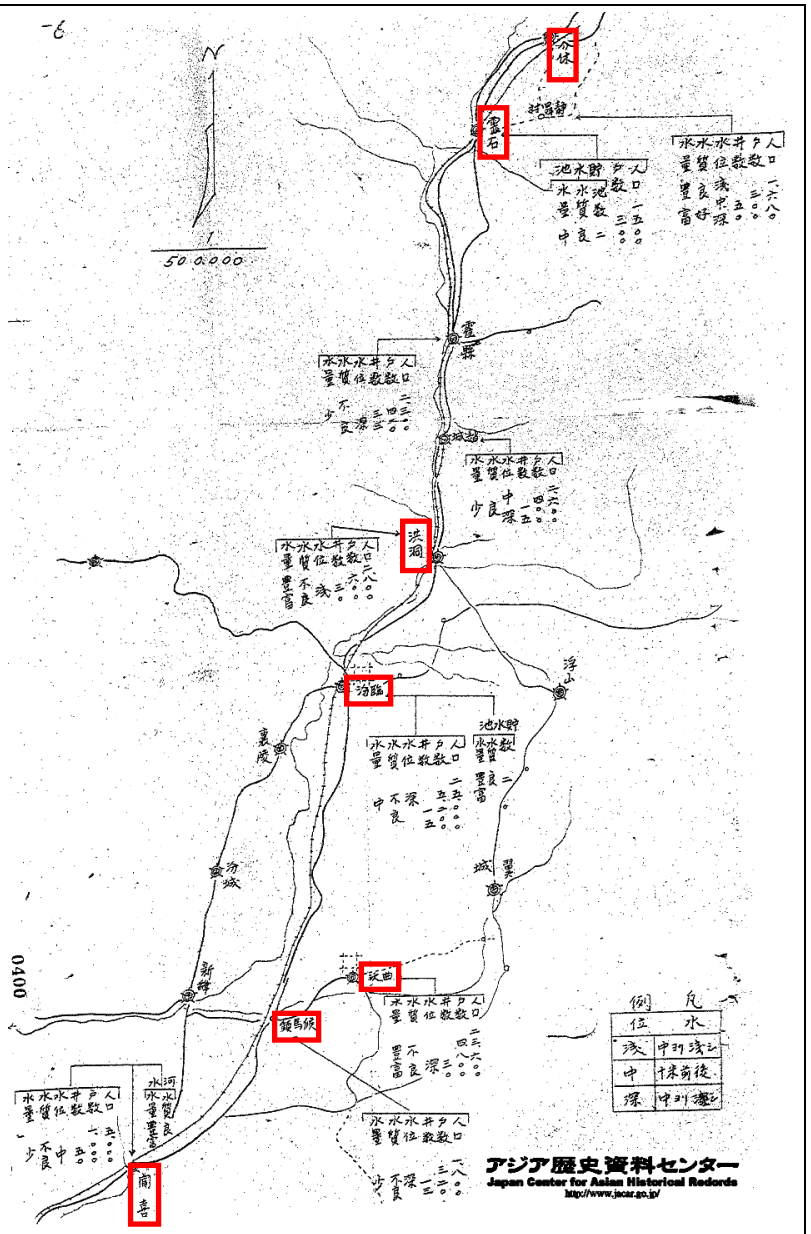
2．（※臨汾より南の曲沃などへは）為シ得ル限リ空中補給ヲ行フ事。」

そして、第 1 軍は列車集団運行を警護するため、第 109 師団の警備兵を乗せた装甲列車や藤田飛行団の航空機を手配する一方、北支那方面軍には空中投下による補給を要請するなどの対応を取った。

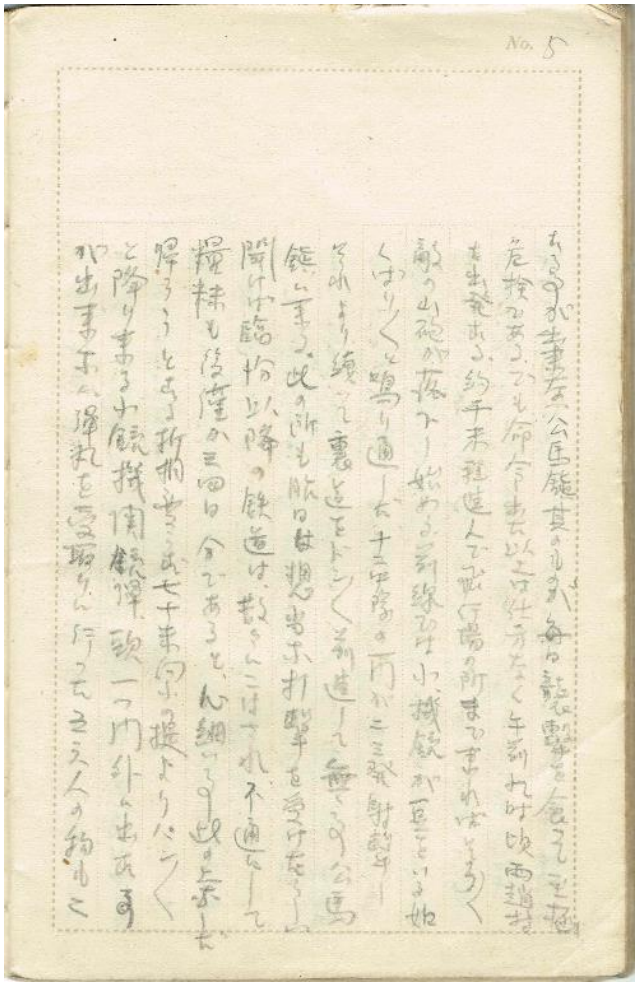
これに対して、北支那方面軍は「『スーパー』機ニテ…曲沃兵營（営）ニ 13 時頃到着シ、彈藥（薬）投下ヲ行ヒ、爾後数回反復スベキニ付、確実ニ布板ヲ出サシメラレ度」と回答、これが、日記の 5 月 16 日の記述にある空中投下であり、第 1 軍機密作戦日誌では「17,514發（発）（内 524發（発）は變（変）形）ヲ受領ス」と報告されている。

なお、第一軍の香月（かつき）司令官は「既占領地域ノ各兵團（団）ニ對（対）シ、支作戦方面ハ僅少ナル兵力ニテ我慢セザルベカラザルヲ以テ、之ニ勇氣（気）ヲ與（与）フル為」に各師団に訓示して、『徐州方面ノ敵軍主力ハ、各兵團（団）ノ果敢ナル進撃ニ依リ、完全ニ退路ヲ遮断セラレテ、將（まさ）ニ潰滅ニ陥ラントシ、今ヤ戦局ハ一轉（転）機ヲ畫（画）セントシツヽアリ。既占領地域ニ在ル軍内各兵團（団）ハ、刻下ノ情勢ニ鑑ミ愈々（いよいよ）勇戦奮闘…努ムベシ』と激励した。

［アジア歴史資料センターC11110970600 第１軍機密作戦日誌(防衛省) 画像 6～65 枚目、C11110970700 画像 9 枚目］




［山西省給水調査の図 C04120729000 陸支受大日記（密）（防衛省）画像 30 枚目］



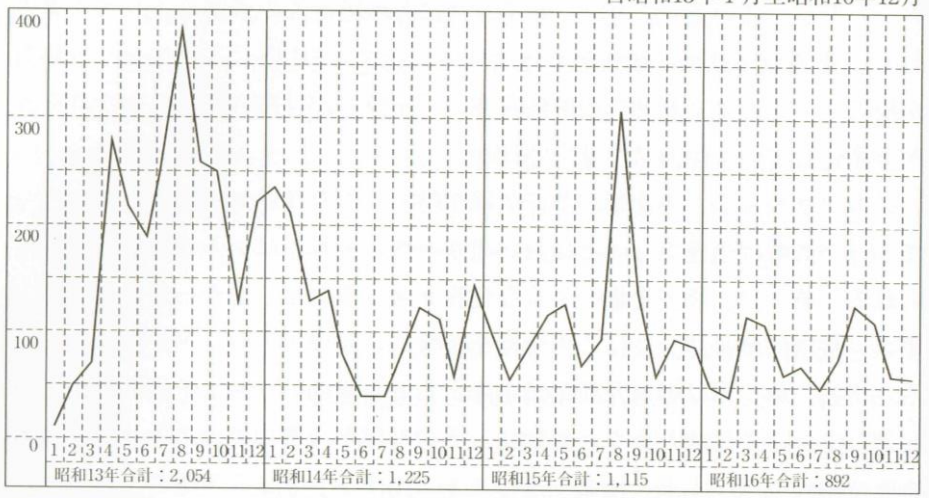
【原文の冒頭６行の判読文は前頁に記載、７行目以降の判読文は次頁に記載】

（参考）この頃、中国軍ゲリラによる鉄道の破壊活動が活発化した背景について、「日中戦争の軍事的展開」の第７章「華北の対ゲリラ戦、1939～1945―失敗の解析」で山本昌弘氏が解説されておられるので、引用してみる（192～3 頁）。

「対ゲリラ戦を等閑にした――ないしはせざるを得なかった――最大の理由は、中国大陸での全般的軍事情勢であった。日本軍は 1937 年 12 月 13 日に当時の首都南京を占領したものの、蒋介石は内陸部に拠点を移して抵抗を継続し、その軍事勢力は華中や華南のみならず、華北の一部にも残存していた。その国民党軍事力を弱体化ないしは消滅させて戦争終結への道を開くために、1938 年の春に徐州作戦を、夏には漢口と広東の攻略作戦を実施した。これらに参加するために北支那方面軍の一部が転用されていったが、そのために華北が手薄となり、その隙をついて共産軍を主体とするゲリラ勢力が交通線への攻撃を強めたのである。1938 年 1 月から 1941 年 12 月まで月毎に発生した鉄道へのゲリラ攻撃件数を方面軍がまとめたグラフにその事実は劇的に示されている。

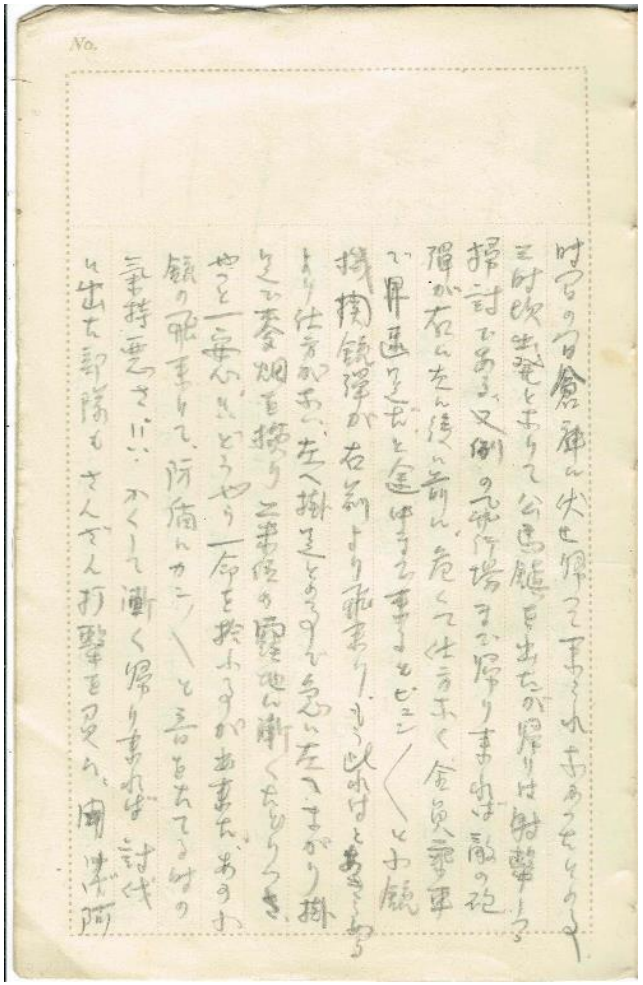
表１　北支那方面軍司令部「北支鉄道事故調査表」

自昭和13年１月至昭和16年12月




防衛庁戦史室所蔵

徐州作戦が開始された 1938 年 4 月の数値は前月に比べてほぼ 4 倍増えて 270 件を越え、同年 8 月に発生件数 370 以上となってピークを迎える。」



【冒頭５行は前々頁の原文末尾の判読文】

此の所も、昨日は相当な打撃を受けたらしい。

聞けば、臨汾（りんふん）以降の鉄道は散々にこはされ、不通にして、糧秣（りょうまつ）も後僅か３・４日分であると、心細い事、此の上なしだ。帰ろうとする折、相変らず70米（m）向ふの堤よりパンパンと降り来る小銃、機関銃弾、頭一つ門外に出す事が出来ない。

弾丸を受取りに行った５・６人の者も２時間の間、倉庫に伏せ、帰って来られなかったとの事。

３時頃出発となりて、候馬鎮（こうばちん）を出たが、帰りは射撃しつゝ掃討である。

又、例の飛行場まで帰り来れば、敵の砲弾が右に左に後に前に。

危くて仕方なく、全員乗車で速足だ。

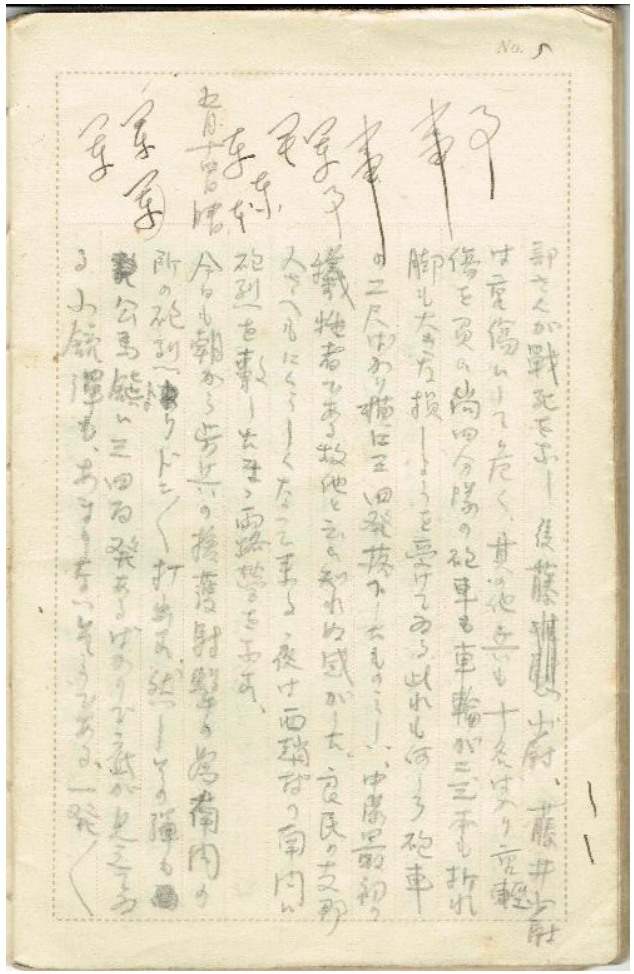
と、途中まで来るとピュンピュンと小銃、機関銃弾が右前より飛来し、もう此れはと、あきらめるより仕方がない。

左へ駆足との事で急に左へまがり、駆足【で】畑を横【切】り、2米（m）位の路地に漸くたどりつき、やっと一安心!!

どうやら一命を拾ふ事が出来た。

あの小銃の飛来りて、【砲車の】防盾（ぼうじゅん）にカンカンと音をたてる時の氣（気）持悪さ!!

かくして漸（ようや）く帰り来れば、討伐に出た部隊もさんざん打撃を負ひ、聞けば阿



部さん【1937 年 9 月 23 日の日記に出てくる人か？】が戦死をなし、後藤少尉、藤井少尉は重傷にして危く、其の他兵も 10 名ばかり重輕傷を負ひ、尚、【第】四分隊の砲車も、車輪が 2・3 本も折れ、【砲の】脚も大きな損しょうを受けてゐる。

此れも何しろ砲車の 2 尺【≒60ｃｍ】ばかり横に、3・4 発落下したものらしい。

中隊最初の犠牲者である故、他と云ひ知れぬ感がした。

良民の支那人さへもにくらしくなって来る。

夜は西趙村の南門に砲列を敷したまゝ露営をなす。

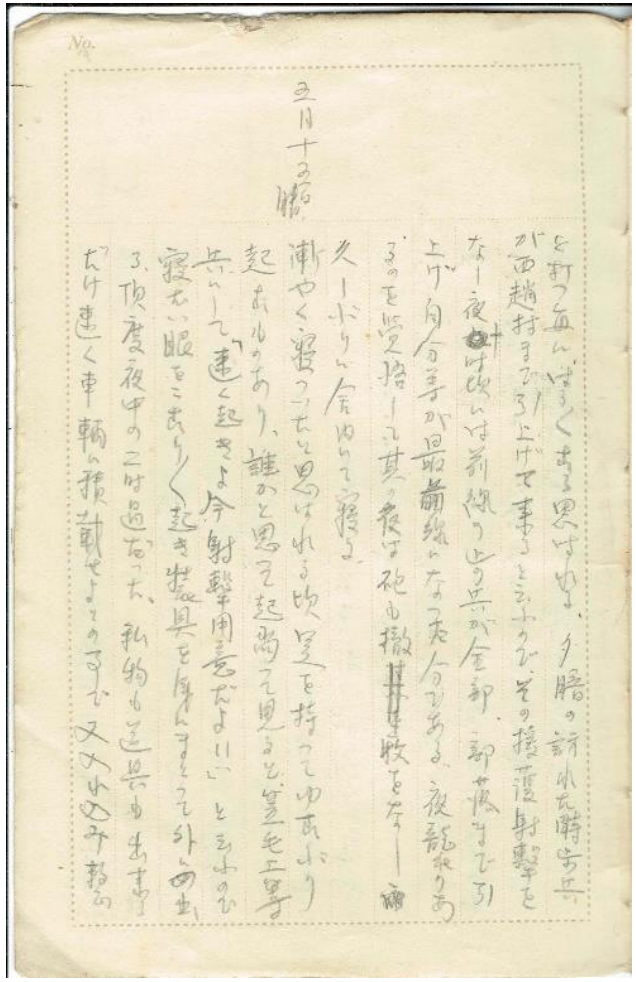
【1938 年】5 月 14 日　晴

今日も朝から歩兵の援護射撃の為、南門の所の砲列よりドンドン打出す。

然し、その弾も候馬鎮に 3・4 百発あるばかりで、底が見えてゐる。

小銃弾も、あまりないそうである。

1 発 1 発



を打つ毎に、はらはらする思はれる。

夕闇の訪れた時、歩兵が西趙村まで引上げて来ると云ふので、その援護射撃をなし、夜 10 時頃には前線の歩兵が全部、部落まで引上げ、自分等が最前線になった分である。

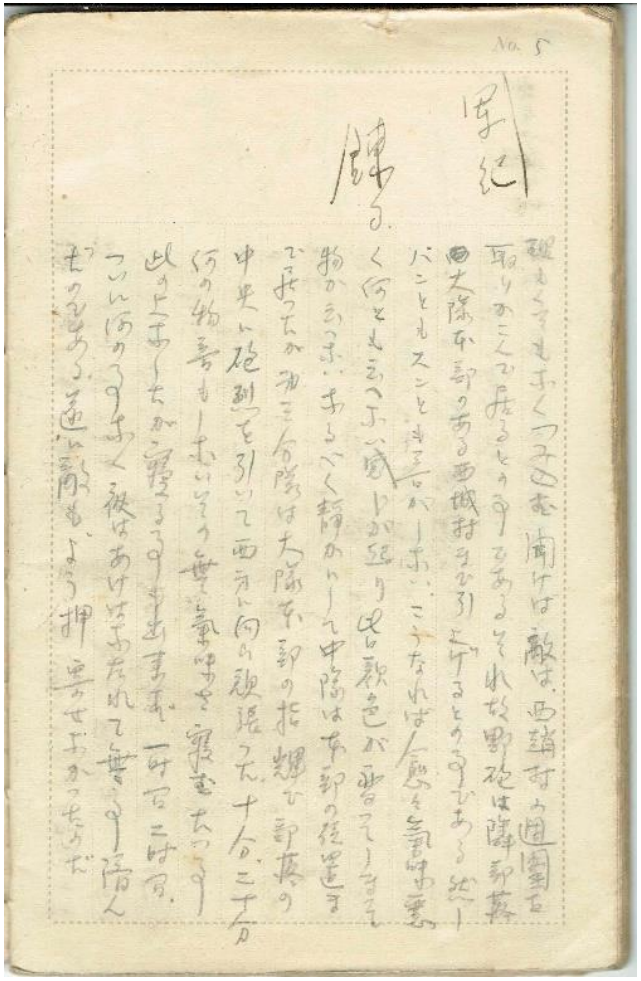
夜襲のあるのを覚悟して、其の夜は砲も撤収をなし、久しぶりに舎内にて寝る。

【1938 年】5 月 15 日　晴

漸やく寝ついたと思はれる頃、足を持ってゆすぶり起すものあり、誰かと思って起直って見ると、笠毛上等兵にして「早く起きよ、今、射撃用意だよ!!」と云ふので、眠むい目をこすりこすり起き、装具を身にまとって外に出る。

丁度、夜中の 2 時過だった。

私物も道具も出来るだけ速く車輌に積載せよとの事で、又入れ込み、整



理もくそもなく、つみ込む。

聞けば、敵は西趙村の周圍（囲）を取りかこんで居るとの事である。

それ故、野砲は隣部落、大隊本部のある西城村まで引揚げるとの事である。

然し、パンともスンとも音がしない。

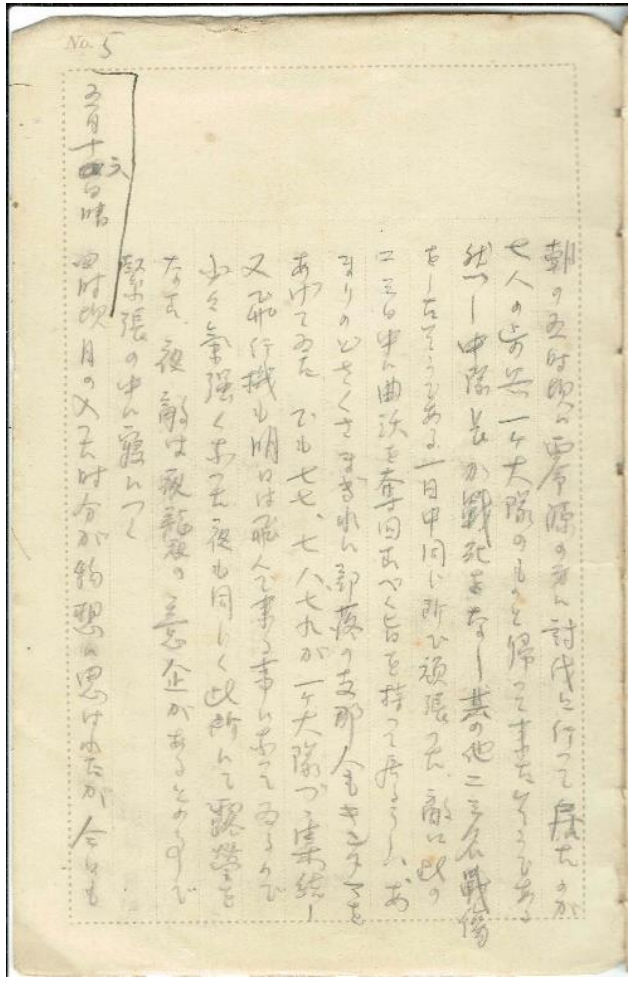
こうなれば愈々（いよいよ）氣（気）味悪く、何とも云へない感じが起り、皆顔色が変ってしまって、物が云へない。

なるべく静かにして中隊は本部の位置まで行ったが、【我々の】第三分隊は大隊本部の指揮で部落の中央に砲列を引いて、西方に向ひ頑張った。

10 分、20 分、何の物音もしない、その不氣（気）味さ。

眠たい事、此の上なしだが、寝る事も出来ず、1 時間、2 時間、ついに何の事なく夜はあけはなたれて、無事済んだのである。

遂に敵も、よう押寄せなかったのだ。



朝の５時頃に零源の方に討伐に行って居たのが７人の歩兵、１ヶ大隊のものと帰って来たそうである。

然し中隊長が戦死をなし、其の他２・３名戦傷をしたそうである。

１日中、同じ所で頑張った。

敵は此の２・３日中に曲沃（きょくよく）を奪回すべく旨を持って居るらしい。

あまりのどさくさまぎれに、部落の支那人もキンタマをあげてゐ（い）た。

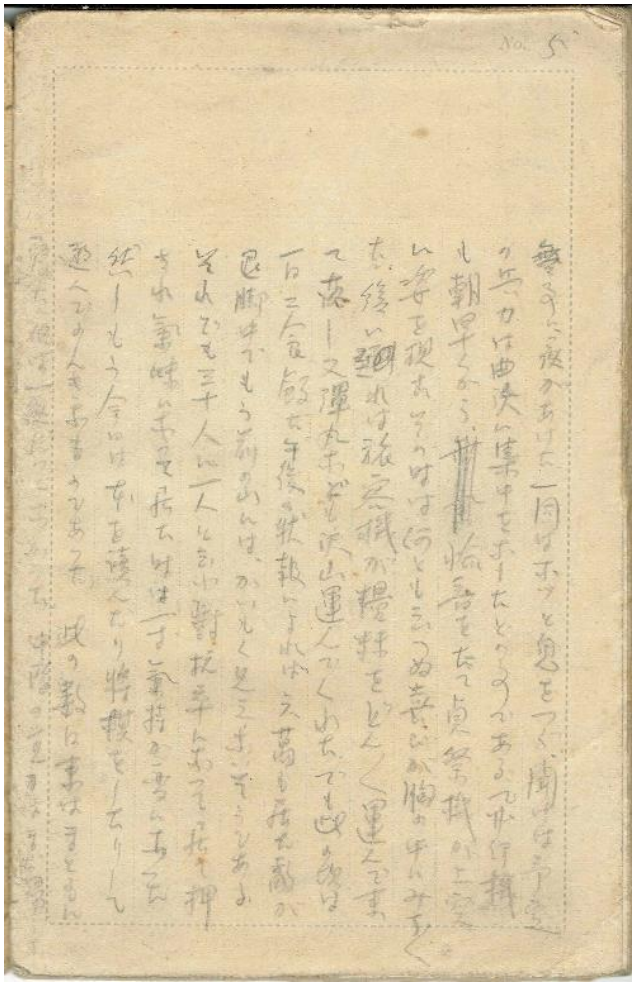
でも【歩兵第】77・78・79【連隊】が１ヶ大隊づゝ集結し、又、飛行機も明日は飛んで来る事になってゐ（い）るので、少々氣（気）強くなった。

夜も同じく此所にて露營（営）をなす。

夜、敵は夜襲の意図があるとの事で、緊張の中に寝につく。

【1938年】5月16日　晴

4時頃、日の入った時分が物騒に思はれたが、今日も



無事に夜があけた。

一同はホッと息をつく。

聞けば、予定の兵力は曲沃（きょくよく）に集中をなしたとの事である。

飛行機も朝早くから〇音をたて、偵察機が上空に姿を現す。

その時は何とも云へぬ喜びが胸の中にみちみちた。

後に至れば、旅客機が糧秣（りょうまつ）をどんどん運んで来て落し、又、弾丸なども沢山運んでくれた。

でも此の頃は１日２食飯だ。

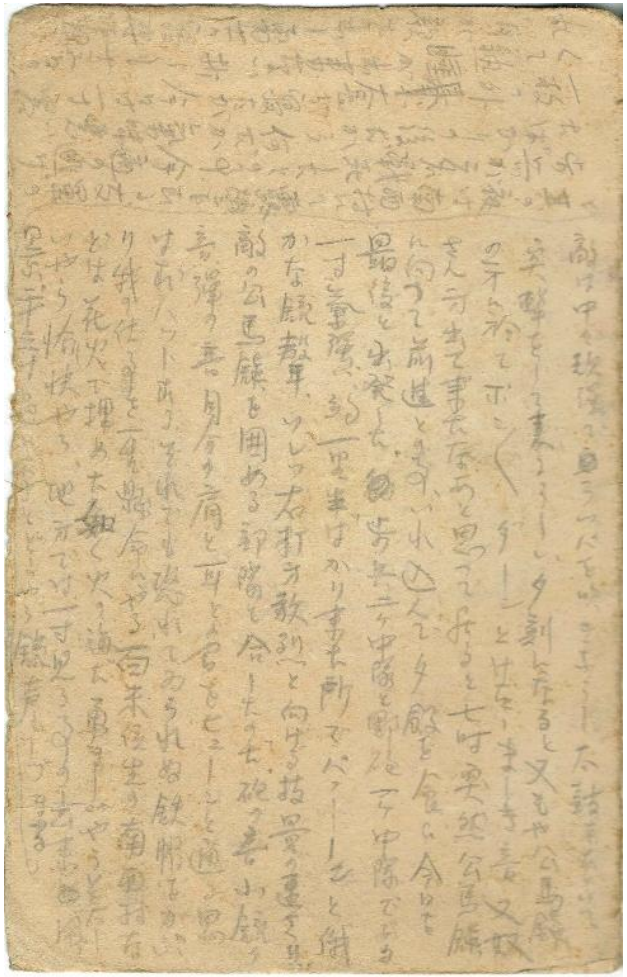
午後の情報によれば、6萬（万）も居た敵が退却中で、もう前の山には、かいもく見えないそうである。

それでも 30 人に１人と云ふ對抗（対）率になって居て、押され気味になって居た時は一寸氣（気）持が変になった。

然し、もう今日は本を讀（読）んだり、將棋をしたりして、遊んでのんきなものであった。

此の数日来は、まともに寝た夜は１夜だってなかった。

中隊の主力はまだ帰〇〇〇〇〇。



敵は中々頑強で、ラッパを吹きならし、太鼓をたゝいて突撃をして来るらしい。

夕刻になると、又もや候馬鎮(こうばちん)の方に於てポンポン、ダーンとけたゝましき音、又、奴(やっこ)さん方【が】出て来たなあと思って居ると、7時、突然候馬鎮に向って前進との事。

いれ込んで夕飯を食ひ、今日を最後と、出発した。

歩兵2ヶ中隊と野砲1ヶ中隊である。

一寸氣(ちょっと気)強い。約1里半【≒6ｋｍ】ばかり来た所で、パァーーンと俄かな銃聲(声)、ソレッ右打方放列と、向ける技量の速さ!!

敵の候馬鎮を囲める部隊と合したのだ。

砲の音、小銃の音、弾の音、自分の肩と耳との間をヒューンと通る。思はずハットする。それでも恐れて居(い)られぬ。

鉄帽をかぶり我の仕事を一生懸命にやる。

百米(m)位先の南西村【次頁の手書き地図に名前が見える】などは、花火で埋めた如く、火の海だ。

勇ましいやら、美しいやら、愉快やら、地方では一寸(ちょっと)見る事の出来ぬ風景。

23時過ぎになると、どうやら銃声もしづまる。

其の夜は南西村にて露営をする。

友軍の歩兵が2名戦死したとの事。

今、敵の逃げたばかりの後だから、何だか氣(気)味悪い。

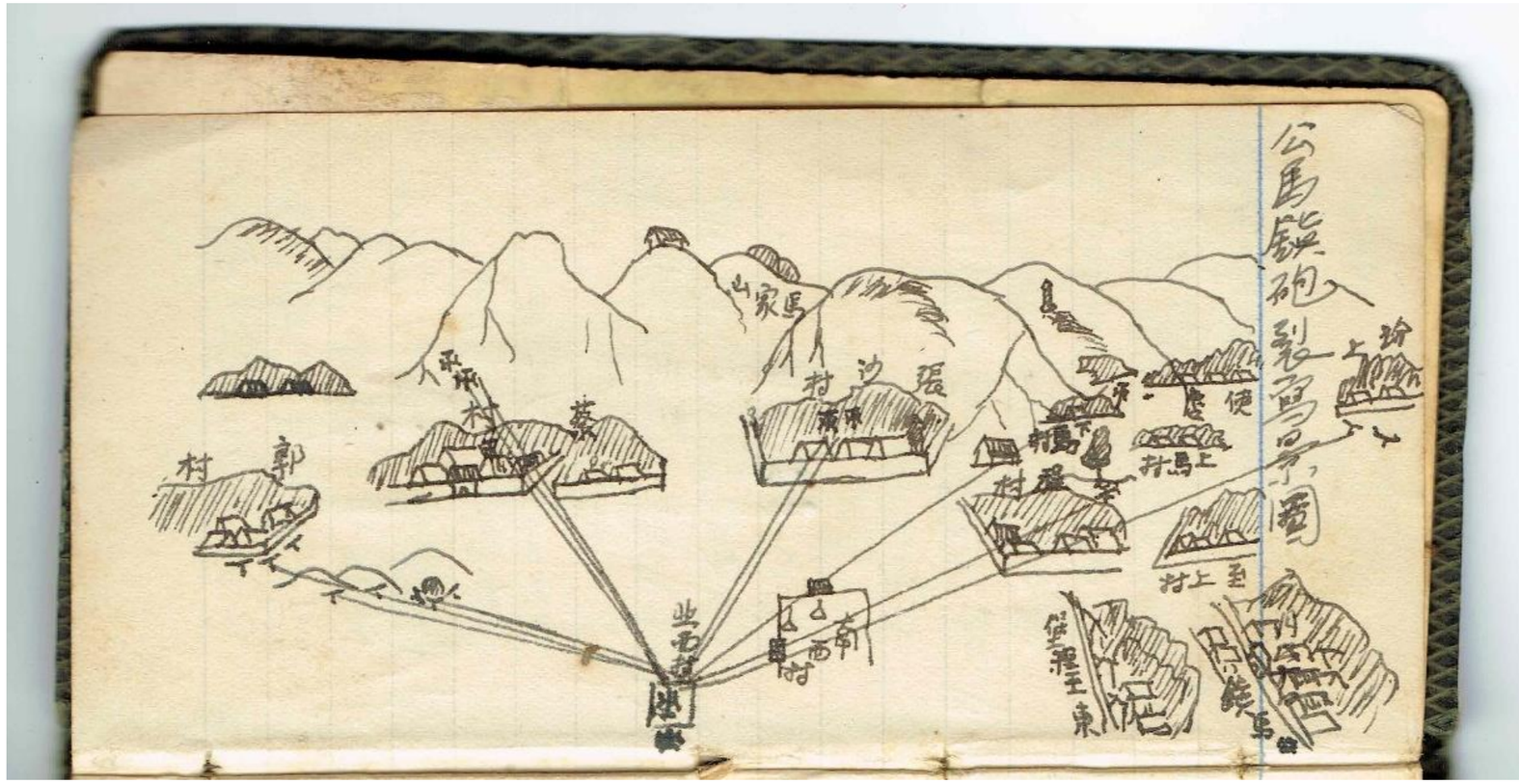
1枚の外套で寝たが、今日は一寸寒くて熟睡が出来ない。

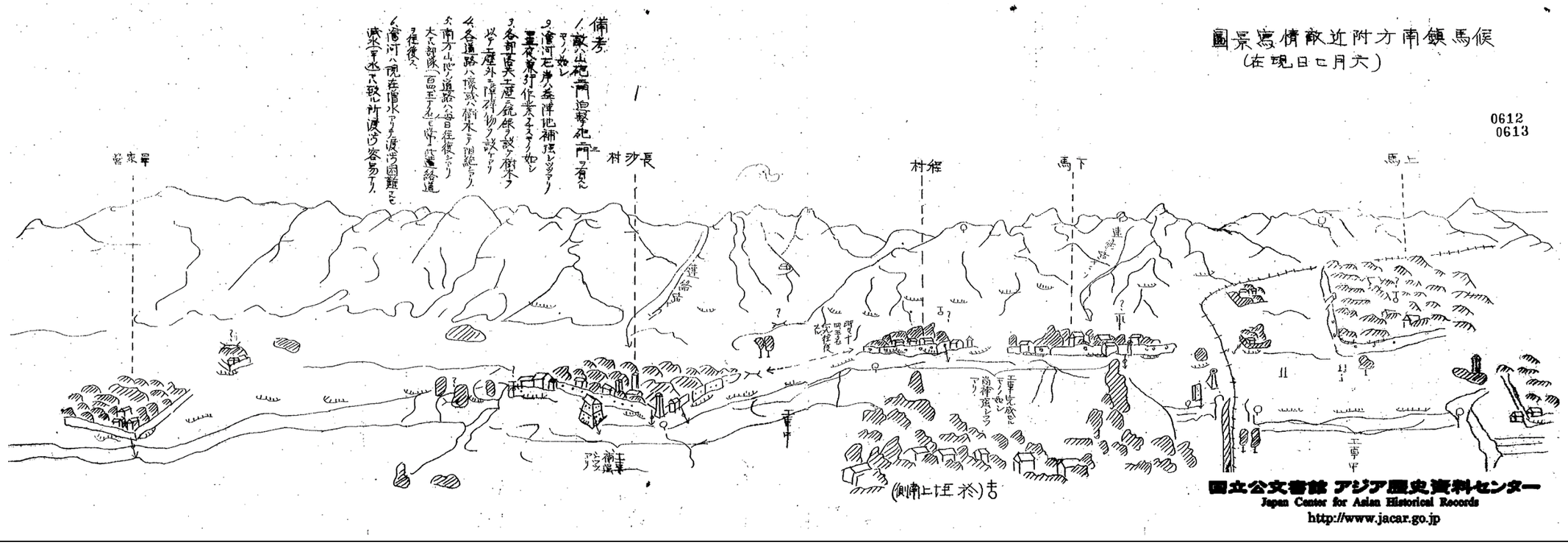
折しも十六日の丸い月が顔を出し、勇士の寝姿○○○。

【Ｄの日記はここで途切れている】

（参考）

【上】遺品中の黒い手帳に描かれた絵　「公馬鎭（※候馬鎭の誤り）砲列寫景圖」「北西村」に放列（出印）を敷いて、周囲の敵の放列からの集中攻撃に反撃している




【下】第１軍機密作戦日誌に収録されている「候馬鎭南方付近敵情寫景圖」。航空機より偵察したものか？敵の壕など防御施設の工事状況を書き込んである。

［アジア歴史資料センターC11110971700 第１軍機密作戦日誌(防衛省)　画像 30～31 枚目を加工］